
バカとテストと常識人?

桜餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと常識人？

【Nコード】

N7991M

【作者名】

桜餅

【あらすじ】

振り分け試験を悲しい事件で休んでしまいFクラスとなってしまうた宮村有馬。

そんな彼がバカテストの個性的なメンバーと織りなす感動的なストーリー？

…や、感動はないかもしれませんが、とりあえず面白そうな物語書くつもりなのでよろしくしていただけると嬉しいです。

あと、評価やお気に入り登録してくれると作者が喜びます。

プロローグ

というわけで、今日から新学期。

や、まあ、正確には二日ほど前からなんだそうだが。

早いものでこの文月学園での2回目の春を迎えた。

この文月学園には、他の学校とは違うシステムが備えられている。

『試験召喚獣システム』と呼ばれ、科学とオカルトと偶然によって完成させられたそう。

このシステムは自分のテストの点数に応じた召喚獣が現れ、それで戦ったり、先生とかだと荷物を運ぶこともあったらしい。

そっぴゃあ、あいつは『観察処分者』だから、あいつも物体に触れることができるんだっけ。

あ、あと他にもうちの学校は上限なしのテストで一時間という制限時間でどれだけ取れるかっていうことになっている。

つまり、とればとれるだけ召喚獣を強くできるんだな。強く、といつても見た目は同じで能力が変わるだけだぞ？

そして最後に、『試験召喚獣戦争』（通常は試召戦争と呼ばれる）というシステムも導入されている。

これを説明するのはだなー、まあ、面倒なわけですが…

とりあえずうちの学校は成績順にA〜Fまでクラス分けされている。そして成績のいいクラスほど設備がよく、悪いクラスほどひどい。

そうなっているんだよ。

Aクラスの設備はとても良いそうだな、まだ見てないから何ともいえないが。

まあ、そういう設備に不満もあるやつもいるだろう、ということでのこのシステム。

『試験召喚獣』を使って他クラスと『戦争』し、クラスの代表者に打ち勝ち、そのクラスを奪い取れ！とそういうことになっている。

つまり、勝てば相手のクラスを奪い取れるから、よりよい設備を目指したいなら勉強して打ち勝ってみろ、とそういう学校側からの挑戦的な、そんな感じ。

それで、俺はこの試験校だからという学費の安さで通っているのでした。

んで、俺のクラスはっていうとー…

そうだな、再テストを受けない限りFクラスになる。

つまり、簡単にいえば振り分け試験を休んだため、0点なんだな、これ。

ちよつと事故というかんていうか、とりあえず悲しい事件があったんだよ、うん。

入院してた。

そんな俺、みやまむしあひじま宮村有馬の物語、はしまりはじまり〜ってね。

前書き

えと、みなみなさまはじめまして、桜餅でございます。

今回はこのような駄作（？）を読んでいただけるとは光栄至極でございます。

まず、私こと桜餅はド素人ですので、下手でも気にしないでください。

ついでに、原作キャラと主人公をくっつけますのでいやな方は見ない方がいいかも？

主人公の設定とかがって書いた方がいいんですけどね？

あんまし考えてないけど。

とりあえずこんな感じ

名前／宮村有馬みやむらありま

性別／男（まれにおとこの娘になるかも？）

所属クラス／Fクラス

A型／172？／58キロ

とりあえず木下姉妹（ホントは姉弟？）とは幼馴染という設定。

本来であればFクラスということはあり得なかったが悲しい事情で入院してしまいFクラスへ。

また、新学期も二日ほど休んでいて試召戦争はBクラス戦からの登場。

明久、雄二、ムッツリーニ、島田とは元々同じクラスだったため、結構仲良し。

彼女はー…現在募集中ではあるが好きな人はいるらしい。
容姿は中性的であるが、基本的には格好いい部類である。
変装は結構得意な方である。

性格はー、まあ、見てったらわかると思う。

べ、別に説明が面倒になったから終了とか、そんなわけじゃないですから。

…ホントですよ？

とまあ、適当な作者ですが、楽しんでもらえたら行幸です。

1話目。しかし、原作では6問目に匹敵します。（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

「調理の為にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である。

合金の例：ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋の答え

問題点：ガス代を払っていなかったこと。

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

合金の例：未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても……

宮村有馬の答え

問題点：前回の仮面ライダーを録画し忘れたこと

合金の例：ダブルドライバー

教師のコメント

どこに突っ込みを入れればいいのかわかりませんが、先生は録画しているので今度見に来ますか？

1話目。しかし、原作では6話目に匹敵します。

明久SIDE

昨日一昨日でDクラス戦と姫路さんのお弁当事件（秀吉、本当にありがとつ！）が終わり、今日はBクラス戦ということになる。

だけど、今日は新学期から何らかの事情で休んでいた生徒が来るらしいということさつき雄二から聞いた。

誰だろう？女の子かな？これ以上むさい男はいらないね。などと考えていると噂の編入生（になるのかな？）が先生に呼ばれ、姿を現す。

「…えっ？」

僕は驚いた。

いや驚いてるのは僕だけじゃない、クラスのほとんどが驚いている。

「えっと、はじめまして？そうじゃない人はおはようございます、宮村有馬です。一身の都合上で本日よりお世話になります。よろしくお願ひします。」

有馬は、そう挨拶していた。

「はい、何か質問はありますか？」

という先生の問いに拳手が殺到。先生が適当な生徒をあてる。

「えっと、なんでここにいますか？」

先日も似たような質問を聞いたね、姫路さんのときに。
有馬も姫路さんと同じようにAクラス相当の力を持っているのだ。

「あ〜つと、ちょっとその、事故っていうかなー？うん悲しい事件
がありました、入院してたため、振り分け試験を受けられなかったん
です。」

有馬は知らない人だからかしつかりと丁寧に話す。

まあ、基本的に有馬は僕と同じように他の人とは違って普通だから
ね。

…え、なんか変なこといった？

とりあえず、有馬は僕の…僕たちの親友で、去年はいろいろしてた
気がすることを伝えておこうと思う。

有馬の答えに納得したのかみんなが色々なことをいう。

「あ〜、俺もよ、テスト前日に（ゲームの中で）彼女が事故にあっ
ちまってよ。」

「黙れ2次元オタク。」

「俺も、弟が事故に合ったって聞いて…。」

「黙れ一人っ子。」

「実は俺、あのとき彼女に刺されてて…。」

「黙れこの彼女いない歴〃年齢男。ヤンデレには手を出すなといっ
も言っておるだろうが。」

1人、突っ込みを頑張ってる人もいるね。

というか、このクラスはやっぱりバカばかりじゃないか。

質問が終わり、有馬が席に着く。
雄二の横の席だ。

「おいつす、雄二。今年も世話になる。」

「いや、こちらこそ頼む。お前がいてくれるとは、ありがたい誤算だよ。」

「ん？どういことだ？」

「まあ、あとで話す。」

HRが終わり、有馬と雄二が話している。

そこに、僕と秀吉、ムツツリーニ、島田さん、そして姫路さんが駆け寄る。

「やあ、有馬。まさか君がFクラスに来るなんて思ってもみなかったよ。」

「まあな。入院してたんだ、しょうがないだろ？お前と違って実力ではいったわけじゃない。」

「わしは知っておったがの。」

「…お前が知らないわけがないだろ。」

どうやらわけありのようだ。

そうそう、この二人は幼馴染で…幼馴染！？

「有馬、君のことは友達だと思っていたのに…」

「なんだよ、いきなり。どうかしたか？」

「有馬、いつものことだ。放っておけ。大方、お前と秀吉が幼馴染つてのを思い出したんだろ？」

「ん〜、それもそうだな。そうする。」

くそう、僕の秀吉をとるなんて、憎いぞ！宮村有馬！本来ならつかみかかっているところだが、先日まで入院してたのにここでやったらまた病院に逆戻りということとで雄二に止められ、納得してしまっ

た。
…いつか、必ず…

1話目。しかし、原作では6問目に匹敵します。(後書き)

えっと、なんかごめんなさい

文章構成とか、上手くないですね

素人ですので、と言いつつ訳します

でも、これから頑張っていこうと思つので、応援してくれると嬉しいかも

2話目。 試召戦争？上等じゃん！（前書き）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまうこと
- (2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

(2) 泣きつ 面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか。

宮村有馬の答え

(1) 犬も歩けば棒に当たる

(2) 泣きつ 面に蜂

教師のコメント

君が普通に間違っなんて珍しいですね。

(2) は正解ですが、(1) は『余計な行動をしては痛い目に合う』
という意味です。間違えて使う人もいるらしいのですが、気を付け
てくださいね。

2話目。試召戦争？上等じゃん！

有馬 side

「大体わかった。」

俺は某10周年ライダーの口癖を使う。

雄二からの話の内容はこうだった。

『明久が姫路がこんなクラスだとかわいそうだと思おうと思ってな、Aクラスと試召戦争をしたいといいはじめたんだ。』

「まあつまり？明久の愛しの姫路がこんな設備かわいそうだ。ましてや実力ではなく、高熱ということでおかしいと、そういいたいわけだろ？それで、愛しの姫路さんをもっとマシな設備…できれば本来彼女がいるべきAクラスの設備にしたいと。なるほどね。」

近くで明久が「そ、そんなんじゃないんだらねっ！」とわかりやすく、ちよつとツンデレのはいったセリフを口にするが無視。

「オツケー、俺に任せろ！俺っちに任せりゃそれくらい何とかかなるぜ。」

「ああ、期待してるぞ、有馬。とりあえず、今日はBクラス戦だ。補充テストを受けてこい。お前、今0点扱いだろ。」

「ああー、そうだったなー…。くそっ、面倒だな、あいつのせいで…。」

「…そういやお前、悲しい事件って何だ？どうして入院してた？」

「あーっと、それはまた今度な？とりあえず、テスト受けようぜ？」

「…まあいいさ。おかげで即戦力になるやつがうちのクラスに入っ
たんだ。」

とりあえず俺たちはテストを受けた。

~~~~~

テスト終了。全科目終了。うえっし、超疲れた。

とりあえず、飯を食おう。

「有馬、お前次のBクラス戦は大丈夫か？」

雄二が声をかけてくる。

「問題ないね、特に化学は最高潮の出来。」

しっかり答えつつ、自作弁当を頼張る俺。

今日も今日とて上手いな、さすが俺。

「有馬…」

…なにやらじっと見つめられている。

振り向くと吉井明久がご飯を食べたそんな眼でじっと見ている。

「ご飯をあげますか？」

はい  
いいえ

「有馬、それはひどいよ。そんだけあるんだから少しぐらい分けてくれたって…」

まあ、確かに量はたくさんだな。  
3人分だし、普通の人なら。

「ちつ、おい、どうしても食いたいつてんなら、それなりの態度つてもんがあんだろ？ああ！？」

暇だったのでやくざごっこ、いえーい。

「お、お願いします。」

明久が小さな声で言ってきた。

「ああ？聞こえんなあ。」

いじめる俺。

「お願いします、有馬様。いやしい私目にあなた様のとてもおいしい自分で作ったお弁当を少しだけ分けてもらえませんか？しょうか！？」

明久が自棄になっていつてくる。

「おう、わかればよろしい。ほれっ、これやる。」

俺は1人分の量を差し出す。

「えっ、こんなにいいの？」

「ああ、どうせ誰かと食う分だったし。」

「…だったら最初からくれててもよかったんじゃないか。」

「んー、弁当いらないうって意味と受け取ってもいいのか？」

「いえ、すいませんでしたっ！」

明久はいじりがいがあつて楽しいな。

後ろで姫路と島田が聞き捨てならないようなセリフを吐いていたが、殺気が酷かったので気にしないでおこうと思った。

恋する乙女つてとても怖い…。

2話目。 試召戦争？上等じゃん！（後書き）

明久が、使いづらい。

うん、書いてて使いづらい。

困ったもんだぜ

3話目。やっとやってきた試合戦争シーン」さあ、お前の罪を数えろ！」（前書

問 以下の英文を答えなさい。

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
y

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「 \* x

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

宮村有馬の答え

「これは私の祖母が愛用していて本棚です。」

## 教師のコメント

正解です。まじめにやれば大抵できる有馬くん、これ以降もしつかりお願いします。

3話目。やっとやってきた試合戦争シーン」さあ、お前の罪を数えろ！」

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

つーわけでBクラス戦。

俺は姫路率いる前線部隊にいる。

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

という声に正面を見るとBクラスの連中10人ほどがのろのろ歩いてきやがった。

様子見って感じだな。

「生かして帰すなーっ！」

なんて物騒な声を皮切りに、Bクラス戦突入。

『Bクラス野中長男 VS Fクラス近藤吉宗

総合 1943点 VS 764点 』

差が激しいだろ、おいっ！

まあ、F対Bだし、しょうがねえか

気がつけば第一陣の連中がごとごとくやられている。

ちっ、しゃあねえ、俺の出番だ。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

特撮系、結構好きなんだよね、俺

「Fクラス、宮村有馬、こいつら5人に化学勝負を挑みます。『試  
獣召喚』」  
サモン

魔法陣から俺をデフォルメした召喚獣が現れる。

『なっ？何で宮村有馬がここに？』

『どうしてFクラスなんかに？』

敵さんが驚いてくれてるのが楽しいな。

『Bクラス 数名 VS Fクラス宮村有馬

化学 合計752点VS 785点

』

『…はっ？』

敵味方含め、驚き過ぎ。

俺楽しい。

「ちよっ、ちよっと有馬、その点数は何？」

明久が驚きつつ聞いてくる。

…うぜえ。

「なにもかにも、俺の実力だが？とはいっても、こんな点数出せるのは化学だけだな。」

他の教科はあいつらより少し上くらいだよ。」

懇切丁寧に説明してあげました。優しいね、俺。

「それじゃ、さっそくで悪いんだけど腕輪使っちゃいますね？あな  
たの眉間になごビーム」

召喚獣の目から光線が…いや嘘ですけどね？

技名なんて関係なしに隕石みたいの襲来。

よし、技名は「インパクト」にしようと言決めた。

さあ、「サードインパクト」を起こして、人類みんな融合しちゃい  
ましよ？

…冗談です、ごめんなさい。

ともかく、「インパクト（笑）」のおかげで敵さんはほとんど戦死。  
残りを手持ちの武器である剣でぶっさす。

「俺の任務完了。英語で言つと、ミッションコンプリートってとこ  
るか？」

みんなが唾然としていた…

さて、次々いつくぞ〜っ

…気持ち悪いからこのキャラはもう二度としないと心に決めた。

3話目。やっとやってきた試召戦争シーン」さあ、お前の罪を数えろ！」（後書

さて、まずごめんなさい

ふざけすぎましたね、俺

いきなり仮面ライダーのセリフでたり、某なごみさんのセリフが出たりとかね、うん。

元ネタわかる人、お友達になろう！

それで私の、最後の願いです…

嘘だけど

#### 4 話目。卑怯者が代表となったクラス（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $\{ \}$  ?  
の中から選びなさい。

?  $\sin A + \cos B$     ?  $\sin A - \cos B$     ?  $\sin A \cos B$   
?  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$     『

姫路瑞希と宮村有馬の答え

『(1)  $X = \pi/6$

(2) ?    『

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\pi/6$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1)  $X = \pi/3$     『

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?    『

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

#### 4話目。卑怯者が代表となったクラス

「…うわ、こりゃ酷い。」

「まさか、こつくるとはのう。」

「あんの、卑怯者が！」

秀吉に呼ばれ、本陣に戻った俺と明久と他数名。

本陣であるFクラスで俺と明久と他数名が見た景色とは？

ここ、OP入ります

『やばい 止まらない 止まらない』

昼に夜に朝にsing sing so loud

好きなことしてるだけだよ Girls Go Maniac

『

ごめ、間違えた。  
えっと

『ここが勝負 勝負の時なのだ』

だから真剣で 乙女の技を見せちゃう

』

すまん、また間違えた、もうやらないから許して！？

はい、気を取りなして俺たちが見た光景、それは卓袱台に穴があき、シャープペンやら消しゴムがごみと化している悲惨な光景でした。

説明しよう！Bクラス代表、根本恭二とは評判と性格がマジで悪い最低野郎のことだ！カンニングの常連はもちろん、目的を果たすためには手段を選ばない奴で『正しいやり方じゃなきゃ意味がない！』とナイトオブセブン（当時）に怒られそうなやつです。

ちなみにその手段としては『競技大会で相手チームに一服盛る』『喧嘩に刃物は当然装備』<sup>デフォルト</sup>『好みのタイプはヒステリック』とかな。…最後いつこは余計か。

まあ、そんな奴が俺たちの補充テストを邪魔するために地味な嫌がらせをしてきたわけですね。

…ぶっ飛ばしてやる！

珍しく、ちよいとキレちゃいました。

正々堂々と戦えよな！だから俺はあいつが嫌いなんだ。

『やっていいのはやられる覚悟のあるものだけだ』って黒の皇子もいってただろ？正確には少し違うが、意味が同じならそれでよし！

じゃ、雄二に事情聴取でもするか。

「おい雄二、この有り様はどういうことだ？なぜ気付かなかった？」

雄二はすまなそうな顔をして答える。

「ああ、あちらさんが協定を結びたいと言ってきてな。調印のためにクラスをあけてたんだ。」

「協定？どんな内容だ？」

「四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関する行為は一切禁止ってな。」

「それ、承諾したの？」

「ああ。」

「姫路の体力を考えてか？」

「そついうことだ、さすが有馬、話が早い。」

その後いろいろ話をしていたが少しおかしいぞ？  
なぜあちらさんはこんな協定を結ぶ？

妨害のためだけに対等な協定なんてありえないだろ。

あとで、こつそり雄二に話しておこう。

**4話目。卑怯者が代表となったクラス（後書き）**

あい、例のごとくすみません

曲、わかる人います？

わかつたら挙手、感想へGO！

5 話目。話が進むの遅い気がするがそれは気のせいです。(前書き)

問 以下の文章の( )に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、( ) ( )である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

宮村有馬の答え

『ウルトラマンの力の源』

先生は特撮も好きです。

## 5話目。話が進むの遅い気がするがそれは気のせいです。

そんなわけで今は休戦中。

あのあと、島田人質事件（わからない人は原作を読んでね？）があり、気絶してしまった明久がやっと目を覚ました。

姫路と会話していらっしやいますね。

…あの2人つてできてるの？いやまて、考えてみるこの状況。

明久が元々姫路に好意を向けてはいた。

そして、姫路の明久に対する態度。

これだけ考えると出来るともとれるがしかし、明久の性格を考慮すると大方両想いどまりだろ。

それに、あいつは鈍感だしな。

しかし、俺は思う。人のいう鈍感というのはただ単に自分に自信がないだけじゃないのだろうか？

明久の場合「姫路さんが僕なんかを好きになるわけがない」と思っているからなのではないか？

…頑張れ、姫路。お兄さんは応援しているよ。

はい、そんな明久が思い出したように雄二たちと会話しております。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調ってわけだね。」

「まあな。」

そう、確かに今のところは順調である。

だが、さっき雄二にも話したんだがあの根本恭二が何もしないわけがないと思うんだよな、俺は。

「……………(トントン)」

「お、ムツリーニか。何か変わったことはあったか？」

ムツリーニが雄二と会話している。  
なにやら、Cクラスで何かあったようで。

「試召戦争の準備を始めただと？」

考える、この状況でCクラスが試召戦争を開始する理由。  
普通に考えたら漁夫の利を狙うのだろうが、しかし、何か引っかかる。

Cクラス、Cクラス…代表は小山だったな…小山！？  
そうか読めたぜ、根本。お前の作戦。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを「ちよつと待て！」

俺は雄二の言葉をさえぎった。

「どうした、有馬？何か問題でもあるか？」

「ああ、問題ありありだ。」

「どうしてだ？不可侵条約を結んだ方がいいだろ？」

「いや、それが問題なんだ。不可侵条約を結ぶっていうことはだ、  
試召戦争に関する行為に値するだろ？」

「それはそうかも知れんが、不可侵条約ぐらい」

「Cクラスの代表小山は、根本と付き合ってる可能性がある。」

「なっ、何だと?」

これにはさすがに雄二も驚くようだな。

「まだ確証はないがな。ムツツリー二、少し情報を集めてもらってきていいか?」

「……………わかった。」

ムツツリー二に任せりゃいいだろ、多分。

「じゃあ、Cクラスへは行かない方がいいのか?いや、その話が確かなら、俺たちをつぶしに来るだろうし……」

「いや、Cクラスにはいこう。ただ、ちょっと作戦ありでな。」

俺はその作戦を、今から話すことにした。

覚悟しろよ、根本恭二。お前に吠え面かせてやんよ!

5話目。話が進むの遅い気がするがそれは気のせいです。(後書き)

多分、真面目にかけたんじゃないかと俺は思う。

何かあったら感想で書いてくれるとうれしいです。

6 話目。卑怯者根本恭二、まずはその幻想、ぶち壊す！（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希と宮村有馬の答え

『 $C_6H_6$ 』

教師のコメント

簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『 $B \cdot E \cdot N \cdot Z \cdot E \cdot N$ 』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室へ来るように。

6 話目。卑怯者根本恭二、まずはその幻想、ぶち壊す！

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表はいるか？」

「つーわけでCクラスにいます、私たち。」

ちなみに、口調やら一人称やらが変わるのは仕様です、気にしないでね？

Cクラスの中には結構な人が残っております。

…やはりな。

「私だけど、何か用かしら？」

俺らの前に現われたのは代表の小山。すました顔でやってきてくれますね。

「いや、たいしたことじゃないんだがな。少し話がある。時間をもらってもいいだろうか？」

「あら？今から告白でも待ってるのかしらねえ…。」

…ヒステリーもとい小山でもこんな冗談を言うんだな、驚いたよ。

「いや、ご期待に添えなくてすまんが、試召戦争についてなんだが…。」

雄二が言っておいた通りのセリフを口にする。これでひっかかってくれればいいんだが…。

「へえ…。どうしようかしらね、根本クン？」

「当然却下、だって必要ないだろ？」

やはりそうきたか…

しかし、こちらの作戦は成功、お前の負けだ、根本恭二。

「なっ！？どうして根本クンがここに？」

明久がいつておいた通りの言葉を言ってくれる。  
こいつ以外と演技できるんじゃないか？

「酷いじゃないか、Fクラスののに皆さん。協定を破るなんて「なにを言ってるんだ、根本恭二？」は？」

ここで俺、参上！しゃしゃり出てやんよ！

「いや〜、ちょうど良かったよ根本恭二、君を探してたんだ。なにぶん、今回の協定は曖昧すぎてね、そこら辺を君に聞こうと思っ  
ていたんだが、それすらも協定違反にするのかい？」

俺の作りきった口調をどう思ったのか知らんが根本が慌てだす。

「な、なにを言っている？だったら何故Cクラスにくる必要がある  
ってんだ！？」

やはり、そう来ますか。まあ、想定内、問題ナッシングよ。

「いやいや、君を探していたんだがなかなか見つからなくてね。そ

ここで、君と付き合っているともっぱらの噂である小山さんに場所を聞くか、連絡でもしてもらおうかと思っただけで、どうかしたか？」

「くっ…。」

想定外の出来事に根本が困惑している。

「くそっ、お前ら、かかれ！」

「認めません。」

先生が許可をしない！これはラッキーな方向だな。

「根本くん、協定違反はいけません。だから、しっかりと明日まで待っていてください。」

「いやっはっは、先生の言うとおり、協定は守ってくださいよ、根本さん？」

「くそ、畜生！明日てめえをぶっ飛ばしてやる！」

そういつて逃げて行っちゃいました。

「あらら〜？まだ話してないのにどっかいったいましたよ。先生、この場合ってどうすればいいんでしょうね？」

「ふむ、そうですね。とりあえず、帰って勉強するなり、教室を掃除するなり、しておいたほうがいいんじゃないですか？」

…や、確かにそうですね？

まあいい、問題は解決できた。

長谷川先生がいい人でよかったな、うん。

じゃあ、明日に備えて帰ろう。

…ん？Cクラスでわざわざ畏にはまる振りをする必要があったかだ  
って？

そんなの、俺があいつのこと嫌いだから、痛めつけたかったからに  
決まってんじゃない！

あと、俺に意識が向いてくれれば元々の作戦も上手くいくしな。

それと、姫路の様子がどこかおかしいことが気になる。

明日には良くなっているといいが…

6話目。卑怯者根本恭二、まずはその幻想、ぶち壊す！（後書き）

んー、どうですかねー？

なんか、感想とかでどこをどうしろーって言ってもらえたら助かるかも。

ちなみに、次回軽くオリになるかも？

あと、佐竹 義信さま誤字の指摘ありがとうございました>>

7 話目。カップルだからって羨ましいとかそんなこと思ってないんだからねっ

問 以下の問いに答えなさい。

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - - better - - best  
bad - - worse - - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - - gooder - - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad - - butter - - bust』

教師のコメント

『悪い』 『乳製品』 『おっぱい』

宮村有馬の答え

『bad - - ワーズ - - ワースト』

教師のコメント

スペルがわからなかったんですか…

7話目。カップルだからって羨ましいとかそんなこと思っていないんだからねっ

翌日AM8:50

「さて、野郎ども、これからBクラス戦が始まる。戦況は昨日と同じようにしておけよ、そういう協定だからな。」

雄二が言葉をかけ始める。

さて、俺も少し話してやろうか。

「いいか、てめえら！Bクラス代表根本恭二は昨日、俺たちに卑劣な罠をつかい陥れようとしてきた！Cクラス代表と手を組んでだ！そんな卑怯者に俺たちは負けるわけにはいかない！否、あいつらをぶっ潰すぞ！」

『オオーーーーー!!!!!!』

クラス全体が一つとなつている感覚。気持ちいいな、これ。

「そして、考えても見る？あの根本はCクラス代表小山と付き合っているんだぞ？性格はともかく顔はランクが高い、小山とだ！代表が付き合っているということはクラス内でもカップルがいる可能性があるということじゃないか？それを俺たちは許すことができない！す、俺たちはBクラスを倒す使命がある！カップルをつぶせ！！リア充をつぶせ！最悪道連れでもあいつらに地獄を見せてやれ！それこそが俺たちFクラスだろ！？」

『オオーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

気のせいかな『卑怯者を倒す』く『カップルを倒す』になっている気がする。

冗談でもやってみるものなんだな。

「よろしい！ならばいざゆかん！我らの目的はシステムデスクじゃ！カップル…もとい卑怯者どもを殲滅せよ！そして、Aクラスを倒そうではないか！」

『オオoooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooooo』

よし、これで士気は十分に高まった。

なにやら雄二他5名に変な眼で見られているが気にしない。  
俺だって彼女がほしいんだよ！羨ましいんだよ！くそっ！

…あいつ好きな人いるのかな？

おっと、どうでもいい方向に話がそれた。

「よし、もう時間だ！各々自分の場所につくがいい！あいつらをぶつ飛ばすぞ！」

『サイイエツサー！』

あいつらをとりあえず場所に動かした。

「有馬、お前はきつと人を動かす才能がある。」

よくわからんが雄二に褒められた。

「にしても、おまじゃったら簡単に彼女でも作れそうなのにのう。  
…姉上とか」

「ん？秀吉何かいったか？」

「いや、何でもないのじゃ。」

ん？まあいい、とりあえず今はBクラス戦だ。

後悔しろ、根本恭二！

7話目。カップルだからって羨ましいとかそんなこと思ってないんだからねっ

今気づいた新事実。

姫路と島田がほぼ空気。

次回はきつとちゃんとやりますっ > <

8話目。ぶっちゃけたただ単に原作破壊したかっただけなんだが…（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳し過ぎです。

宮村有馬の答え

『初体験…ごめんなさい。』

教師のコメント

謝るくらいなら真面目にやってください。

でも、実際にそういう人もいるらしいですよ。

8話目。ぶっちゃけたただ単に原作破壊したかっただけなんだが…

AM9:00

試召戦争再開

ただいま教室ですっ！

「で、雄二、これからどうするんだ？まさかこのまま昨日の作戦通りではいけないだろ？」

Cクラスが攻めてくる可能性が高いからな。

「ああそうか、お前はいなかったんだっただな。それならさっき秀吉がやってくれた。女子の制服姿で挑発してもらったんだ。」

「…それはつまり優子に化けさせて挑発したと？」

「そういうことになるが…どうした？険しい顔して。」

「…秀吉、生きて帰れよ」

「どうしたんだよ、急に。」

「いや、こっちの話だ。」

秀吉のやつ、命知らずな真似をしゃがって…

優子に化けて挑発したってばれたら、殺されるだろ…

「まあ、じゃあ俺はBクラス殲滅にいつてきていいのか？」

「いや、まあそうはなるが明久と秀吉の所にいつてきてくれないか？ どうせならあいつらに加勢してやってくれ。」

「…ああ、そうだな。了解だ、代表殿。いつてくる。」

~~~~~

「いよう明久。元気してたか？」

「あ、有馬。ちょうどよかったよ。ここは任せたよ？」

「っておい、何だ急に？ 脱走か？ チョキでシバくぞ。」

「ごめん。あと、姫路さんが調子悪そうだから、あまり戦線には加われないみたいだから頑張つて。」

「…なるほど、大体わかった。俺に任せておけ！ お前はお前のやるべきことをやるんだな。」

「うん、ありがと！ それじゃね」

明久はいっちまった。

よくわからんが、姫路のほうで何かあったんだろ。

「いや、お前さんも想われてるな、姫路。」

「そ、そんなことないですよ。吉井君は誰に対しても優しいだけなんです。」

…こいつも意外と鈍感なのか？

まあいい。

「じゃあお前ら！俺は今から全力でお前たちを殲滅し、動いを止める。やられたい奴はかかってこい！覚悟しろ！」

明久、頑張れよ。

〈明久SIDE〉

「雄二っ！」

「うん？どうした明久。脱走か？チヨキでシバくぞ」

「それ、さっき有馬も同じこと言ってたよ！」

教室に飛び込むと、雄二はノートに何かを書き込んでいるところだった。してみると、僕たちと相手の戦力を記したものとわかる。

「話があるんだ」

「……………とりあえず聞こうか。」

僕と雄二はしばらく話をした。

うん、僕がやれば姫路さんが戦わずに済むことができるんだ。それぐらい上等じゃないか。

「よっしゃ！あの外道に目に物見せてやる！」

僕は美波、武藤君、君島君に声をかけた。

8話目。ぶっちゃけたただ単に原作破壊したかっただけなんだが…（後書き）

進むのが遅いということと急ピッチに長文です。

文才がないって悲しい

あと、気づく人は気づくかもしれませんが、やっちゃいました
うん、まあ、これ以降はあまり失敗しないように努力します

9 話目。 Bクラスを倒した時。（修正しました）

（明久SIDE）

「二人とも、本当にやるんですか？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人としてよばれた英語教師の遠藤先生が僕ら二人に念を押す。

「はい。もちろんです。」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけなかったんです。」

向かい合うのは僕と美波。

「でも、それならDクラスでやらなくもいいんじゃないですか？」

そう、ここはDクラスで周りはFクラスの人ばかりなんだ。

確かに先生から下らおかしい状況になるよね。

「仕方ないんです。このバカは「観察処分者」ですから。Fクラスでやると教室が崩れちゃいます。」

それでも先生は考え直すよう促すが、そんなことはしないし、できない。

僕がやらなくちゃならないんだ、この役目は。

「わかりました。お互いを知るために喧嘩するのも教育ですね。」

先生が僕たちから距離をとる。

「サモン試獣召喚」

僕と美波の召喚獣が現れる。今なら「観察処分者」なんて面倒な肩書にも感謝できる気がする。

「行けっ！」

僕の召喚獣が美波の召喚獣めがけて駆け出す。そして、壁を背にした美波の召喚獣に大きなモーションで攻撃した。でも、かわされてしまい、壁を殴った痛みがフィードバックする。

「んのおっ！」

さらに力を込めて攻撃する目すべてかわされ、結局全部壁に攻撃することに。

「つう…っ！」

教室を揺るがすほどの一撃に脳天からつま先までかけて走る激痛で吐き気がする。

「アキ、時間ないわよ」

現在時刻は午後二時五十七分。作戦開始まであと3分。

『お前ら、いい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口はつか固めて暑苦しいっての！』
遠くからBクラス代表根本君の声が聞こえる。

『はっ、諦める？てめえが圧倒的に不利だってんだろっが。それで諦めるも何もないっしょ！暑さで頭もとうとうイカれたか？』

対する声は有馬だ。よし、作戦通りに事は進んでいるんだね。Bクラスに攻撃を仕掛けることはできたんだ。
だったら

「僕も、自分の役割を果たさないとねっ！」

僕は精神を集中して、思いつきり壁を叩く叩きつける！

『…さつきから壁がどんどんうるせえな。何かやってんのか？』

『さあな？喜べ、それはきつとお前に対する嫌がらせだ。人望がないって大変ですねーおほほほほー。』

『てめえ、ふざけやがって！』

『……よしっ、態勢を立てなおす！一度ひけっ！』

『どうした？さつきまで威勢が良かったのに。逃げるのか？』

「アキそろそろよ？」

「うん、わかつてる！」

僕と美波が周りに目配せする。ここから僕たちの作戦だ！

「おおおおおっ！」

これで決める、次はない！

『明久、お前ならやれる！信じてるぜ！』

有馬の声で、更に力を込めれた。

「だああああー！しゃああー！！！」

壁めがけて思いつきり殴りつける。

ドゴオッ

豪快な音とともにBクラスへの道が開かれる。

「いくわよっ！」

美波の掛け声とともにBクラスに攻めはじめる。

「遠藤先生、Fクラス島田が――」

「Bクラス山田が受けます！試獣召喚^{サモン}」

近衛部隊が行く手をふさぐ。

「よし、俺らもいくぞ！Fクラス宮村、Bクラスねん――」

「Bクラス安岡が受けます」

「ちい！」

近衛部隊が美波たちと有馬の方に来る。

そこに、窓から二人の影が現われ、根本くんの前に立ちはだかる。その2人とは

「Fクラス土屋康太」

「き、キサマ……！」

ムツツリー二と保健体育の大島先生だった。

「Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む。」

そう、近衛部隊を根本恭二から離れさせ、ムツツリー二をあいつにぶつける。それが雄二の作戦なんだ。

近衛部隊が気づいてそっちに行こうとしてるけどもう遅い！

『Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二』

保健体育 441点 VS 203点 『

ムツツリー二の召喚獣が根本くんの召喚獣を一撃で倒す。

僕らの勝ちだ！

9 話目。Bクラスを倒した時。（修正しました）（後書き）

あい、タイトルどおり、1回消えてやる気が急下降になった桜餅です
ちなみに、バカテストは諸事情によって今回は飛ばします。

諸事情というのは、話進めるのが遅すぎるからって感じですね、うん
ごめんなさいね、ホント

しかも、今回なんてほとんど原作どおりでした。

次回はしっかりやるっす、すんません

（8/9）修正しました

10 話目。もうそろそろ一巻が終わってもいいくらいのはずなのに終わるのが遅

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大要素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？ 脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さんと紫苑君。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経という、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

宮村有馬の答え

『？地 ？水 ？火 ？風 ？空』

教師のコメント

それは自然界の五大要素です。

10話目。もうそろそろ一巻が終わってもいいくらいのはずなのに終わるのが遅

有馬SIDE

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として代表同士の一騎討ちを申し込む」

あのあと、根本の野郎には女装してAクラスにいつてもらい、そのあとは写真撮影、ビデオ撮影、CDをつくるなどいろいろと忙しかったんだが　今日はAクラスに来ている。

もちろん、宣戦布告のためにな。

「うーん、何が狙いな？」

それで交渉の相手はなぜかこれが優子なんだな、これが。

さつき、優子と幼馴染ってことでFクラスの連中に殺されかけたんだよ、こっちは！

「もちろん、俺たちFクラスの勝利が狙いだ。」

まあ、普通は怪しむよな。最低クラスの代表が最高クラスの代表が一騎討ちだなんて。

「そうねー、確かに手軽には終わらせれていいけど、そんなリスクを犯す必要もないかな。じゃあ、ここからは貴方達の腕の見せ所よ？ 私たちをやる気にさせてみたら？」

優子のやつ、楽しんでいやがるな…あのSっ娘め。
しょうがない…。

「雄二、チエンジだ。俺が行く。」

「有馬？…わかった、そうだな。あとは任せた。」

「ちよつ、ちよつと待って。坂本くんのままじゃ駄目かなーなんて…」

優子が焦ってるな、うしつ。このままこちらのペースに引きづり込むか。

「残念だったな、俺と話をしようぜ？」

さーて、お前の罪を数えろってところかな？
ええ、本当に。

明久SIDE

突然、有馬が雄二と代わるとか言い始めてどうしたんだろう？幼馴染が故の弱みとか、そんなの握ってるのかな？
でも、相手は木下さんだし…あの、優等生ってことで有名な。どうするつもり？

「いよう、優子。結構久しぶりって感じだな。元氣してたか？」
「見てのとおりよ。もっとも、今少し元氣がなくなってたわね。」

木下さんの顔が少し暗くなる。

…ん？どういうこと？もしかして木下さんと有馬って仲が悪いの？

「ねえ、秀吉。これってどういうこと？」

「うむ、まあ、みてたらわかるじゃろつ。」

そう言われて僕は二人の会話に集中することにした。

「こっちはいろいろと大変だったよ。お前のせいでAクラス行き決定だった俺がFクラスになったしな。」

「そ、それは…本当にごめんなさい…。でも、こっちだって本当にあの事は悔やんでも悔やみきれなくて…せっかく今年は一緒のクラスになれると思ってたのに。」

「えつと秀吉、これはどういうこと？」

「あーそのじゃな、実は有馬が入院してた原因は姉上にあるのじゃよ」

何があつたんだらう？もう少し話を聞いてみよう。

「まあ、そうだよな。悪かった。ということと相談だ。あの件をチャラにする代わりにこの条件を？んでくれないか？そうすればお前も気が少しは楽になるだろ？」

「確かに、そうだけど…代表同士の一騎討ちなんて、そっちに有利な条件じゃないと持ちこまないじゃない？」

「んー、じゃあ、そうだな。代表5人を出して戦うってのは？それで3回勝った方が勝ち。教科の選択はこっちが3つ、そっちが2つでいいよな？それでも嫌だつてんなら、負けた方は勝った方のいうことを聞く。そんな条件を加えてやってもいい。いいだろ、雄二。」

「あー、まあ、そうだな。いいぞ、その条件でも。」

「だってよ？どうする、優子？」

有馬が上手く交渉してるみたいだ。木下さんは少し考えている様子。

さてよ？それだと、姫路さんの貞操が危なくないか…

あ、木下さんがーだったら大丈夫か。

「……受けてもいい」

「うわっ！」

驚いた…霧島さん、いつの間にか？

「……そっちの提案受けてもいい。」

「え？代表。いいの？」

「……その代わり、願い事は私と優子、もしくは雄二と宮村に1つずつにして欲しい。それでいいから。」

「よし、交渉成立だな。」

ちよ、ちよつと雄二、それじゃ姫路さんの貞操が…ムツツリーニ、カメラの準備は早いよ！

「じゃあ、10時からな。一度教室に戻るぞ。」

僕らの試召戦争の終結はすぐそばまで迫っていた。

10話目。もうそろそろ一巻が終わってもいいくらいのはずなのに終わるのが遅
ごめんなさい、終わらなかった…
予想以上にながくなっております
次回は、試召戦争して、そん次エピソードかも

11話目。FクラスVS Aクラス、雄二VS霧島、そして有馬VS優子(前書き
いまさらですが、15000Hit&20000ユニークありがとう
ございました
これからもがんばります

11話目。 FクラスVS Aクラス、雄二VS霧島、そして有馬VS優子

「では、両名とも準備はよろしいですか？」

「ここはAクラス教室で時間は10時。

つまり、Aクラスとの試召戦争の時間だ。」

「ああ。」

「……問題ない。」

「というか、本当に広いなAクラス。」

「それでは、1人目の方、どうぞ。」

Aクラスからは佐藤美穂さんがこちらからは

「よしっ、僕が行くよ！」

2年を代表するバカが出た。科目は物理だそうです。

「おい、そろそろお前の本気を見せてやれよ。」

「ちょっと悪ノリしてみます。」

「そうだ、俺はお前を信じているぞ。」

「ふう、しょうがないな。僕の本気、見せてあげるよ。僕は実は左利きなんだ。」

『Aクラス 佐藤美穂 VS Fクラス 吉井明久

物理 389点 VS 62点

『

こいつ、バカだ。

予想通りの惨敗に終わりました。

「おかしい、本気を出したはずなのに…」

「テストに利き腕は関係ないでしょうが、バカ！」

島田と明久がなんかやっているが次だ次。

「では、次の方どうぞ。」

「……（スック）」

保健体育でこいつに勝てるやつはいいな。

「じゃ、ボクがいこうかな」

なっ、ボクっ娘ショートカットだと！？更に見た目のボーイッシュ…
なんてことだ…現実に存在していたのか…

「有馬く？どうしたの、嬉しそうな顔しちゃって〜」

「ゆ、優子っ…！違う！誤解だ！ただ、ボクっ娘が珍しかっただけ
なんだ！」

「ふーん…まあいいわ、試召戦争があるものね〜。そんときに思い
つきりやっっちゃえばいいかな？」

「ま、待て！物理的な攻撃はなしだろ！？」

はっ、周囲からの視線が痛い！異端審問会も出てきそうだ…

おっと、そんなことをしている間に二人は召喚獣を出してしまっ
ていた。

「…加速」

「……え？」

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太
保健体育 446点 VS 572点
』

なんか、バカやってる間に終わってしまった…
スマン、ホント…

「これで一勝一敗ですね。次の方お願いします。」

「あつ、はい、私です。」

「それなら僕がお相手しよう。」

こちらからは姫路が、あつちからは久保利光が出た。

「科目は？」

「総合科目で」

久保が答える。明久がクレームをつけようとしたが姫路はやる気のないようだ。

それもそのはず、一瞬でけりがついたからな。

『Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希
総合科目 3997点 VS 4409点
』

…これは確かにすごいな。圧倒的だ。

周りもざわついている。

「私、Fクラスのみんなが好きなんです。だから、頑張れるんです。」

「
姫路がそんな言葉をいった。…さすがだな。

「これで1対2です。さて、次の方お願いします。」

「よしっ、俺の出番だな。かかってこいよ、優子。」

「ええ、いわれなくても、やってやるわ!」

俺が出る。そして、優子に勝つ。

…優子に勝つ?つまり優子をFクラスの教室に追いやる?
…くそっ!

「科目は?」

「…数学でお願いします。」

『数学?なんでだ?あいつの得意科目は化学だろ?』

『きつと、あいつなりに考えがあるんだ、大丈夫だろ。』

「ちょっと、有馬!どういっつもりよ!私の得意科目を選ぶだなんて!?!?」

「ハンデだよ。化学選んだらお前、勝ち目ないだろ?化学だけならトップは俺なんだから。」

「くっ、後悔させてあげるわその余裕を。」

「はっ、やってみるよ!…っとちよいと待っててくれな。」

明久SIDE

有馬が雄二となにか話している。

ここからじゃ聞き取れないけど、大事な話のように聞こえる。

「よしっ、覚悟しろ優子。ケリをつけようぜ。」
「望むところよ！やってやるわ！」

「「^{サモン}試獣召喚」」

『Aクラス木下優子 VS Fクラス宮村有馬
数学 426点 VS 388点 』

二人の召喚獣が現れる。最初に動き出したのは 有馬の召喚獣
だった。

有馬の召喚獣の武器は剣。それで木下さんの召喚獣に攻撃するも防
がれる。

「はぁあー！どうした優子、こんなもんか？」

「そ、んな、わけ、ないでしょー！」

二人とも接戦だけど、有馬のほうが微妙に有利。
どうなるんだろう、珍しくドキドキしてる。
そして、二人共の召喚獣がだいぶ弱っていき

「これで、終わりにするか。」

「そうね、そうしましょ。」

二人とも息切れしつつ力をためる。
そして

「行くわよっ！」

「こいつー！」

二人の武器が交わ　　らなかつた…

『えっ？』

有馬の召喚獣が剣を出さなかつたんだ。

「いや、優子お前、強いな。いつの間にか成長しちゃってーおじさんは嬉しいぞ」

「ちよつと有馬！ふざけないで！何で攻撃しなかつたのよ！」

「さあな？集中力切れちまつた。ワリいみんな…でも、安心しろ！俺たちには坂本雄二がいるぞ！あいつならやつてくれるさ！あいつのおかげでここまでこれたんだ。あいつを信じようぜ？」

一瞬でざわめいていた人たちが静かになり

『そつだ、俺たちには坂本がいる』

『負けるわけねえよ』

『そうか、これは坂本をおぜん立てするためか…』

『なるほど、あいつらの信頼関係もなかなか凄いな』

みんなが色々と言っている。よかった、有馬を責める人はいないよつだ。

『サーカモトツ！サーカモトツ！』

それどころか、クラスが一つになった。まさか本当にこれが狙い？

「それでは最後のかた、どうぞ」

「……はい。」

相手はもちろん霧島さん。

「ちっ、てめえら勝手に盛り上がりやがって…いいか、俺が来たからにはもう大丈夫だ！俺は勝利し、このシステムデスクを手に入れる！俺に任せろ！」

『おおおおおー！！』

科目はもちろん日本史、小学校レベルで100点満点の問題。

「雄二、負けるなよ」

僕は悪友に声をかける。

「任せとけつての」

雄二はニツとわらって返してくる。

うん、あいつならできると僕は信じているぞ。

二人は視聴覚室へ移動する。ちゃんと、大化の改新でるかな…
ディスプレイに問題が映し出された。

() 年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

「よしっ、これで僕らの勝ちだ！最下層クラスが勝ったんだ！！」
『うおおおー！！』

教室を揺るがすほどの声。

そして、結果が表示された。

「日本史勝負 限定テスト100点満点」

「Aクラス 霧島翔子 97点」

VS

「Fクラス 坂本雄二 53点」

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

11話目。 FクラスVS Aクラス、雄二VS霧島、そして有馬VS優子（後書き

）会ったかもしれない会話）

「…つとちよいと待っててくれな。」

俺は雄二の方に行き小さくつぶやく。

「悪い、お前まで回す。俺には優子をFクラスの教室に追いやるなんてできないんだ、すまん。」

雄二は一瞬驚いたがすぐに

「ああ、まかせろ。元々そのつもりだったからな、気にすんな。お前はこのクラスに来てまだ二日目で、そんな覚悟ができていなかったとしてもしょうがないだろ。」

雄二は笑って答える。

「…サンキュ」

坂本雄二。俺の親友の一人だな。

はい、次回でやっと終わりです

どンドン無理やり感がでてきている気がするぜ

12話目。原作だと一巻の終わり。(前書き)

問 次の() に正しい年号を記入しなさい。

『 () 年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『 1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『降り積もる雪の中、寒さに震える君の手を握った1993年』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

12話目。原作だと一巻の終わり。

「3対2でAクラスの勝ちです。」

高橋女史が冷淡にそういった。

「……雄二、私の勝ち。」

「くっ、殺せ。」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

おお、姫路のやつ吉井に抱きつき始めたぞ、大胆だな。

よし、ちよつと手助けしてやるか。

「大体、53点って何だよ！0点なら名前の書き忘れとか考えられるのにこの点数だと」

「いかにも、俺の全力だ。」

「この阿呆がぁー！」

「まあ、落ち着け明久。」

「有馬…有馬はこいつが憎くないの？こいつの所為で負けたって言うのに。」

「俺にも責任があるからな。それより、耳を貸せ。」

「え？何？」

そういつて明久の耳元である言葉をつぶやくと

「……………っ！」

頬の色がどんどん染まっていき、動きが止まる。

まあ、冷静になってしまえば姫路に後ろから抱きつかれてるってことに気づくからな。

「……雄二、有馬。それよりも、約束。」

霧島がそういつてきた。明久とムツツリー二が撮影の準備を始めたぞ、おい。

というか、いつの間にか名前で呼ばれてるんですけど。

「わかってる、何でも言え。」

「……それじゃ。」

まずは霧島の約束からってことらしい。

ついでに、明久とムツツリー二には悪いが霧島は。

「……雄二、私と付き合って。」

やはりな……

前、優子が言ってたんだよ、霧島は一途に雄二のことを好きだって。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

なんだかんだで雄二は霧島に連行されてしまった。

振られても諦めないなんて、霧島は凄いな。

俺はあいつを尊敬し、そして応援するぜ。

「次は私の番よ、有馬。」

「ああ、わかってる。願いを言え。叶えられる範囲でなら、叶えてやるから。」

周りは未だに啞然としている。
そんなに衝撃的だったか？
ともかく、今は優子だな。

「有馬、私は　あのことを、許してほしいの。」
「…は？それなら、この勝負を受けてくれるってことで許す約束だ
つただろ？」
「…でも、やっぱりそうじゃなくて、しっかりと許してほしい
かったの。」

周りの連中もどうにか復活してきたみたい　　というか、こちら
の話が気になってきたようだ。

「だって、まさか、振り分け試験前日に夜食にとまって作ったカレ
ーにジャガイモの芽が入ってたなんて…」
『……………は？』

や、まあ、これはー、驚くかもな。
優等生つてことで通ってる優子がまさかそんなミスをするとは思っ
てなかっただろっし。

「私と秀吉は何故か大丈夫だったけど、あんたはそれ入院しちゃっ
て…。そのせいで振り分け試験を受けられずFクラスにはいちゃった
んじゃない…だから、だから…。」

え？ちよっ、ギャグシーンのはずなのに優子が今にも泣きそうな顔
してるぞ…

ああー、困った。どうしよどうしよ。

「いやな、優子。確かにお前の所為でFクラスはいることになっちゃったが、俺は別に怒ってない。雄二や明久たちと一緒にいれて楽しいしな。感謝　ってわけでもないが、結果オーライだつて。気にするなつてのは無理かもしれないが、俺は大丈夫だから。」

「有馬…」

「それでも　　そうだな。俺に対して気にかけることがあるんだつたら、一つ俺の願いでも聞いてくれはしないか？」

「…願い？」

優子はもう、泣いてしまっている。

それを見るのがとても辛くて辛くて…だから

「ああ、お前さえ良ければなんだが、その、俺と　　付き合ってくれないか？。俺はお前のこと、好きなんだ。」

「…え、有馬、今なんて？」

「だーから、お前のことが好きだ。俺と付き合っほしって言うてんの！あーもう、こんな大勢の中で超恥ずかしいっての！」

「…嘘？ホントに？冗談とかじゃなくて？ホントにあたしなんかと？」

「ホントホント、激マジる。昔から好きだった。今はもっと好きだけど。」

あー、ちょっとマジで恥ずかしいんですけど…

そもそも、願いを言うのは優子だったはずなのになんで俺がやってるんだらうなー

あーもう、周りから凄い目で見られてるし…

工藤なんてめっちゃきゃーきゃー言ってるし。

「あの、えっと、あたしなんかでよかったらこちらこそお願いしま

す?」

「なんで疑問形になるんだよ…まあ、よろしく頼むよ、優子。」

こうして俺と優子は恋人関係になっただけだ…

「よし優子。恋人になってから初の共同作業だ。」

「えっと、何?…あー、うん、どうね、そうしましょ」

優子も泣き止んでくれて万々歳…といたいいんだけど、俺も周りも冷静になるとねー、うん。

「よしっ、逃げるぞ!」

「うん、有馬と一緒にならどこへでも。」

『宮村にしる坂本にしる、彼女もちなんて許せん!!我がFFF団よ、やるぞ!』

『サー、イエッサー!』

『男とは?』

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

『よろしい!では、裏切り者を血祭りに上げようぞ!』

『おおおおおー!』

ただでは終われないな…

文月学園だからなのか、Fクラスだからなのかはわからんが。

ともかく、今日ここに一つのカップルともう一つのバカップルが生まれたとき

めでたしめでたし

P・S・担任の先生が変わりました

12話目。原作だと一巻の終わり。（後書き）

…おかしいぞ？

ギヤグシーンを予定していたのに、何故かシリアスに…

ちなみにジャガイモの芽の話は、秀吉が大丈夫だーとかいってたからそっからもって来ました。

ともかく、これにて一巻分は終わりましたぜ。

なんか無理やり感が否めないけど、うん、ごめんなさいね、文才がないんです…

13話目。EX振り分け試験前日のお話。

これは、振り分け試験前日の物語…

「ふう〜。疲れた。てか腹減った。今何時？おー2時か…。」

一人で勉強していると、なんか独り言が多くなっちゃうよね、うん、しょうがないこと。

明日は振り分け試験。

これで来年1年間が変わるからな…

こんっこんっ

部屋のドアが叩かれる。

うちの親は海外だから、大方優子が夜食でも作ってくれたんだろうと期待。

「どうぞ〜。」

「えっと、お邪魔します…。」

予想通り優子がなべを持ってきた。

匂いからしてカレーだろう。

「お邪魔します、って家に入ってから言うか？確かに合鍵は渡してあるけどさ。」

「だって、何回もチャイム押したのに開けてくれなかったんじゃないかい…。」

「あー、ごめん、気づかなかった。勉強しててさ。」

「だろうと思った。そんなことしなくても、Aクラス入りは間違い

ないでしょ？」

「まあ、そうかもしんないけどさ、やるに越したことはないだろ？」

「そうね。あ、これ、今日の夕食のあまりなんだけど、夜食にどう？」

「ありがたくいただくよ。ちょうど腹が減ったなーというところだったんだ。」

「じゃあ、キッチン借りるわね。」

そういつて優子はキッチンの方へ向かっていった。

優子、か。

俺の幼馴染の双子の姉で、家の中じゃちょっとズボラだが一応、成績優秀の優等生。

それで、テスト前とかに勉強してる俺に今みたいに夜食を持ってきてくれたりする。

昔からの中だけど、数年前から俺の中じゃ最愛の人、なんだよなー…あっちがどう思っているかはわからんがこうして夜食を持ってきてくれるあたり、悪くはないはず。

むしろ、好意を抱かれていると自惚れてもいいかもしれないが…ともかく、こんなことを考えてると優子には知られたくな

「ま、有馬？」

「へ？お、うおう、びっくりしたー…」

「そう、あからさまに驚かれるとこっちも傷つくんだけど…」

「わりわり、んでどうした？」

「どうした？ってカレー、出来たからもってきたんだけど。」

「へ？もうか？早いな、うん、さすが優子。」

「10分もあればカレーくらい温められるでしょうが…」

ほう、もう10分も経っていたとは…

よほど夢中になってたんだな、俺。

「ふむ、これまた美味しそうだな。…ん？もしかして今日っておじさんとおばさんいなかった？」

「そうだけど、どうかしたの？」

「いや、おばさんのカレーとは少し違ったから優子の手作りかなーと。」

「…あんだ、見ただけでそこまでわかるの？その通りよ。」

「やはりな、さすが俺。」

「はいはい、自画自賛しないの。」

まあ、難しいことを難しく考えないで簡単に考えればいつかいつか、考えなきゃならなく時が来るだろうさ。

「んじゃ、いつただつきまーっす！」

「どうぞ、有馬。召し上げれ。」

俺はバクバクと優子手作りカレーを食べていく。

「うん、美味しいな。」

「ホント？良かった。」

優子が笑顔になってくれると嬉しいな。

即行で完食した俺なんだが、なんだか体がおかしい…

「それでさ、有馬。私も頑張るから、一緒のクラスにな　　って有馬？どうしたの？有馬！？」

その言葉を最後に、俺の意識はシャットダウンした。

目が覚めたときには病院で、命に別状はなかったようだが吐いたり

何なりと最悪だったな。

優子は会わず顔がないとかで秀吉に見舞いの品を渡すだけで来なかった。

そして、こうして俺のFクラス入りが決定したのだった。

13話目。 EX振り分け試験前日のお話。(後書き)

とまあ、やってみました

どうかなーこんな感じでいんじゃないかな? 的な? あい
というわけで、次回は2巻となります。

14 話目。 清涼祭の出し物。 (前書き)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しい物はなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。

写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本 (訂正) 成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるんでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

宮村有馬の答え

『可愛い恋人との思い出ともう一步踏み出せる勇気』

教師のコメント

木下さんのことは先生も聞いています。

二人のことをどうこう言うつもりはないので節度を保ったお付き合いにしてくださいね？

14話目。清涼祭の出し物。

桜の花が姿を消し、代わりに新緑が芽生えるこの季節。

俺たちの学校、文月学園では新学期最初の行事「清涼祭」の準備が着々と始まっていた。

お化け屋敷なりなんなりと教室を改造したりするクラスたちは準備のためLHRはいつも活気づいていた。
そんななか俺たちFクラスはと言うと…

「宮村、あいつらはどこにいった？」

「グラウンドじゃないですか？野球するって行ってたんで。あ、もちろん俺は止めましたよ？」

「そうか…あのバカどもには灸をすえてやらんな。」

この方は今回初登場となる西村先生。通称鉄人。トライアスロンとかが趣味だったり暑苦しかったり、とりあえずすごい人だ。

俺たちが前回、試召戦争で負けたため、俺たちの担任となった…
何んとも悲しきことかな？

数分後、連れ戻されるクラスメート達。

殴られた跡があるが、自業自得だな。

「さて、そろそろ「清涼祭」の出し物を決める時期になったんだが

「

雄二が仕切り始める。が、しかし、なんかやる気ないのな…。

「議事進行および実行委員を誰かに任命し、そいつに全権を委ねるのであとは任せた。」

ホントにやる気ねえな、おい。
というか、優子に会いたい…

そうだ、清涼祭なんだぜ？一緒に回ればいいじゃねえか、ナイスア
イディア俺。

誘えるか？いや、あの大勢の前で告白した俺ならやれる？

いやしかし、あの時は優子が泣いてしまいそうな顔が嫌でほとんど
勢いだったしな…

ん？いや待てよ？Aクラスの出し物にもよるんじゃないか？

喫茶店とかだったら忙しいだろうしな。Aクラスは広いし、この学
校は美人が多いし。

いやいやもうちよい考えろ、喫茶店？もしかしたら、優子がかわい
い衣装で接客とかするんじゃないか？優子にメイド服なんかで「
お帰りなさいませ、おご主人様〜」とかって言われたらたまらんな。

「クラスで出したいものがあつたら挙手してくれる？」

おおっと、考え事してる間にだいぶ進んでいたな。

実行委員は島田と明久になつたみたいだ。

「はい、土屋。」

「……写真館」

「……土屋のいう写真館って、かなり危険な感じがするんだけど。」

女子からすればそうだな、確かに。

俺はあまり「ムツツリ商会」は行かないから、何とも言えないが。
明久が黒板に書き始めたのだが

【候補？ 写真館「秘密の覗き部屋」】

…お前のネーミングセンスには感服だ。
お前はもしかしたら天才かも知れんぞ、明久。
というか、よく覗きという漢字を知っていたな

他に横溝と須川が意見を出していた。

【候補？ ウエディング喫茶「人生の墓場」】

【候補？ 中華喫茶「ヨーロッパ」】

ふむふむ…これなら俺は中華喫茶だな。

須川はチャイナ服を着せるのではなく純粹の、と言ったが俺的にはチャイナはアリだ。むしろアリだ！

とそこで、西村先生が現れ、黒板を見て一言（なんとなく杉田ボイスで）

「…補習の時間を倍にした方がいいかもしれんな。」

しまった、それはマズイ。優子に会う時間が減ってしまう…

「先生、それは違うんです。明久が勝手に書き始めたわけであって、僕らがバカなわけではありません。すべては明久の責任です。」

明久が「有馬？なんてことを」とか言ってたが気にしない。

俺はお前より、優子（との時間）が大事なんだ。

「バカ者！みつともない言い訳するな！」

くそ、作戦失敗か…

「先生はバカな吉井を選んだこと自体を頭の悪い行動だと言ってい

るんだ！」

そ、そう来たか…

「すみません、僕たちが悪かったです、反論できません…」
「わかればいい。素直な宮村は倍にはしないどいてやる。」

ラッキー、意外といい人かも、鉄人さん。

「まったくお前らは、稼ぎで設備を向上させようという考えはないのか？」

このセリフでクラスメートたちの目に輝きが戻る。
効果音をつけるならきゅぴーんとかきらーんとかって感じた。

『その手があったか』

『なにも試召戦争だけが設備を上げるわけじゃなかったな』

『こんな設備もいい加減我慢できない！』

『がーまんもげんか〜い』

1人なんか歌い始めたぞ？

というかやばい、クラスが超うるさい…

「はい、静かに！出し物はこの3つの中から決めます！多数決よ！」

島田が頑張って仕切っているがおさまらない。

ふむ、ここは俺が1つやってやるっ

「やい、野郎ども！ちよいと俺の話の聞きゃあみないかい？」

ちよつと芝居がかった感じでみんなに話しかけると、意外と聞いてくれた。

「色々意見はあるだろうが、実行委員の島田がこの3つからって言ってるんだ、諦める。」

まあ、それはさておきなんだが俺は中華喫茶を推薦する。須川はチャイナ服はなしと言っていたが、俺は大いにありだと思う。むしろアリだ！考えても見る、島田や姫路、秀吉のチャイナ服姿を…。

どうだ？少し恥じらいながらも、いらっしやいませ〜という3人。

島田のツンとしながらの接客。姫路がかわいらしい仕草で飲茶を持つてくる姿。秀吉は　　いうまでもないだろう？どうだ？中華喫茶にかけてみないか？」

『おおおおー賛成だ〜！』

『いいじゃないか、中華喫茶！』

「チャイナ服作れるよな、ムツツリーニ。」

「……当然」

「よし、今回は俺も女装してやる。幻の美少女を見せてやるぞ？俺の女装写真をみんなに見せてやれ、ムツツリーニ」

「……わかった。」

そういつてムツツリーニが写真を配る。

ちなみに、「幻の美少女」ってのは前、罰ゲームで女装させられたときの写真を見てのあだ名のことだ。

うちの制服を着ているのを見た人はいない美少女、ってな。設備向上のためなら、俺は頑張るぜ？

『これ、宮村だったのか？』

『あの、「幻の美少女」が？』

『知らなかった…』

『宮村、結婚してくれ！』

1人キモイぞ、おい。

「じゃあ、中華喫茶で決定でいいかな？」
『いいとも〜〜！』

ノリノリだな、おい
まあいい、これで準備は整った。
設備の向上は間違いないぜ！

14話目。清涼祭の出し物。(後書き)

女装、させてみたかったの

特に意味はないですけど

そんなこんなで2巻に突入ですっ！

15 話目。雄二捕獲作戦。（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数があつていないことに違和感を覚えましょう。

宮村有馬の答え

『エルトリア ベルン リキア』

教師のコメント

ファイアーエムブレムですか、懐かしいですね。

でも、最後のは国ではなく同盟軍です。
思い出したら、最新作をやってみたくなりました。

15話目。雄二捕獲作戦。

「アキ、宮村ちよつといい？」

あのあと、料理の担当を須川やムツリーニが出来ることが分かったため任せたり、明久が何故か姫路をホールにさせようとしたりと色々あったが今は放課後です。そこで島田が声をかけてきたわけ。

「ん、何か用？」

「どうかしたのか？」

「ちよつと、相談したいことがあって…」

ふむ、珍しくまじめな顔だな。少なくともいい話ではないのか。

島田の要件は雄二を引っ張りだせないか、ということだった。まあ、雄二は興味がなみたいだし、難しいと思うが。

「きつと、アキの頼みだったら、坂本も聞いてくれるはずよ。だって」

「そりゃ確かに、よくツルンでるけど、だからといって別に」

「だってあんたたち、愛し合っているんでしょ？」

「もう僕お婿に行けない！」

島田は真顔でそう言っていた。なるほど、面白いことをいう。

「そうだったのか明久。すまん、気づいてやれなくて…」

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉のほうがいいよ！」
「……あ、明久？」

おー、なんてタイミングだい、秀吉。

どどん面白くなってきたぞ、ナイスだ、島田！お前のおかげだぜ。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなこと言われても。ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか……」

「ひ、秀吉！違うんだ！ものすごい誤解なんだ！」

「そうだぞ、秀吉、冷静に考えてみる。」

「あ、有馬、この状況をどうにかしてくれるの？」

明久がつぶらな瞳で見つめてきた。

見捨てますか？

はい

いいえ

「秀吉、いいか？二人の間に愛情があるなら、年齢だろうが性別なんて関係ないんだ。大事なのはお前がどう思っているかなんだよ。」

「そうだよ秀よ。　　って違うっ！そういうことじゃない！秀吉も顔を赤らめないで！頼むから！」

秀吉のやつ、この反応はいやいや、まっさかあ？

俺は秀吉がノーマルだと信じているぜ。いやマジで

「で、話を戻してもいいかしら？」

「あ、うん、大丈夫だけど。」

島田が少し不機嫌に：やはり、明久のことを好きなのか？
や、だからって男に妬くなよなー、うん。

島田だって十分美少女だし、明久も島田の事は結構気に入ってる
でもいうべきか、心を許してると思うし…

「実はね、瑞希が転校するかもしれないの」

「ほえ？」

おおーっと、考え事をしてたら事態は深刻な方向に…

最近よくあるなこれ。

じゃなくて、

「秀吉…、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい？」

「どうやったら、姫路の転校からモヒカンになるのか、俺には分か
らんぞ。」

そういつて一発叩いてやった。

目を覚ませーという意味を込めたわけであって、殴りたかったわけ
じゃないぜ？

「美波！姫路さんが転校ってどういうことさ！」

島田の説明をまとめるとこんな感じ

姫路の親が転校させようとしている。理由は言わずもがな、Fクラ
スの環境について。

これは、設備の問題とクラスメートの問題の二つがある。

設備が悪くては勉強もままならない上、体の弱い娘に悪影響が。

クラスメートが悪くては切磋琢磨なんてできず、意味がない。

故に、転校させようと、そう思ったそうだと。

「……アキはその……瑞希がしたりとか、嫌だよね……？」
と島田は探るような眼で明久を見る。

「もちろん嫌に決まってる！それが美波や秀吉であっても！」
フラグが立ったフラグが立った

こいつのこういうところがすごいよな。
狙ってるんじゃないかと、素でこういう発言ができる。
まるでギャルゲーの主人公のようだ。

「よし、しょうがねえ、そういうことなら俺が雄二をたきつけてやる。明久、お前にも協力してもらおうけどいいよな？」

「もちろん！姫路さんを転校なんてさせたくないからね！」

よしっ、じゃあ、まずは雄二捕獲作戦だな。
作戦をみんなに話し、俺は優子に電話した

「やあ雄二。奇遇だね。」

明久が雄二に話しかける。

「……どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするか教えてくれ。」

そう、ここは体育館にある女子更衣室。明久の言った通り、の場所にいるってんだ、この二人はすごいなーと思う。

あ、ちなみに俺は入ってないぞ？ドアの前に立ってる。

「やだな。ただの偶然だよ。」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うわけが」

よし。中に入れ！というサインを俺は優子に送った。
ガチャッ

「……えーっと、Fクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だよ
ね？」

「やあ、木下優子さん。奇遇だね。」

「秀吉の姉で有馬の彼女か。奇遇だな。」

「あ、うん、奇遇だね。」

ふむ、優子も結構演技の才能あるんじゃないか？これで彼女と言うのに照れて顔を赤らめてくれてたら最高なんだが、中は見れないしな。

明久も、結構自然体だし。

今度、演劇でもやってみることにしようと思いに決めた。

「先生！覗きです！変態です！坂本くんが女子更衣室にいます！」
そこに俺が入って

「何だと？雄二てめえ、俺の優子に何しやがった!？」

というと優子が「俺の優子だなんて……」と顔を赤らめてるのが見えてよかつたなーと心底思いました。

「おま、有馬、どうしてここに!？」

「そこまで優子と一緒にいたんだよ！わかれよ、それくらい!！」

思いつきの嘘にしては上々だろう。

嘘でもないけどさ。

「先生、こいつら捕まえてください！早く!！」

「ちい、逃げるぞ、明久!！」

「了解!！」

二人が更衣室の小さな窓から逃げ出す。そこに西村先生が現れた。

「あいつらはどこに行った？というか、宮村なぜここにいる？」

「あいつらはその窓から逃げました。俺は優子の悲鳴が聞こえたので。」

「なるほどな…わかった」

そういつて、西村先生は別の窓から出ていつて、あいつらを追いかけた。

「サンキュ、優子。あとは秀吉次第なんだがな…Fクラスに行くぞ。ついてこい」

「うん、わかった。」

先生、僕はこんな可愛い彼女がいてもう、幸せです…

そんなわけでFクラス教室

「島田、明久から電話は？」

「まだこな 今来たわ」

「よし、秀吉、頼んだぞ？」

「了解じゃ。」

そういつて島田が電話に出る。

「もしもし？坂本？」

『島田か、一体何の真似だ？』

「ちよつと待つて、今替わるから」

『替わる誰と おい。もしもし？』

いけ、秀吉！お前の出番だ。

「……雄二。今どこ？」

『人違いです。』

切られたようだ。

「じゃあ、あとは明久次第だな。みんなご苦労さん。特に優子は関係ないのにサンキュな？」

「関係ないだなんて、そんなこと言わないでよ。私だって姫路さんの転校は阻止したいし。」

「そっか、そりゃ悪かった。でも、助かった、サンキュ。」

「大丈夫よ、気にしないで。」

んじゃ、あとは雄二が来るのを待つだけだな。

15話目。雄二捕獲作戦。(後書き)

書き終わってから、秀吉の声真似じゃなくて優子に頼んだことにして本人呼べばよかったかもと後悔。

あ、ちなみに、演劇は今度番外編でマジでやる予定だったり…
内容全然考えてないけど

16話目。クソババ、もとい学園長との交渉。

「そうか、姫路の転校か…」

そんなわけで、雄二登場！

明久に殴られた跡があるが気にしない、それが宮村クオリティ。

「そうなるよ、喫茶店での成功だけでは不十分だな。」

「不十分？どうして？」

「はあ…面倒だ。有馬、説明してやってくれないか？」

「了解。走り回ったから疲れてるもんな、お前ら。」

俺が原因だったので替わることにした。

優しいな。さすが俺。

「姫路の父さんが転校を進める理由は3つ。まずはごさとみかん箱なんていう設備。これだったら喫茶店が成功した利益を使えばいいだろう？問題はこつから。2つ目の問題として老朽化した教室。これは姫路の健康に害がある。最後にレベルの低いクラスメート。つまり、姫路の成長を促すことはできないという学習環境だ。まあ、俺からすれば、Fクラスに入ってからのほうが姫路の成績は上がってきているから問題ないと思うんだが、親御さんは納得してないだろう。とりまこんな感じだけど、理解でき　てないように見えるが大丈夫か？」

「な、失礼だなちょっと長い説明で混乱しちゃっただけで大丈夫だよ！」

「じゃあ、3つの問題を説明せよ！」

「え、えっと、ごさとみかんっていうのと姫路さんが体調崩しちゃうってのこのクラスはバカばっかってこと…だよな？」

「んーまあ、ちつ、正解だ。さすがに姫路のことになると記憶しちやいますのね。あらあらお熱い」と、で…」

ま、まずい、秀吉は頭から煙出してるし島田は島田で、俺と明久に對してめっちゃ黒いオーラ出してる…

困った、失態だぞ宮村有馬！この状況の打開策はないのか？

選択肢？気にしない？放っておく？無視する

って結局どれも同じじゃないの！？

「ああ、あれだ。1つ目は喫茶店で、3つ目は島田と姫路がなんかやるんーだったよな？だったら俺らは2つ目を何とかしよう。」

「え？どうするの？」

「どうするって…学園長に直訴すればいいだろ？ここは曲がりなりにも教育機関だってことを忘れてないか？生徒の健康に害を及ぼすなんて改善要求が十分通るはずだ。」

二人の様子が元に戻ったぞ。

おお、放っておくのが正解だったなんてな、びっくりだ。

「説明ごくりうだ、有馬。わかったなら、学園長室乗りこむぞ。秀吉と島田は学園祭の準備計画でもしてしてくれ。あと、鉄人が来たら俺は帰ったと伝えておいてくれ。」

「へ？あ、うん。そっちもしっかりやってきてね。」

というわけで学園長室へレッツゴー！ブイ！

『……商品の……として隠し……』

『……こそ……如月ハイランドに……』

ただいま、学園長室の前であります！なにやら、怪しい言い争いが…
どうしますか？

そんなの、無視してレッツゴーに決まってる！

「失礼しまーす。」

そういつて入ると学園長ババアと教頭メガネがいた。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ。」

「やれやれ、取り込み中だというのにとんだ来客ですね…まさか、
貴女の差し金ですか？」

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてあたしがそんなセコい真似を
しなくちゃいけないんだい？負い目があるわけじゃないんだから。」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意なようですからね。」

この2人、仲悪いな…

まあ、俺はババアもいけ好かないがそれ以上にメガネは腹立つしな。

「まあ、この場はこれで失礼いたします。」

メガネはそういつて出て行った。

…ん？何かを確認していったぞ？

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話しがあつてきました。」

「私は今、それどころじゃないんでね。教頭の竹原に頼みな。それ
と、まずは名前を名乗るのが礼儀つてもんだよ。覚えておきな。」

てめえに言われたかねえよ、ババア。という言葉は心にしまってお
きましよう。

ほら、俺って優等生だし。

「失礼しました。俺は2-F代表の坂本雄二と」

「同じく2-Fの宮村有馬です。それでこっちは」

「2年を代表するバカです」

さすが雄二だ。話がわかるね。

「ほう、そうかい。あんたらが2年の坂本と宮村と吉井かい。」

「ちよつと待って学園長！僕はまだ名前いってませんよね!？」

まさか、学園長にまで名が通ってるとは…

恐るべし、吉井明久。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか。」

「ありがとうございます。」

「礼はいいからさっさとしな、ウスノ口。」

「わかりました。」

ふむ、さすがの雄二も少しは我慢するんだな…

まあでもすぐに

「Fクラスの設備について改善を要求してきました。」

「そうかい。暇そうで何よりさね。」

「今のFクラスは学園長の頭のように穴だらけで隙間風などが吹き込んでくるような酷い状況です。」

やっぱりな。さすがは雄二だ。俺の親友はやることが違う。

じゃあ俺も〜と。

「それですね、学園長のように室町時代から生きてるような老いぼれならともかく、今の高校生には危険な状態なんです。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思います。学園長のようにバケモノではないので。」

「よつするに、隙間風とかで体調崩す生徒がいるから、さつさと直せよこのクソババア、と、そういうわけです。」

学園長が思案顔だな。言い過ぎたか？まつさかねえ。こんなことで怒るようなやつじゃないっしょ。

ん？何か呟いか？うむむ、俺には聞こえなかったな。

「よしよし、お前たちの言いたいことはよくわかった。」

「え？それじゃあ直してもらえるんですね！」

明久がそうだったが、どうだ？

普通ならそうなるけど、このババアなんか怪しいぞ？

「却下だね。」

「2人とも、このババアをコンクリに詰めて捨てよう。」

「おい、こんなババアでも学園長だぞ？」

「そうだぞ、明久。こんなクソババアでも学園長なんだ。気をつかえ。」

はっ、しまった。つつい本音と混ぜってしまった。

「まったく、このバカどもが失礼しました。どんな理由かお聞かせ願っても宜しいですか、ババア」

「そうですね、教えてください、ババア。」

「お願いします、クソババア。」

さて、この文だけでそれが誰かわかるか？
上から雄二、明久、俺だぜ？

「……お前たち、本当聞かせてもらいたいと思っ
ているのかい？」
ババアが何故か呆れ顔。俺たち何か変なこと
いいました？

「理由も何も、そういう学習方針だからね。
甘ったれたこというんじゃないよ！」

「それは困ります、それだとクラスで体の
弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言ってるんだけどね……。
可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞
くなら、相談に乗ってやるうじゃないか。」

「ん？なんだこのババア。何を考
えてやがる？
お、雄二も気づいてるようだな。」

「それで、その交換条件ってのは
なんですか？」

学園長が言うにはこういうこと。

清涼祭の召喚大会の優勝商品が「白金の腕輪」と「如月ハイランド
プレオーブンプレミアムチケット」があるそうなんだが、そのプ
レミアムチケットで如月ハイランドにいくと、無理やり結婚させら
れるそうで…

うちの学校は美人とかきれいだ
ころが多いからな。
それで交換条件ってのは「召喚大会の優勝商品」を学園長に
くれてやったら、こっちもやって
くれる、とよ。

俺としては優子と行きたいな
なんて…
ちなみに、雄二もなんか大
変っばい。霧島と適当な約
束したんだろ、
どうせ。

「じゃあ、こちらにも提案がある。」

「なんだい？」

「召喚大会は2対2のタッグマッチだと聞いている。対戦表が決まったら、科目を指定させていただきたい。」

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかわたら一蹴してた所だけどね。」

「ふむ？という事は俺たちにだけ頼んでいるわけか？」

「あ、学園長。その大会、俺も出るんで、そこんところお願いします。」

「あんたがかい…？ダメさね。アタシはこの二人が出るなら、ってことで話してるんだ。」

「…やはりおかしい。目的はプレミアムチケットではない？」

「いえ、俺だったら、結婚を考えてる相手がいるので、プレミアムチケットを有効に使えるし、その方が学校としてもいいんじゃないですか？」

「……好きにするといいさね。」

「あと、ペアなんだからチケットは二組ですよ？明久たちが優勝しても一組もらっても宜しいですか？」

「ふん、好きにしな。」

「やっぱり目的はプレミアムチケットではないことは確かだな。」

「じゃあ、白金の腕輪か？」

「ちい、謎が多い。」

「多分、決勝で明久たちと戦うことになったら、優勝は譲るんで、俺のチームと明久たちは反対の所にしてもらえますか？」

「…はあ、わかったよ。それぐらいならやってやる。」
「ありがとうございます。それでは、失礼します。」

謎は多いがまあいい、優子とチームを組んで決勝までに行こう。
雄二、明久、しっかりとやってくれよ？

16話目。クソババ、もとい学園長との交渉。(後書き)

修正しました

でもやっぱり微妙…

17話目。清涼祭の開幕。（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールをーー』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

宮村有馬の答え

『ぶっ、愚問だな。我ら中華喫茶ヨーロッパピアンの制服はチャイナド

レスに決まっておろう！(ムツツリーニが作ってくれました。)

教師のコメント

どうしてそこで偉そうにするんですか？

17話目。清涼祭の開幕。

そんなわけで、清涼祭の初日ですっ！

優子には事情を話して一緒に召喚大会に出てもらうことになりました。

まあ俺と優子なら、優勝は簡単だろうけどさ、決勝で明久たちと当たるんだったら優勝は譲るつもりだ。
学園長もその方がいいみたいだし。

「よし、室内の装飾もテーブルも完ぺきだ…が、一応、本物のテーブルとか机とか用意してもらえるか？今回、何があつて、誰が動いているのかわからないからな。」

「うむ、一応用意はできるが、あつても2つじゃぞ？」

「十分だ。それだけありやもしクロスをめくられても『テーブルの搬入が遅れてしまつていて』とかいいわけできるだろ？」

「わかつたのじゃ。」

こんだけいいとは思わないけど、まあいいさ。

すぐ近くに置いておいてすぐ持ってこれたら大丈夫だろ、多分。

「……………胡麻団子、持ってきた。」

「おう、ムツツリーニ。厨房のほうはいいのか？」

「……………味見用。」

「そうか。おい、明久、島田。胡麻団子の試食会するぞ。」

「試食？わかつた、今行くよ。」

というわけで、俺と明久、島田とムツツリーニの4人で試食開始。
と思つたら、姫路も現れたので5人で。

「これ、ウチらで食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「それじゃあ、遠慮なく。」

姫路と島田が手を伸ばし、作りたてで温かいであろう胡麻団子を口に入れる。

その反応は…

「お、おいしいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」

「甘すぎないところもいいです！」

と大絶賛。

すまん、秀吉…俺がテーブルを頼んだばかりにお前にやることができなかつた…

「じゃあ、俺たちも頂くか。」

「そうだね。」

「……………（コクコク）」

ムツリーニが残った2つを俺たちに差し出す。

手でつまんで一口食ってみた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　んゴパツ」「

俺と明久の口からありえない音が…

ああ、俺の16年間の軌跡が目に見えかぶ。ああ、このころから優子は可愛かつたなあ……………って違う！

「あ、それはさっき私が作ったものですね。」

「……………!!!(グイグイ!)」

「やめるムツツリーニ！おびえながら俺の口に胡麻団子を突っ込もうとするな！」

なるほど…姫路の料理は殺傷効果ありか…

まさか、胡麻団子を食っただけで走馬灯を見れるなんてな…

「うーっす。戻ってきたぞ！」

「ただいま返ったのじゃ。」

とそんなところで雄二と秀吉が帰ってきた。

「あ、二人ともお帰り。」

「二人ともご苦労さんだったな。」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

「あ、ワシも頂くのじゃ。」

雄二と秀吉が、俺たちの食っていた胡麻団子（という名のバイオ兵器）を口に運ぶ。

「おまえら、大した男だよ…」

「二人とも。君たちは今、最高に輝いてるよ。」

「ん？お前らがいつてことはよくわからんが。」

こいつらはすごいな…自分の身を挺してバイオ兵器をこの世からなくそうだなって…

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎ

ず、辛すぎる味わいがとつても　　んゴパツ」

さっきも同じようなこと言った気が…
デジャブってやつだな。

「あー、二人とも、美味しかったよな。」

「とつてもおいしかったよな?」

そう言いながら俺は秀吉に明久は雄二に目で『これは姫路の料理だ。酷いことは言つなよ?』と訴えかける。

「ふっ、何の問題もない。」

雄二からは返事があつた。秀吉、大丈夫か、こいつ…

「あの川を渡ればいいんだらう?」

「そうじゃな、あの川を渡れば大丈夫なはずじゃ。」

秀吉が意識を　　って違う!不味いぞ!それを人は三途の川と言
う!

「二人とも、その川はだめだ!きつと戻れなくなる!」

島田と姫路に気づかれないう、必死に心臓マッサージしたら何と
か二人の意識は取り戻したが…

危うく、二人の尊い命が消えてしまうところだった…

明久が姫路をホールにさせたかつた理由がわかつた気がする。

このあと、明久がペアチケットのことで姫路と島田に色々言われて
いたが、俺は召喚大会があつたのでそそくさ逃げましたとさ。

17話目。清涼祭の開幕。(後書き)

えっと、次回は召喚大会ですっ！

が、有馬と優子じゃ楽勝っぽいんで大したことはないんですけどね

18話目。召喚大会、それと営業妨害。…死なすーって感じですよ。

「それでは、召喚大会一回戦を始めます。」

ただいま、校庭に作られた召喚大会特設ステージですっ！

「三回戦までは一般公開もないので、リラックスして全力を出してくださいね。」

一回戦目は数学となっております。

ついでに、俺たちはBブロックですっ！

あ、このしゃべり方疲れたからやめるわ。

「では、召喚してください。」

さっさと終わらせたいのか話の流れが早いっすね、先生。

そりゃ、一回戦は32組もあるんだから、当然っちゃ当然か。

「んじゃ、行くぞ優子。」

「ええ、即行で片をつけましょ！」

うむ、やっぱり優子は元気が1番。

あの事件以来、ちょっとよそよそしかったからな。

「サモン試験召喚」「」「」

俺と優子、相手2人の召喚中が現われる。

『Cクラス 中山光子&Cクラス 遠藤綾香

数学 167点 & 142点

ふむ、やはりこの程度か。

『Aクラス 木下優子&Fクラス 宮村有馬
数学 447点 & 421点』

「お二人さん、悪いがさっさと終わらせてもらうぜ？」

「え、ちよつと、待ってくれないかなーって」

「お願い、有馬くん。」

2人が上目遣いでお願いしてくる が。

「悪いな、俺には負けられない理由があるんだ。」

「…負けられない理由って？」

「それはだな」

俺は大きく息を吸って言い放つ。

「優勝して、優子と如月ハイランドでデートしたいんだ！」

バカップル？上等じゃねーか。

あ、もちろん、姫路の転校を阻止するってのもあるぜ？

でも、それはあまりいえないからな。

横で優子が「有馬…」と潤んだ瞳で見してきた。

ありまのやる気がアップしたぞ！

「面倒なので即行腕輪！」「インパクト（笑）」

隕石が落ちてきて、その後優子が攻撃して終わり。

楽勝だな、やっぱ。

「はあ、負けちゃったか…」

「いいね、木下さんは有馬君みたいなステキな彼氏さんがいて。」

「私たち、結構狙ってたのにね。」

なぬ！？なんとステキな情報を…

というか、俺、この2人と面識ないんだけどな…

その後、2人は帰っていき、俺と優子もクラスに戻る。

「やっぱ有馬って人気あるのね。ちょっと妬いちゃう。」

「お前が言うか？この美少女が。」

「そ、そんなことないわよ…」

優子が顔を真っ赤にして否定する。

ふむ、ちょっと写メりたい。可愛い。ありえない。

「んじゃ、そつちも頑張れよ？メイド喫茶だったよな。時間があったら行くから。」

「うん、ありがと。私もそつちに行こうとは思ってるから。」

「あ、いや、来なくても大丈夫かなーなんて。俺ちょっと女装するし。」

「女装！？じゃ、じゃあ、絶対いくからまっててね？」

あ、そっぴや優子って軽い腐女子だったっけ…

女装とか、そっぴやの好きだったのかもな…
失敗した。

「んじゃ、とりあえずまたあとで。」

「うん、あとでね。」

優子と別れて（付き合いをもって意味じゃないぞ？）、俺はFクラスに戻る。

チャイナ服に着替えが終わり、俺　いえ、あたしはFクラスの出し物「中華喫茶ヨーロッパ」にて接客します。

「いらっしやいませ、お客様。こちらの席へどうぞ。」

お客様が顔を赤くさせてボーっとしております。どうしたのでしょうか？

「君、可愛い　いや綺麗だね。名前は？」

「はい、あたしの名前は宮村さくらと申します。どうぞ気軽にさくら、とおよび下さい。」

「さくらちゃん？へえ…こんな子うちの学校にいたんだね。」

こんな感じの方が数名いらっしやいまして、困ったものです。中には撮影しようとする方もいらっしやいました。謹んでご遠慮しましたが。

そんななか、モヒカンと丸坊主という2人の方がいらっしやいましたの。

「いらっしやいませお客様。こちらの席へどうぞ。」

「へえ、思ったより綺麗にしてんな。何より、あんたも綺麗だし。」

「お褒めいただき、光栄です。それでは、こちらがメニューとなっておりますのでご注文が決まり次第お呼びくださいね。」

そういつてあたしは別の方のところへいきましたの。

すると、さっきのお客様が

「うわ、なんだよこれ、きつたねえな。」

「おい、ここ食い物扱う店だろ？ふざけんなよ！」

クロスをめくるだけじゃなく、更に周りの人にはらしてきましたの。
…営業妨害ですね。まさか、本当にくるなんて…

「あ、秀吉さん、例のもの、もってきてくださいます？」

「それはいいのじゃが…そのしゃべり方と声はどうにかならぬものかのう。少し、違和感があるのじゃが。」

「申し訳ありません。この格好でいる間はこうしないとイケませんの。あのお客様の相手はあたしがしておきますので、どうかお願いします。」

「う、うむ、了解じゃ。」

そういつて秀吉さんと他数名がテーブルをとりにいきましたの。
では、あたしはこの方たちのお相手といきましょうか。

「まったく、どうかしてるぜこんなやつの上でもの食わすなんてよ。」

「ホントだよな。汚いたらありやしねえ。」

「あの、お客様？」

「ああ、何だよ？　　つてあんたか。あんたには悪いが、これは一体どういうことだい？」

「そうだけ、曲がりなりにもここは物を食うところなんだぜ？」

2人とも、あたしに対しては悪いと思っているみたいですね。

さっきまでは陥れてやるーって顔だったのに、今は少し優しい顔です。

でも

「ひ、酷いですっ！先輩方…。ここが、Fクラスだってわかって言ってるんですよ？この学校でFクラスということの意味をわかっていますよね？確かに、みかん箱はあたしたちも酷いと思います…。でもっ、それでも、ちゃんと消毒だつてしてますし、それは本当いたりない所だけなんです。ほらっ、あそこでは普通の机を使っているでしょう？そこは、テーブルの搬入は遅れてきてしまっ、しよっうがなく使っただけなんです。あ、ほらただいまテーブルが届きました。なので、こちらをお使いくください。お客様、今回は本当に申し訳ありませんでした。」

ちよつと、長くしゃべってしまったが　この2人にも、周りの人たちにも話は理解していただけたみたいで良かったです。

「あ、ああ、なんか、すまなかつたな。」

「ああ、俺たちが悪かつたよ、許してくれ。」

2人は改心(?)してくれたみたいで良かったです。周りの方たちも、拍手をしてくださってますし。

「いえ、こちらこそすいませんでした。では、ゆっくりしてってください。」

そう言っ、あたしは厨房に移る。
そして

「ああ、マジやばかつたし面倒だつたしー。お前ら、ちよつと感謝してくれてもいいぜ？俺が女装したらこんな感じになるし、それと演技があいまってあいつらをTheSakuraWorld(笑)

にもってこれたんだぜ？ってムツツリーニ、俺を撮るな！さっさと注文のつくれ！」

素を出していた。

それどころか、ストレスでいつもより酷かった。

女装してる間は、その自分、宮村さくらになりきれてるからいいけど、戻ったらこれだ。

はあ、くっそ、マジ疲れたし。

んじゃ、あとで雄二に報告しないとな。

それに、俺のおかげで一時的にThe Sakura World（笑）にもってこれたが、もしかしたら自我というか、自分を取り戻してなんかするかもしれないしな。

そんなこんなで、着替え終わりました。ぶい。

18話目。召喚大会、それと営業妨害。…死なすーって感じですよ。(後書き)

女装、マジでやらせちゃった…。

ついでに、女装してる間は裏声使ってます。

ちなみに女装時のCVはひと美さま、もしくは豊崎愛生さままで。

うん、別に誰でもいいんだけどさ

あい、というわけではいちゃにー

19 話目。 INメイド喫茶。 我が生涯、 一片の悔いなし。 (前書き)

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-Keeping-Operations』

教師のコメント

そうですね。 United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。 余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-ttsuki Oppai』の略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田』の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

宮村有馬の答え

『Peace-Keeping-Operations』

教師のコメント

一瞬、まともな回答に驚いた先生を許してください。

19話目。INメイド喫茶。我が生涯、一片の悔いなし。

「えーそれでは、召喚してください。」

はい、というわけで召喚大会二回戦なり。

えーと、二回戦目は英語ですっ！

「82355167889。」

「天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんが相手になってやる！」

……俺は突っ込まない、俺は突っ込まない。

大事なことなので、2回言いました。

多分、俺と同じような人種：つまりオタクキーな方なのだろうが、さすがにひいた。

あ、ちなみにまたもや両方女の子です。

「ねえ、有馬：この人たち何なの？どう接したらいいかわからないよ……。」

「うむ、気にしたら負けだぞ優子。気にしない気にしない。」

ちなみに、優子の言動も一瞬気になったが、ただの偶然だろ。

別に、死神器職人専門学校とかとは関係がないはずだ。

まあいいや、もう。

「……試獣召喚サモン」「」

4体の召喚獣が現われるが、色々面倒なので即行で終わらせるぜ。
英語は苦手だから、腕輪使えないしな。

シュっ！

よし、終了。

点数が出る前に終了。

悲しいけど、これって戦争なのよねー。

「3746208746828!?!」

「そ、そんな…天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんが負けるだなんて…」

「いや、だからお前らなんなんだよ！異常な方ですか？^{アブノーマル}魔装少女なんですか？13組とヴィリエに帰れ！」

はっ、ついうっかり突っ込んでしまった…

まあまあ、しょうがないこと、俺は悪くない。間違っでない。

そう、間違ってるのは俺じゃない！世界の方だ！

「よし、優子。二回戦突破だ。たつとと帰るぞ。」

「へ？あ、うん。そうだね。かえろつか。」

これ以上ここにはいられない…

「野郎どもっ！ただいま帰ったぞ！」

うむむ？お客さんが少ないぞ？

テーブルは全部キレイにした。美少女（姫路、島田、秀吉）はしっかり接客してる。（秀吉のみチャイナ服で）他には—

とか考えてると雄二が

「おお、有馬か。ちょうど良かった。我がクラスの中華喫茶成功のためにちよっとお店に行くんだが、ついてくるか？」

「店？どういうことだ？詳しく説明を。」

雄二の説明によるとこーゆーこと。

島田の妹が明久を探しに現われた。その妹ちゃん 葉月ちゃん
っていうらしいが、その子がいうにはFクラスは汚いぜー。近づく
なよー。って言いふらしてるやつがいるらしい。

それで、今からそのお店に行くということ。

「なるほど、大体わかった。じゃあ、俺もついていく。というか、
秀吉から聞いてるかもしれないが、さつき営業妨害があつてだな。
モヒカンと坊主のやつがきたんだよ。常村と夏川って言ってたきが
するが。まあ、多分そいつだろ？」

「ああ、俺もそう思ってた。俺がいたら『パンチから始まる交渉術』
を披露できたんだがな…。」

さすがは悪鬼羅刹。本気で殺りたそうだ。
というわけでまたもや移動ですっ！

「明久、有馬。相談なんだが」

「断るっ！俺は今日この為に生まれてきたといつても過言ではない
っ！」

「頼む、Aクラスだけは勘弁してくれ…」

はい、というわけでAクラスですっ！

【メイド喫茶『ご主人様とおよびっ！』】というなんともよくわか
らんネーミング。

メイドですか？ご主人様ですか？あ、両方でしたか。

そっぴや、いたよね。なんか魔王の妻なのにメイドやってる人。

『サンダーキック』を使って岩を砕いたりとかする人。

うむうむ、文月学園では、突っ込んではいけないことが多々あると

いうことを今日再認識した。

「……………（パシャパシャパシャパシャパシャッ！）」

…あれ？これって、ムツツリーニ？

あ、しかも、雄二がやられている？明久か？いやいやまさかな…人が考え事してる間に現世では長く時が進んでいたようだ…。

「ムツツリーニ、何やってるんだ？」

「……………人違い。」

うちの厨房責任者はカメラを片手に否定のポーズ。
うむ、さすがだな、感服したわい。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか盗撮なんて。そんなことしたら撮られてる女の子が可哀相だと」

「……………1枚百円。」

「2ダース貰おう 可哀相だと思わないかい？」

「明久お前、普通に注文してるぞ…」

吉井明久。どこまでも欲望に忠実な男よ…

「……………そろそろ当番だから戻る。」

ムツツリーニはそういつて明久に写真を渡し、教室に戻ろうとする。
プリントアウトまでしてるのか…じゃなくて！

「ちょっとムツツリーニ、お待ち。」

「……………何か用？」

「いや、えっと、優子の写真、あったらくれないか？それで、他に

誰にも渡さなくれると助かる。というか、優子の写真を撮るな、
とは言わないから俺以外には売らないで欲しいんだけど、いいか？」
「……………わかった。」

以上、秘密の小言会談。

ムツツリー二はいい笑顔で了承してくれた。

ああ、親友っていいもんだね。

ちなみに、この会話をしてる間に明久は写真を見た所為で姫路と葉
月ちゃんに怒られていたの言うまでもないことである。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔します。」

島田が先頭になって俺らが続く。

「……………いらつしゃいませ、お嬢様、ご主人様。」

すると、霧島が迎えてくれたんだが、なんていうかその

「わあ、綺麗。」

その通りだ、姫路。それを言いたかったんだ。

たしかに、霧島は綺麗だな、うん、すばらしいね。

「あ〜り〜ま〜？どうして、代表を見て鼻の下伸ばしてるのかな〜
？」

……………ま、不味い。優子がいる。優子が凄くいい笑顔でいる。すば
らしいくらい怖い笑顔でいる。

「あ、いや、これは、そのーだな……」

「うん、どつしたの？」

「別に、霧島に見とれてたとか、そういうんじゃない。待つて！その関節はそっちに曲がらない！反対だから！人の関節は普通、そっちに曲がらないから！」

「ふんっ！」

優子にサブミッション（だっけ？）をかまされた…超いたいっす、マジヤバいっす。というか、優子怒ってあっちいっちゃったし…

「チツ。」

とかやってたら雄二がしぶしぶ入場。

「お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」
凄いくらいにアレンジされていた。

「霧島さん、大胆です…」

「ウチも見習わないとね…」

「お姉ちゃん、寝ないで遊ぶのかな？」

三者三様のコメント。

あと、島田は見習ってどうするつもりだ？
じゃなくて、それよりも

「悪い、じゃあ俺、ちょっと優子の機嫌直しに行くから、後は任せ
た。」

「あー…。まあ、わかった。生きて帰れよ。」

「…お前もな。」

雄二と俺はどこか共感できるところがあるな。
そんなわけで、優子のところに来た俺。

「あー、優子。その、なんだ悪かったよ。」

「…ふんっ！どうせ有馬は私みたいな子じゃなくて代表みたいな綺麗な人が好きなんでしょ？」

あららー…

だいぶ拗ねてらっしゃる。どうしよつか…

「いやな、確かに霧島には見とれてたよ。」

「…やっぱりそうなんじゃない。」

「でも、俺はさ、優子の方が好きだ。優子の方が可愛いと思う。確かに一瞬見とれてた。けど、やっぱり優子が1番だって。だから、機嫌直してくれよ、な？」

「有馬…」

優子の顔が赤くなりつつ微笑みに変わらなかつた。
あれ？一瞬笑つてー、すぐに元の顔に戻したって感じか？

「ふ、ふんっ！そ、そんなこと、言葉だけならなんとだっていえるわよー！」

…そ、そんな優子が、「べ、別にもう怒ってるわけじゃないんだけど、怒ってる振りをしたらもうちょっとお願いできるかもしれない」とか、みたいなこと考える子に進化を遂げていたなんて。元々デレデレな優子がツンデレに進化（退化？）したらどうなるって言うんだ！

有馬、戦闘不能！勝者、木下優子！カンカンカンッ

的な状態に？

くそ、今でも十分好きなのに、これ以上好きになったらどうするんだ？

え、更にヤンデレ化？異常な愛でヤンデレ化する？マジか？どうしよう…

萌えるけど、不味いっす。命がたりなくなるっす。

「えーっと、有馬？聞いてる？」

「はっ、俺は何を？」

不味い、最近ホントにこれが多いぞ？

考えに没頭して、自分の世界に入り込んでしまう。

「で、えっと、俺に何を要求してるんですか？」

敬語になるのはしょうがないよね。

俺が、悪いんだから、下に出ないとね、うん。

「だ、だから、その、私に、き、いやいやそれは不味いか…」

優子が一人、悩み始めた。

もしかして、要求が決まってない？

「えーっと、なんだ、その、要求が決まってないならさ、うん、このたたか　じゃなくて、清涼祭が終わったら俺とデートしてくんない？ほら、ペアチケット使ってさ。」

「へ？あ、うん、大丈夫よ？」

優子がかなり声裏返ってます。

そんなわけで、この戦い（召喚大会と清涼祭）が終わったら、俺は、

また一つ、大人に近づこうと思います。
デートだなんて、初体験ですし。
少しどころじゃなく、やる気が出たぜ。

P・S・モヒカン&坊主(=常夏コンビ) 雄二命名(=はやっぱりこ)
ここで悪さしてたので、明久たちが懲らしめたようです。

19話目。 INメイド喫茶。 我が生涯、一片の悔いなし。(後書き)

ヴァルヴァルー、桜餅です

なんか、無理やり感が否めないー

スランプ？ いやいや、元々こんな感じだったかも？

というわけで、今回は色々ネタを使った気がする。

うん、じゃ次回もまた見てくださいね？

じゃんけんぽ！うふふふ

20話目。チャイナ服。それは世界の、宝物。（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他（）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希×木下秀吉×島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】候補・・・霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

宮村有馬の答え

『【？可愛らしさ？統率力？行動力？その他（結婚相手）】候補・
・・・木下優子』

教師のコメント

2人の仲の良さはわかりましたが、木下さんはAクラスです。

20話目。チャイナ服。それは世界の、宝物。

「勝者、宮村&木下ペア」

というわけで三回戦終了。

べ、別に面倒だから省略とか、そういうわけじゃないんだからねっ
!??

「それじゃな優子、頑張れよ。」

「そっちこそ、頑張ってるね。」

俺と優子はいつも以上にラブラブる。

雨降って地固まるって感じかな？

「二人のハニーボーイ シャイボーイ あいじょーおはんぶんこ」

テンションあがって歌いながらるんるん。

ちなみに俺の歌声は一緒にカラオケした女の子に『甘い声』という
評価を貰ってるぜ。

「思い出 なんていつらないよー」

歌う曲がアニソンばかりというのはしょうがないことなのであー
る。

しかし、凄いよなこの軽音部を主体としたアニメ。
人気あり過ぎだろ。

「WWW忘れ物〜 ういーっす。」

そういつてFクラスの扉を開けるとそこには

「中華喫茶ヨーロッパへようこそ！」

チャイナ服を着た、美少女たちが…

「ここは、桃源郷か…？」

「って、宮村だったの？折角来たと思つたのに…」

「あ、なんかすまん、というかどうしてチャイナ服を？」

確か島田と姫路は恥ずかしいからという理由でチャイナ服を拒んでいたはずだが…

「え、えつと、その…」

「べ、別にアキがチャイナドレスを好きだから、とかそんな理由じゃないんだからねッ！」

「そ、そうです！別に吉井君がチャイナ服を愛してるからとか、そういうわけではなくお店の売り上げの為にですね」

「あー、はいはいわかったわかった。そんなに明久のことが好きなのな、うん。お兄さんはしっかり事情を理解したから感謝しなさい。」

「そうよ、だからアキとは何の関係も　　って違うわよっ！あん

たなんにもわかってないじゃない！」

「ちっ、はまらなかつたか…ナイスノリ突込みだ、島田！お前はいい選手になれるぞ！」

「何の選手よ！ああ、もう、突っ込み疲れた…」

島田がマジで疲れた顔してたので、これぐらいにしておこう。

「じゃあ私たち、召喚大会があるので、これで失礼しますね。」

「おう、いつてら。じゃあ、俺も着替えるとするかなー」

「え、有馬、着替えるって何に？」

「何って…チャイナ服に決まってるだろ？」

「…有馬、そんな趣味があつたなんて。僕たち、ずっと友達だからね？」

「待てい、そういう趣味があるわけじゃないわ！それにそれを言ったら秀吉だつてそうだろうが！」

「秀吉は、性別が秀吉だよ！」

なんかもう、色々と疲れた…

ボケと突っ込み、両方やらされるなんてな…

まあいい…

着替え中…女装中…しばらくお待ちください

「はい、みなさん、宮村さくらです。クラスの設備向上のため、頑張つていきましょー！」

『おおおおおー！』

うん、みなさんのやる気が上がってくれてよかったです。

女装してるってわかつてても騙されるんだから、不思議ですよね。

「有馬、その、なんていうか、本当に有馬なの？」

「ええ、一応。でも今はさくら、とお呼びください。」

そうしないと、本当に目覚めてしまいそうなので。

ちなみに、キャラが一定してないのもそれが理由ですの。

「それでは、あたしは客寄せに行ってくるので、みなさんはその方たちを頑張ってくださいーい」

『はーいっ！ー！』

本当に、おバカさんなんですね。
こっちは男の娘だっというのに。

「それじゃ、いってきまーっすー！」
『いってらっしやーいー！』

まるで、声優のライブに来たオタクさんですの。
この一体感、凄いですね。

というわけで、客寄せの術！です。

「みなさーくん、2・Fの中華喫茶ヨーロピアンきませんか？美味
しい胡麻団子や飲茶がありますよー。どうですか？」

という具合に客寄せして たんですけど…

「君、可愛いね、名前は？」

「あ、はい、宮村さくらです。さくらとお呼び下さい。」

「ねえ、俺とデートしない？」

「すみません、今、仕事中です…。」

「いいじゃん、遊ぼうよー」

絡まれてしまいました…

2・Fの名前を出してる以上、暴れることも出来ませんし…
困ったものです。

「えーっと、有馬…よね？」

助け舟がキターーーーーー！！

あ、つい、素が出てしまいました。

というわけで優子ちゃんが参上です。

「優子ちゃん、ちょうど良かったです。この方たちをどうにかしてくれませんか？あと、今はさくらと申します。」

「ちょ、ちょっと可愛すぎない？まあいいわ。ちょっとみんな、私、この子と話しがあるから相手してあげて。あと、できれば2・Fに仕向けるようにしてあげて。」

『はい、チーフ！』

Aクラスのメイド軍団に指示する。

というか、優子ちゃんはメイド長か何かなのでしょうが？

「で、えっと、本当に有馬なの？」

「はい、宮村有馬です。現在は、宮村さくらという偽名を使わせてもらっています。」

「もう、完璧に男の娘じゃない…というか、可愛すぎだし…」

や、やばいです！エマーゼンシーです！

優子ちゃんが鼻血を出し始めました…

危険ですっ！だれか、誰か助けてくださーい！

「はい、優子ちゃん、ティッシュどうぞ。」

「あ、ありがと、えっと、さくらちゃん？」

「いえいえ。それよりも、よくあたしだってわかりましたね。」

いっちゃなんですが、今のあたしと普段では、違いすぎると思うん

ですけど。

「それは、えっと、愛の力？あと、匂いとか、雰囲気とか。」

…優子ちゃん、凄すぎなのですっ！

理屈じゃあないっ！って感じなのです。

「えっと、さくらちゃんさ、このまま召喚大会に出ない？」

「へ？いえいえ、無理ですよー。そんなことしたら、ばれちゃいますし。」

「でも、そのほうが宣伝になると思わない？」

優子ちゃんが凄いやらしい顔です。

彼女の新しい一面を知ってしまった感じなのですよ…

あ、あっちからしたら彼氏の新たな一面を知ってしまったという感じなのでしょうか？

「いえ、正体がばれてしまっっては逆に減るかもしれませんので、大丈夫です。優子ちゃんは、四回戦以降もメイド服のままなんですか？」

「ええ、そうよ？宣伝にもなるしね。」

「あたしとしては、優子ちゃんの可愛らしい姿を独占していたいのですが、そういうわけにも行かないですもんね。」

「ブハッ！」

「ちょ、優子ちゃん！？大丈夫ですよ！？」

優子ちゃんが吐血（のように見える鼻血）を出し始めましたの…

ちよっ、この子、本当に大丈夫なの？

この数分だけで優子ちゃんのキャラがかなり変わっていますのよ？
というわけで次回も、召喚大会です！

20話目。チャイナ服。それは世界の、宝物。(後書き)

ヴァルヴァルー、桜餅です

また出たさくらちゃん。

ちなみに、さくらちゃんは長身長髪美少女です。

見た目は綺麗系で、中身が可愛い系という設定。

感想、お待ちしてます、割りとマジで

それでは、ばいちゃんー

21話目。営業妨害？またですかーって感じー

「いらっしやいませ。中華喫茶ヨーロッパマンへようこそー」

というわけで、ただいま接客中です。

え？あのあとどうしたかって？

それはだな

『チーフ！大変です！私たちの盗撮写真が出回っています。』

『盗撮！？わかったわ。すぐ対処します。あ、さくらちゃん、言うことだからまたあとでね？』

『へ、あ、はい、頑張ってくださいね？』

ということがあったんだよ。

その盗撮写真ってまさかムツツリー二のじゃないよ…？

いやいや、まさか…ね？

「いらっしやいませお客様。こちらの席へどうぞ。」

へ？どうしてさくらじゃなくて有馬なのか？だって？

それはだな

『おい、有馬。そろそろ女装やめていいぞ。』

『あ、はい。わかりましたのです。でも、どうしてですか？』

『ああ、男性向けにはお前以外に3人もいるだろ？んで、お前には女性向けになってもらいたい。』

『？あたしが普通になったら女性向けになるのですか？』

『ああ、だから頼んだよ。』

ということがあったからです。
よくわからないけど、設備向上のためにはこっちの方がいいらしい
しな。

「はい、ご注文は本格ウーロン茶と飲茶が二つずつでよろしいです
ね？」

あ、それとお客さんがいっぱいになったぞ。見たらわかると思うが。
俺と秀吉と葉月ちゃんさくが歩き回って宣伝したり、姫路と島田が召喚
大会でPRしてるおかげだな。

「アキ、宮村、厨房の土屋から茶葉がなくなったからもって来て欲
しいって。」

「あいさー、了解です。」

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」
「構わんよ。」

ん？明久が教頭と何か話してた？
ふーむ…まあ、いつか。

「それじゃ行くよ、有馬。」

「おう、承知である！」

というわけで、ストックのある空き教室にきました。

…あれ？そういえば

「なあ、明久、茶葉はどれくらい持ってけばいいんだ？」
「奇遇だね、有馬。僕もそれを疑問に思ってたところ。」

ふむ、やはりな…

適当に持つてけばいいかなーとか考えてると

「おい。」

「ほい(うん)？」

変な野郎三人組が現われてました！。

同年代ぐらいかな？

「あ、すみません。ここ、関係者以外立ち入り禁止なんで、出てつてもらえますか？」

「そうはいかねえ。吉井明久つてのと宮村有馬つてのに用があるんだ？」

そういつて、扉を閉められた。

え、なに、これから私たち襲われちゃうの？嘘、私の貞操は優子に捧げるつて決めてたのに…

とまあ、冗談はさておき、売れ行きが良くなった俺らへの営業妨害つてところか？

やつは今回は何かが動いているな…

メカネ
教頭か？学園長か？それとも別のやつか？

まあいい、とりあえずいまはこいつらの相手だ。

「あ、すみません、人違いです。俺の名前は杉田智和つて言つんですけどね。」

「それ、声優の名前だろ！しかも、さっき名前で呼び合つてたし、召喚大会も見てるんだよ！」

む、こやつ、声優がわかるのか？

なかなかやる　　うおっと、危ないつて！

「ちよ、なんすかいきなり。殴りかかってこないでください！」
「うるせえ！逃げんなこら！おとなしくしてる！」

人が考え事してるときに攻撃とは…えげつないやつよのう。
相手からやってきたんだ、正当防衛になるよね？

「てえーい！」

やる気のない掛け声で攻撃する。

「最初に言っておく！俺はかーなり、強い！少林寺拳法初段だぜよ？」

「てめえ、よくもやりやがったな！」

「くそ、としちゃんをよくもつ　。」

え？俺、悪者？

先にやってきたのそっちだよね！？

とかちよつと混乱したら扉ががらつと開いた。

「おい、2人とも、ムツツリーニが餡子も急いでくれってよ。」

「あ、雄二、ちようど良かった。こいつらが雄二と喧嘩したいってよ。」

「おい、どういう　　ああ、そういうことか。じゃあ、明久は邪魔だからでてる。」

「言われなくても、そうするよ。」

友達をおいていくなんて、薄情なやつだな…。
まあいい、やつつけるぞ。

ただいま、リアル格ゲーごっこ中です。しばらくお待ちくだ

さい

暇かもしれないので、音声のみでお楽しみください

「てえい、かめはめ波ー！！！！」

「え、ちよつ、マジでなんか出て　　うぐふつ。」

「俺のターンはまだ終了しちゃいないぜ！ドローモンスターカード
！」

「ちよつ、まつ、悪魔　　。」

「止めだ！川神流！星砕き！」

「ちよつ、おま、それは　　あああー！！！！」

「よしつ！、勝った！マジコイ完！」

ふむ、遊びすぎたか：

ちなみに、かめはめ波なんて出せませんよ？

ただ、瞬きした瞬間に高速で攻撃したからそんな感じに見えただけ
で。

私は人間だから、気なんて扱えないんだ。

「…有馬、お前、何者だ？」

「通りすがりの高校生だ！覚えておけ！！」

我ながら最近、こつこつこの多い気がする。

まあいつか？

はい、というわけで、茶葉と餡子は無事に厨房に届けることが出来
ましたと。

それじゃ、接客に戻ろうかねー。

21話目。営業妨害？またですかーって感じー（後書き）

ヴァルヴァルー、桜餅です

あい、ふざけてました。

というかね、この話書くのに2回も消されちゃったんですよ！

それで、もうね、うん、やっちゃいました

ちなみに、少林寺拳法ではかめはめ波は習いませんのでご注意ください。
さい。

それでは、ばいちゃにー

22話目。愛の力は強いのだよ！というわけで新キャラ登場？

「有馬。そろそろ時間じゃないのか？」

「ほい？あ、マジだ。」

接客に夢中になってたらもう召喚大会の時間になっていた。
時が過ぎるのは早いものよのう…

「んじゃ、ちよっくらいつてくる。」

「おう、勝つてこいよ。」

「当然。俺らが負けるとでも？」

俺と優子の超天才コンビで負けるとは思えない。
ましてや相手がBクラスだったはずだし。

「というわけで、さらばだ。」

そういつて俺は召喚大会の会場へ向かった。

『それでは、四回戦を始めたいと思います。』

というわけで召喚大会四回戦です。

ぎゃ、ギャラリーが多いな…

「えと、稲沢さんと鈴木さん？久しぶりだね。あの金魚はまだおつきくなってるの？」

対戦相手は中学校の頃同じクラスだった二人。

実は、Bクラス戦で最初に倒した中に含まれてたり…

ちなみにこの二人、幼馴染でカップルです！　ここ重要

「あの、宮村くん…」

「はい？どうしやしたか、稲沢くんや。」

「いや、俺、稲沢じゃなくて、稲葉なんだけど…」

あるえ〜？

おじさん、ボケちゃったかな？

「うむ、気にするな、稲沢くん。いや、これからは親しみを込めて稲沢と呼ぼう。」

「いや、だから稲葉だつてば！」

うむ、というわけで新キャラ登場。

今後、稀に出では活躍します。(予定)

「ちょっと有馬、何電波的なことをつぶやいているのよ！…」

優子が呆れ顔で見してきた。

…あれ？でも俺今口にしてないぞ？

心、読まれたのかな…？

いやいや、まっさかねえ？

「そ、そうよ？心なんて読めるわけないじゃない。」

「いやいや、思いつきり読んでるよね！？俺の心、わかってるよね！？」

いつの間に読心術なんて身につけたの？

優子…恐ろしい子。

というわけで優子とは「」がなくても話せるようになりました！

たらたらっ たたんだーん

「メタな発言禁止！」

…怒られた。優子に怒られた。

とりま、話の都合上で物語を進行します。

『えーと、準備はよろしいですか？』

「あ、はい、問題ないです。それじゃあ

」

息をそろえてー

「サモン」試獣召喚「サモン」

『では、四回戦を開始してください！』

召喚獣による戦いが繰り広げられる。

さすがに四回戦、他の相手よりは手ごわいっす。

「なかなかやるなー、稲沢！前より強くなったか？」

「そりゃ当然！Fクラスに負けて以来、僕たちは勉強してるからね！今ならAクラスに入れると思うよ？それと、僕は稲葉だって！」

そっいうと、少し遅れて大型ディスプレイに点数が映しだされる。

『Bクラス 稲葉光彦 & Bクラス鈴木麻耶

古典 387点 & 346点

』

ふむ、確かにAクラス並だ。

こいつら、本気で頑張ったんだろうな…
だから

『Fクラス 宮村有馬&Aクラス木下優子
古典 432点 & 426点 』

だから俺も、全力でつぶす！

手加減は一切無用だ！それが俺の礼儀。

俺だって、Aクラス戦以降、いつも以上に勉強してるんだぜ？

「悪いな、稲沢。本気でいかせてもらう！」

「上等だよ！！負けてなんかやらない！」

ちなみにあつちでは優子と鈴木さんが

『あたし達が勝って、如月ハイランドに行くんだから！』

『だめ！如月ハイランドはあたしとみーくんが行くの！』

女の戦いが繰り広げられていた。

ていうか優子さんや…それが本当の目的じゃないんですけど？

「稲沢よ、俺はお前の頑張りに応えて腕輪を使わない。だから、全力でかかってこい！」

「どっちにしろと、そのつもりだったよ！」

うむ、こいついい奴だな。

俺、この戦いが終わったら、こいつと友達になるんだ…

これも死亡フラグに入るのかな？

まあ、現実ではそんなことが起きないから良いんだけどね。

「てえい！うおっと！危ないっての！」

稲沢の猛攻。ちよっとヤバいです。

稲沢、マジで頑張ったんだな…
何がお前をそこまで強くしたのかはわからない。
でもよ

「俺も、負けるわけにはいかないんだよ！勝たなきゃいけない理由があるっての！」

「知ってる。なんとなくだけど、わかってた。」

「じゃあ、あとは拳で語り合うだけだな！召喚獣だけ。」

というわけで、ぶっちゃけさ、バトル漫画っぽくやってみたかっただけなんだけど、意外とはまりますな。

だってこいつ、ノリいいし、いい奴なんだもん。

真っ直ぐというか、純粹というか、正直というか？

にしても、本当に強いです、稲沢。

ここまでやられたのは、優子と戦った時以来なり。
でも

「悪い、稲沢。これで終わりだ。」

俺は稲沢の召喚獣に止めをさす。

小さく、それでいて力強い渾身の一撃で。

「……あゝ、負けちゃったか。残念。」

「ああ、俺の勝ち。でも、お前も強かったよ、本当に。」

俺は稲沢と握手する。

本当に、バトル漫画みたいに青春してるって感じになりますな。

「あ、有馬も終わったの？」

「お、優子そつちも片付いたか？」

「ええ。でも鈴木さん、本当に強かったわ。」

「そつちもか？こつちも稲沢は強かった。Bクラスとは思えないほどにな。」

『ただいまのバカップル勝負、勝者！宮村・木下ペア！』

うおおおおーと歓声が沸く。

うむ、少し心地よいぞ。

そんなわけで、舞台から降りて帰ろうとする稲沢をとめる。

「まてい、いなざわーる！我と赤外線通信をしてみないか？」

「あの、鈴木さんも良かったら、あたしとしてもらえない？」

ちよつとびっくり顔の2人。

でもすぐ笑顔に変わってー

「もちろんだよ、宮村くん。いや、これからは有馬って呼んでも良
いかな。」

「あたしも、優子って呼んでも良い？あたしのことは麻耶って呼ん
で欲しいな。」

こうして、友達が増えました。

まあ、中学校時代からの知り合いだったしな！。

今度Wデートしようと思心に決めた。

22話目。愛の力は強いのだよ！というわけで新キャラ登場？（後書き）

バトリたかっただけです。

というわけでヴァルヴァルー、桜餅です

あと、新キャラ登場もなんとなくです。

でも、Wデートはマジでやるけど？

ネタバレになるので詳しくは言いませんけどー

んじゃ、ばいちゃにー

23話目。準決勝。VS常夏コンビ

「いらっしゃいませお客様。どうぞこちらの席でお待ちしてください。」

あのあと、稲沢（何度も訂正されたが俺にとっては稲沢だ！）・鈴木カップルと別れ、優子と話をしていたのも束の間、明久と雄二たちの勝利後、何やらあいつらは宣伝をしてたらしく喫茶店が大盛況。優子の方も、なにやら霧島・佐藤ペア（佐藤さんってあれだぞ？Aクラス戦で明久に勝ったやつ）が宣伝してたらしく、そっちも忙しくなり、しょうがなく自分のクラスに戻った。もうかれこれ1時間近く休んでない気がする。ん？1時間？

「あ、俺、召喚大会あるから。ばいちゃに〜。」

「てめえ宮村、逃げやがったな？」

須川が何か言っているが気にしない。

だってしょうがないもんねー？

ちなみに、明久と雄二は先に準決勝やってます。

霧島と佐藤にどうやって勝つことやら…私は知りませんよ？ええ、本当に。

ムツツリーニが代わるとかどうとか、知りませんからね？

「あ、有馬。ちょうどよかったわ。行きましょう？」

「おー、優子。お前も逃げ…もとい、抜け出してきたのか？」

「それ、言い直した意味ないわよ！？というか、有馬と一緒にしないでよ。アタシはこれでも優等生で通ってるんだからね？」

「猫かぶっちゃってー。家では下着かジャージ姿でBL本を読むの

がもつぱらの日課のくせに。」

「…有馬は、猫被つたり、ズボラでちよつと腐女子なアタシ、嫌い？」

ぐぼほつ！奇襲です！奇襲を受けました！

上目づかい＋涙目＋頬紅潮＋優子「インフィニティ！」

言ってることはちよつとあれだけど、可愛さは正義！可愛いは世界を救う！

お前たち、こんな話を聞いたことはないか？

2005年に起きた中国の反日暴動の際に2ちゃんねらーが沙綾という当時11歳でありながらも体のメリハリが大きく『11歳のFカップ』と呼ばれた少女の画像に『反日のおいたをしないでください』というコメントをつけて反日サイトの掲示板にはつけたことにより反日活動が激減し、日に日に画像を増やすとどんどん減っていったというじゃないか！

本当にこれが原因かはわからない。だが、確実に関係しているのは事実なのだ！

つまり、可愛いは世界を救えるんだよ！

ということは、優子は正義！世界を救えるんだ！

「ちよつと、有馬？有馬つてば！」

「いい。むしろいい。というか優子と結婚したい。」

「へ？あ、え、ええええええー！？！？！？！？！？」

「あ、すまん、優子。少し考え事に夢中になった。何の話だっけ？」

「…へ？えつと、覚えてないの？」

「あ、えつと、何が？」

「うん、わかったから、ちよーつとこっちに来てくれるかしら？」

…なんか優子がすごくいい笑顔です。あれー、俺何やったかなー？

「あのー、できれば避けたいなーって。」

「…有馬は、あたしの近くに來たくないの？」

また上目づかい＋涙m（以下略）じゃないか…

これは罠、罠だ。そう分かってる。

でも

「そんなわけないじゃないか！むしろずっと傍にいたいね！」

割とマジで。

そういつて近づくと予想外に

「有馬…うん、そうだよ。じゃあ、召喚大会にいこっか。」

サブミッションをかまされませんでした。

うん、ラッキー？

別にこれを狙ってやったわけじゃないんだけどね。

とりあえず、優子と一緒に会場へ向かうことした。

『それでは、これより、もうひとつの準決勝を始めたいと思います』

『ー！』

というわけで、準決勝ですっ！

ちなみに、雄二たちは霧島をだま

もとい、交渉し、勝利を収

めたそうだ。

それで、気になるお相手は？

「お前、Fクラスのやつかよ。何でこんなところに ああ、その

女がAクラスだから全部やってもらったってわけか。」

「そういつてやるな夏川。彼氏の面目が立たないだろ？」

下品に笑う二人。

そう、常夏コンビだ。

Fクラス内でみかん箱だと大声でばらしたり、Aクラスの喫茶店でなんなりと営業妨害してきたやつのことな。

ちなみに、ただいまルール説明中です！

「いえいえ、そんなことはないですよ？自分だって実力はありますから。」

「はっ！Fクラス風情がよくいうぜ！」

むっ、こいつ腹立つ。

あ、そだ、あれを使おう。

「先輩、そんな酷いこと、言わないで下さいよ。」

「な、その声は」

「さくらちゃん？」

「はい、宮村さくらです。でも、その本名は」

とここで声を戻して

「宮村有馬だよろしく頼むよ、先輩方。」

秘儀、裏声！！！！

秀吉に教わった方法である。

宮村有馬はこのほかに47の秘密技を使えるのだ！

「くそっ！さくらちゃんの正体がこんな奴だったなんて！」

「ぜってえ、ぶっ殺す！！！」

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、お願いします！』
「……試獣^{サモン}召喚」「……」

掛け声とともに、召喚獣が現れる。
相手は普通の武器だな、うん。

「宮村てめえ、死にやがれ！」
「うん、それ無理」

二人して俺を狙ってきたが簡単に避ける。
怒りに任せた攻撃なんて、楽勝に見切れるっての！

「てえーい、やつ、ほつ、カウンターパーンチ！」

俺一人で簡単にあしらえる。

本当に3年生でAクラスなのか、こいつらって感じ？
お、ディスプレイに点数が映し出される。

『Aクラス 常村勇作&Aクラス 夏川俊平
保健体育 225点 & 217点』

うむ、確かにAクラス並だな。
でもー

『Fクラス 宮村有馬&Aクラス 木下優子
保健体育 344点 & 287点』

「な、お前本当にFクラスかよ!？」

「Aでもトップクラスだろ、この点数は!？」

マジで、俺ら以下だしー。

てか、ちようザコって感じだしー。

これなら稲沢・鈴木カップルの方が強かったね。

「俺たちFクラスをバカにしたこと、手を出したことを悔い改めろ。」

「

どごーんと一撃ずつくらわしてやった。

『勝者！宮村・木下ペア！なんと、Fクラスの宮村くんが1人でAクラスの二人を倒してしまいました！これは、Fクラスが最下級クラスであるという考えを改めた方がいいのではないか！？』

や、俺って本当はAクラスの予定だったから、当然なんだけど…
ともかく

「じゃあな、先輩方。これに懲りて俺たちには手を出すなよ。」

そういつて教室に戻る。

でもまさか、そこで事件が起こってたなんて思いもよらなかった。

23話目。準決勝。VS常夏コンビ（後書き）

つーわけでヴァルヴァルー、桜餅です
常夏コンビ、倒しちゃいました。

どうしようね、これから先。

明久たちと純粹な勝負になるかな？

あ、とりあえず、今回は例の事件でっす

24話目。ウェイトレス誘拐事件発生。(前書き)

以下の文章の()に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法を呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと()である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

宮村有馬の答え

『バーバドリンク?』

教師のコメント

ハーバとバーハ。確かに似てますけど、違います。
それは、DQMJにしかありません。

24話目。ウェイトレス誘拐事件発生。

「よう明久、雄二。常夏コンビにすっかり勝つてき　　どうしたんだ？そんなに急いで。」

俺は召喚大会の準決勝を超楽勝に終えて教室に帰ろうと思っていたところに明久と雄二がいたので話しかけてみたのだが、何か様子がおかしい。

特に明久はまるで大切な何かをなくした、もしくは奪われたかのような顔してる。

「あ、有馬！実は姫路さんたちがさらわれたんだ！！」

「…は？姫路たちってうちのウェイトレスみんなか？」

「そうだよ！姫路さんと美波、秀吉と葉月ちゃんがさらわれたんだ！」

さらわれた？営業妨害が目的か？だからと言ってここまでやるか、普通。

…なるほどやはり、学園長^{ババア}め、何か隠し事してやがったな。

だが、学園長が妨害をするわけないとすると…教頭^{メガネ}か？

となると常夏コンビやさっきのチンピラも教頭の差し金？

まだ良くわからんが、とりあえず先に

「お姫様を救いに行くとするぞ、王子様よ。」

「…有馬も、雄二と同じようなこというんだね。」

か、被った！？

ちよつとシヨック…

『さて、どうする？坂本と宮村と…吉井だったか？そいつらを人質を盾にして呼び出すか？』

『さて、吉井ってのは知らないが坂本には下手に手を出すとまずい。中学時代は、かなり鳴らしてたらしいからな。』

『宮村も結構やばいぞ！あいつ確か、自分から喧嘩はしないが正当防衛ってことでは戦い、その相手にトラウマを負わせるとか…』

『そんなやばい奴らが相手なのか！？出来れば事を構えたくないんだが…』

『そういうわけにもいかないだろ。そういう依頼なんだから。』

明久曰く「ムツツリーニが持ってた」とされる盗聴器で誘拐犯とでもいうべきチンピラの言葉が聞こえてくる。

あ、ちなみに、近くのカラオケボックスです。（これまたムツツリーニの案内）

（やっぱり依頼されてたぞ、雄二。）

（ああ、となると黒幕は学園の関係者か？）

（え？どういうこと？）

（説明は後だ。今はこっちに集中しろ）

（う、うん、わかった！）

『お、お姉ちゃん…』

『あなたたち！いい加減葉月を離しなさいよ！』

『お姉ちゃん、だってさ！かわい〜』

『ギャはははは！』

…クズどもめ、地獄を見せてやりたい。

ムツツリーニの準備が終わるまでは待たないとな…

『……灰皿をお取り換えます。』

『おう。で、このオネーチャン達どうする？ヤっちゃっていいの？』
『だったら俺はこの巨乳ちゃんがいいな！』
『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して私たちを返してください！』
『それはオネーチャン達のガンバリ次第だよな？』
『やっ！触らないで』
『ちよつと！やめなさいよ！』
『うるせえ女だな！』
『きゃあっ！』

ドン、なんて音とともに島田の音がする。

そのあとにはガシャーーンなんてまるでテーブルごと吹き飛ばしたような音。

ふむ、一度地獄に落ちた方がいいな、こいつら。

（おい、明久、有馬！）

雄二が制止してるが、もう十分だろ、うん。

俺ってさ、女の子 特に、恋する乙女とか、そういう人が傷つくの、嫌いなんだ。

吐き気がして、おぞましくて、気持ち悪い。

それだけど、ちゃんと我慢したよな？

「「おじやましませーす！」「」

俺と明久は一緒に目的の部屋に入る。

「吉井くんと、宮村くん？」

「アキ…、宮村…」

ふむ、予想通りの光景。

身を縮めている姫路とテーブルとともに倒れている島田。

「ハア？お前誰よ？」

入口付近のクズAが声をかけてくる。

ちなみにクズはA～Gまで現れております。

「死にくされやあー！」

明久がクズAの股間を思い切り切り上げている。

お、失神してやがるぜ、こいつ。

「てめえヤスオに何しやがる！」

「おおっと、させないぜ？」

明久を殴ろうとしたクズBを殴る。

ついでに、顔面にもハイキック。

「コイツ、吉井と宮村つてやつだ！」

「何でここが！？」

「とにかくぶちのめせ！」

クズCDEFGが現れた。

まあ、こんなザコごとき、何人いても変わらないけどね。

「お前ら全員、ぶっ飛ばす！」

というわけで、クズどもとの戦闘シーン突入。

二人で背中を守りあい、相手をつぶす。

「はあ、やれやれ…もうすこし我慢ってものをしろって
のっ
！」
「げふっ！」

うむ、さすが親友。ちゃんと来てくれるね。
んじゃ、3人でぶちのめそっか。

「お前ら、先に言っておくぞ？俺相手に人質なんてとれるとは思
な！」
「ごはっ！」

葉月ちゃんを人質としようとした男の喉をけり飛ばす。
あー、下手したら死ぬかもしれないけど、大丈夫だろ、多分。

「姫路、島田！先に学校へもどっている！」
「雄二！貴様まで僕の邪魔をするのか！」

うむ、よくわからんが、とりあえず、姫路たちは解放された模様。
ならば

「さて、優しい優しい質問だ。土下座して普通にやられるのと悪あ
がきをして盛大に苦しむのと、どっちがいい？」
「ク、クソがああー！！！」
「そっか…残念だ。」

ここで諦めてくれたら、余計な傷は増えないし、トラウマにもなら
なかつただろうに。
だからまあ、これに懲りたら真っ当な人間になってほしいかな。

「残念だけど…死にくされ！」

「ぐはあ！」

「まだ駄目。死ねないことを悲しみ、俺たちに手を出したことを後悔しろ。」

「ごぶう！」

「うん、じゃあ最後。生きてたら、真つ当な人間なつてな？」

「や、やめ、うわああー！ー！」

クズDは盛大な悲鳴を上げて気絶した。

女の子を傷つけようとするからこうなるということを知ってほしいな。

「じゃあ、クズの掃除も終わったことだし、帰ろっか。」

「うん、そうだね。行こう、雄二、秀吉。」

「ああ、そうだな。」

というわけで、誘拐事件は解決しました。

ちなみに、クズA～Dはこれにこりて真つ当な人間になりましたが、E～Gは残念なことにチンピラやっています。

24話目。ウェイトレス誘拐事件発生。(後書き)

あ、ども、ヴァルヴァルー、桜餅です

お久しぶりですか？

まあ、ちよつと遅れてたかもですね

しょうがないのです、学校があるのだから

というわけで、次回もいつになるかはわかりませんが、お楽しみに

25話目。真相と黒幕。

ウェイトレス誘拐事件が解決し、今俺たちは中華喫茶1日目の終わったFクラスにいる。

ちなみに、俺たち、つてのは俺と明久と雄二のことだな。

「2人とも、もうそろそろ来る時間だぞ。」

雄二がそんなことを言う。

「へ？来るって誰が？」

「どうせ、学園長ババアだろ？この一連の騒ぎの原因を聞く為に。」

「…へ？つてことは、あのババアが諸悪の根源ってこと！？」

「いや、そこまではわからんが、何か隠してることに間違いはないはずだ。そうだろ？クソババア。」

そういつて俺は入り口の方にいる学園長に声をかける。

「つたく、わざわざ盗み聞きしなくても良いだろうに。」

「……やれやれ、わざわざ来てやったのにずいぶんな挨拶だねえ、がきどもが。」

「来たかババア。」

「おせーよ、このクソババア。」

「出たな！諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかあたしが黒幕扱いされてないかい？」

さつき説明したのに、明久はババアが黒幕だと思ってるのか？
こいつ、やっぱりバカだ。

「黒幕ではないだろうが、必要のある説明をしていないだろう？」

「有馬の言うとおりだ。それは十分な裏切り行為といえるんじゃないか？」

「ふむ…賢しいとは思っていたが、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ。」

「最初に取り引した時からおかしかっただろうが。本当に優勝したいなら明久と雄二じゃなく、もっと高得点のやつに頼むべきだろ？それに、俺が出るって言った時、アンタは困ったような顔してたしな。」

少し考えればわかることだが、まあ、明久が気づいてなかったのは言うまでもない。

「それに、あのとき、俺は科目を決めさせる、と提案しただろ？めばしい参加者全員にいつてるなら、俺たちだけが有利になるような提案は飲まないはずだ。」

「なるほどね…アタシを試してたわけかい。」

さっすが雄二。かつては神童と呼ばれただけはあるな。

まあ、俺もこいつらだけに頼んだという結果だけはあるときにわかってたけど。

「それに、学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たりとか色々あったしな。」

「ああ、そして、決定的なのは俺たちの邪魔をした連中が姫路たちを連れだしたことだ。ただの嫌がらせならここまでではしない。」

「以上が俺と雄二の推理です。どうだ、ババア。」

1人明久だけついてこれてはいないが、気にしない。

というか、本当に誘拐事件は下手したら警察沙汰だったしな。

恋する乙女を誘拐して、暴力振るうとか、男　いや、人間のすることじゃない。

本当に、何もなくてよかった。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなくなってたかい…すまなかつたね。」

な、あのババアが俺たちに頭を下げただと？意外と責任感のあるババアだったのか？

「あ、まあ、それはいいから、そっちの種明かし、してもらっていいか？」

「はあ…アタシの無能を明かすような話だから出来れば伏せておきたかったんだけどね…」

だから、公言しないように、と前置きを加えてからババアは話し始める。

「アタシの本当の目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ。」

「ペアチケットじゃない！？どういうことですか!？」

「『白銀の腕輪』…だろ？」

「…アンタ、そこまでわかってたのかい？」

ババアが驚いたようにいう。

まあ、普通はわかるような気もしなくはないけど。

「いやな、ペアチケットが目的じゃないってのはわかってたんだよ。それだつたらさっき言った通り高得点者に頼めばいいからな。だが、そうすることができない理由が当たったんだろ？だったら、大方『白

銀の腕輪』を優勝賞品にするとはいったものの、実は未完成で高得点者が使うと何らかの問題が起きるんじゃないかなと思ってな。」

「…アンタ、ホントに何者だい？」

「いやなに、そこまで考えついたのはついさっきだ。ただ、ペアチケットが目的だった場合の高得点者にやらせることが出来ない理由が思いつかなくて、『白銀の腕輪』の方を考えてただけだよ。」

「はあ……そのとおりさね。『白銀の腕輪』には欠陥があったのさ。一定水準の入出力を超えると暴走しちまうさね。」

ふむ、俺の読み通り。

どうでもいいけど明久は混乱している。

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ。」

雄二も苦笑い。

まあ、褒められてんだか貶されてんだか微妙なラインだしな。

「えーつと、つまり……？」

「お前らみたいなのは『優勝の可能性がある低得点者』ってのが1番都合よかつたんだよ。ちなみに、褒められてるわけじゃないから勘違いはするなよ。」

「え！？違うの！？このクソババア！」

え、何？マジで褒められてると思ってたの？

うむ、やっぱこいつは2年を代表するバカだな。

「二つあるうちの召喚フィールド作成用のほうはある程度まで耐えられるんだけどね…。もう片方の同時召喚用は平均点程度で暴走しちまうから、吉井用にと。」

「有馬、これは褒められてると思っていいんだよね？」

「…ああ、そつだ！どうあがいても平均点は取れないようなバカだと褒められている！」

「それって絶対貶してるよね！？」

…や、普通はわかるだろ？

わかる…よな？

「それと、もし宮村たちが優勝した用に別の腕輪 『黒金の腕輪』を急ピッチで開発したんだが…全くこれがどうしてか予想以上に上手くいつちまってねえ。学年主席並の成績でも暴走しないやつが出来ちまったのさ。そのくせ、白金の腕輪は全然ダメでね…。」

…ん？どういうことだ？そんなことあるわけ無いだろ？

黒金の腕輪がどんなもんかは知らんが白金の腕輪とそんな変わらないはずだろ？

なのに、そんなに差が出るとは思えない。

もつとも、素人考えだからなんともいえないが、それでも、普通ならありえないとは思うんだが…

「なあババア。それを作ってるって誰かに言ったか？もしくは、自分に見の覚えのない設計がされてたりとかそういうのは？」

「誰にもいつちやいないよ。言ったらアタシの失脚を狙ってるやつらが喜んでやってくるからね。…ただ、見覚えのない設計というのは、徹夜続きだったから寝ぼけてやったのかもしれないけど、ちょっと記憶にない設計はされていたかもしれないさね。はっきりとはわかってないが」

学園長の話聞きつつ考える。

徹夜続きで寝ぼけてやった　　というのは多分ないだろう。勘だけだ。

勘だけどなんとなく、心当たりがある。

何のためにやるかもわからないが、ババアに気づかれずに学園に進入しつつ、黒金の腕輪を完成させることが出来る人を、一人だけ、心当たりがある。

俺と同じで理系科目が得意で、色々な開発をしまくり、アメリカでなんか凄い賞をもらったとかって言う人が、俺の、姉貴が。

「いつの間に帰ってきたんだよ…」

いつのまにか勝手にアメリカに行って、たまに手紙を寄越すだけだったのに。

なんで今更…？

「それじゃ、僕らの邪魔してきた常夏コンビとか例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。協力してる理由はわからんが。」

…ヤベ、考え事に集中して聞いてなかった。

とりあえず、頭を切り替えよう。うん、切り替えは大事だ。

「あのさ、コレって　かなりマズい話じゃない？」

「いや、そんなことはないさ。決勝では俺たちとお前たちが戦うんだ。一応、最初の学生用のチラシには『優勝賞品：白金の腕輪&如月ハイランドプレミアムチケット』と書いてあるが、いつの間にやら『試召戦争用の腕輪』とわざわざ書き直してある。つまり、どっちが優勝しようと俺たちは黒金の腕輪、お前たちは白金の腕輪を手に入れることができるんだよ。」

「そうなの？じゃあ、大丈夫なんだね。」

「これだけだったら　な。他に何かされた場合はわからんが、

召喚大会ではもう心配は要らない。というわけで、明日はマジにガチで叩きのめすぜ?」

稲沢もなー、頑張ってたのに潰しちまったら、その分も頑張らないといけないだよ。

それに、ババアの粹な計らいで全力で戦って勝っても良くなったんだし、ねー?

良かった良かった。

「つーわけでババア、大丈夫なんだろう?俺らが勝っても。というか、最初にこいつらと当たった場合は負けるって言ったはずなんだが。」

「吉井たちが負けたことも考えてさね。」

ふむ?それで黒金の腕輪を苦し紛れの策としてつくったら、意外に成功しちまったというわけか。

姉貴が絡んでるのかもしれないけど。

あー、姉貴、かー…。

「よし、有馬!明日の決勝は僕たちも本気で戦う!」

なんて、明久が言ってくれちゃいます。

そーだな、姉貴のことはとりあえず忘れよう、マジで記憶の片隅へ

ー!ー!

「いいだろう!受けてたつ!俺と優子のコンビネーションをなめるなよ?」

明日は清涼祭の最終日で、召喚大会の決勝戦。

マジにガチで頑張らねばなー。

25話目。真相と黒幕。（後書き）

というわけでヴァルヴァル、桜餅です。

久しぶりー、ですか？

まあ、とりあえず、なんとなく無理やりな展開へー。

だって、なんとなく腕輪が欲しかったんだもん？

他にも理由はありますが。

うん、まあ、次回は決勝戦です。

26話目。決勝戦。有馬&優子VS明久&雄二（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年のことである』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

宮村有馬の答え

『603』

教師のコメント

宮村君もですか？一体皆さんに何があったのでしょうか？

26話目。決勝戦。有馬&優子VS明久&雄二

「いよう、雄二。昨日ぶりだな。喫茶店の方は全然手伝えなかったんだが大丈夫だったか？」

「問題ない。俺らも似たようなもんだしな。一応秀吉と康太にスタンガンは持たせているが。」

はい、というわけで召喚大会決勝戦です。

会場にはたくさんの方がおります。さすが決勝戦って感じ。

『さて〜皆様。長らくお待たせいたしました。これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を〜始めます！』

聞こえてくるアナウンスの声に聞きおぼえが あった！

某借金執事のやつの上レーションとかの人だった。

もしくは七つのボールを集めると願いが叶うとかいうアニメの色々なやつ細胞からできた人造人間(？)の声。

すげー！マジか！

『出場選手の〜入・場・です！』

「じゃ、入場してください。」

係の先生に言われて入場する。

『まずは〜2年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じく2年Fクラス所属・吉井明久くんです！』

そう言われて明久と雄二が一礼するが、おおー、すごい盛大な拍手だ！

ヤベ、ちよつち緊張してきた。

「なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に挑んだのは最下級クラスであるFクラス！これはFクラスが最下級であるという認識を改めるべきか〜！？」

んー、これは「最低クラスの間も試召戦争とかのシステムのおかげで成績上がってるぜ〜」というPR？
まあ、こちらにとっては嬉しいが。

「そして対する選手は2年Aクラス所属・木下優子さんと またまた出てしまいました〜。2年Fクラス所属・宮村有馬くんです
『！』」

俺たちも一礼する。

というか、あとでサインもraitたいな、この司会の人に。

「この二人は2年生を代表するバカップル！バカップルで〜ございます！出場選手が少ないなかでも頑張っていた3年生を準決勝で圧倒的に倒し、勝ちあがって〜きました！さあ、この戦いはどうなるんだ〜？それではルールを〜説明いたします！試験召喚獣とは
『』」

ルール説明に入ったので適当に会話でもしてようかなー

「いや〜、すごい人だな、おい。ちよつち緊張。」

「ホントよね〜。まさかこんなに人が来るなんて…。もうちよつとおめかししてくれば良かったかしら…」

「何を言う優子！お前にそんなことは必要ないぜ？十分可愛いからな…。」

「有馬…」

見つめあう俺と優子。

あー、こうしていると周りなんて全然気にならねえ。

「お前ら、お約束はいいが周りは気にしろ。Fクラスのやつに見つかったら異端審問会のやつらにやられちまうぞ?」

「あ、もしもし、須川くん?ちょっと喫茶店が終わったらでいいからさ」

「待てい、明久!この観客がいる中で携帯を使うなんてマナー違反だぞ?」

「そこ突っ込むところか!?もう少し身の危険を感じる!」

や、だって、文月学園の評判が下がっちゃうし…

「安心してよ、有馬。ほら、『他人の不幸は蜜の味』ってよく言うでしょ?」

「ならばお前も道連れにしよう!お前が以前、姫路と島田の二人と言う両手に花状態でデートしてたとクラスにはらしてやる!」

「な、何で有馬が知ってるのさ!?ていうかあれはデートじゃなくて、映画の代金を無理やり奢らされたっていうか」

「へえー、ホントに行ってたんだな。適当に言ったただけだったんだが。」

そんなもん俺が知ってるわけないだろボケ。

まあ、やろうと思えば盗聴やらなんやらして知ることにはできるけどさ。

『それでは試合に入りましょう!選手の皆さん、お願いします』

説明が終わったようで先生が召喚フィールドを出す。
ほんじゃ、行きますか！

「……試^{サモン}獣召喚」「」「」

掛け声とともに現れる俺たちの分身。

明久の召喚獣は学ランに木刀という不良みたいで、雄二のが

「えっと、雄二の召喚獣は武器がないのか？」

「よく見る、メリケンサックをちゃんと装備してるだろ？」

あ、ホントだ…

木刀にメリケンサックか…

二人とも改造制服だし、不良なチンピラコンビ？

「じゃ、行きますか？」

「ああ、そうだな。」

「じゃあ、吉井くんはアタシと勝負しましょう？」

「OK！じゃあ、雄二は有馬とでいいよね？」

「無論だな。」

『 Aクラス	木下優子	&	Fクラス	宮村有馬	』
日本史	223点	&	240点		』
『 Fクラス	坂本雄二	&	Fクラス	吉井明久	』
日本史	215点	&	166点		』

お互いの点数がディスプレイに表示される。

「驚いた。お前ら、こんな点数取れたんだな。」

「姫路さんがいったたでしょ？『好きな人のためなら頑張れる』って」

「なるほどな…。」

雄二はともかく、明久がこれだけ取れていたとは思わなかった。ううむ、恋は人を強くするってホントだったんだな。ともかく、召喚獣が武器を構えて、戦闘開始だ。

「それじゃ、行くぞ雄二！」

「上等だ！かかってこい！」

俺と雄二の召喚獣がたがいに攻撃を仕掛ける、が…

「何だよお前の召喚獣、身軽過ぎじゃねえの？」

「お前もな。攻撃が当たらないじゃねえか。」

お互いの召喚獣が身軽すぎるため、まともな攻撃があまり当たらない。

俺の武器は短剣だし、雄二のはメリケンサック。身軽だっということこの上なし？

「はあ、これじゃ、埒があかねえっての…。」

「ああ、全く、だな…。」

お互いに息切れする。

召喚獣をこんなに動かすとマジで疲れるんですよ？

「もうかわすのナシで、一発できめない？疲れたし」「いいだろう！やってやる！」

お互いの召喚獣は距離をとる。
そして

「行くぞ雄二！おらあ！」

「来いよ有馬！地にふれさしてやらあ！」

小細工なしの殴り合い。

俺は武器を捨てたんだけど、よく考えたらあつちにはメリケンサック！
俺、超不利じゃん…

「しょうがねえ！行くぞ！ARIMA MAXIMUM DRIVE
E！」

「おい待て！その声はどこから出てるんだ！そして何をやる気だ！
？」

俺の召喚獣の右腕にパワーが集まる。

「ライダー…パンチ！」

「ちよつ、待て！それは不味いだろ！」

無視して思いつきり殴る。

ちなみに、一応説明しておく、ガイアメモリを使ってるわけじゃないので「MAXIMUM DRIVE」なんて使えません。

使えませんが、この召喚獣、何故かは知らないけど腕や足に力をためて攻撃できるのです。

まあ、普通に思いつきり殴るのと変わらないような気はするけど、
なんとなく、そんな感じがするだけ。

「よし、雄二！俺の勝ちだ！」

「くっ…だがお前、もう1人忘れてないか？」

「は？優子が負けるわけな」
「ごめん、有馬…負けちゃった…」

うっそーん！優子が負けた？明久に？
いやいやいや、えー、マジでー？

「有馬、今度は僕たちの番だよ！」

「くっそー、てめえ！よくも優子をやりやがったな！」

「え、や、だつてそういう勝負だし」

「知るか！喜べ明久、絶滅タイムだ！」

そう言つて俺（の召喚獣）は短剣を手にし、明久（の召喚獣）に攻撃を仕掛ける。

というか、このテンションちよつと疲れてきた…

「よし、やっぱなしだ明久。もっとこう、シリアスな雰囲気を出そう！」

「それを壊したのは有馬だよね！？」

明久に突っ込まれた…

や、まあ、確かに正論ですけど。

「じゃあもういい！このままギャグで乗り切る！シリアスな雰囲気なんていらない！俺は俺としてお前をギャグ補正で倒してやる！」
「え、ちよつと有馬！？ああ、もういいや！僕も適当に君を倒すことにするよ！」

意外とこのノリはいけるのかもしれないな。
シリアス？何それ、食えんの？

「お前、あれだぞ？観察処分者だからーとか、そんなので手加減しないぞ？」

「そんなものしてもらわない方がいいよ！今回は真剣勝負なんだから！」

「あ、マジで？じゃあ、本気でいっちゃおう！ウエイクアップ・2！キングスバーストエンド！」

「え、ちよっ、それはないでしょ！？やっぱ手加減して！」

とか言いつつ、ちゃっかりかわしてる明久。

くそ、渾身の一撃が…

「今度はこっちの番だよ！」

「知らねえ！ずっと俺のターンだ！ドロー！モンスターカード！」

「ええ！？ずるいよ、有馬！」

とか言つて、攻撃してる俺にさりげなくカウンターを入れてくる明久。

というか、雄二との勝負で大分削られてるし、やばいな…

「しょうがない。行くぞ！トランザム・ライザー！」

説明しよう！トランザム・ライザーとは、ダブルオーライザーがトランザムを使い（以下略）

しかし、ここではただの蹴りだ！

「まだまだー！卍・解！天鎖斬月！」
てんさざんげつ

説明しよう！卍解とは死神の力を（以下略）
しかし、ここではただの（ry

「元氣玉ー！ー！」

説明しよう！元氣玉とは地球や人の元気を（以下略）
しかし、ここでは（ry

「ああー、疲れた…てかお前、どんだけかわすんだよ…！」

ちなみに、ここまでやってまともに入ったのは一発もない。
そのくせ、こっちはカウンターを結構食らってる。

「じゃあ、疲れたからそろそろ終わりにしよう！疲れたから！」

「有馬、最近性格変わった！？前はもつとまともな人だったと思う
んだけど！」

「知るか！Fクラスにいたら嫌でもこうなるわ！」

多分、関係ないかも…いや、どうだろうなー

まあ、とりあえず、俺は俺だろ？

「とりあえずー、ぶつ倒す！」

「負けないよ！僕が優勝するんだ！」

こっちが攻撃してカウンターとられるなら、逆に攻撃させてやって
やればいいと思わない？

だからさ、攻撃はさっきみたいにふざけた大ぶりじゃなく、小さく
攻撃して、相手が大きくなったところだとどめをさす。
これでいいと思うんだよね。

「というわけで、真面目に倒す！喜びたまえ！」

「普通は、喜べないと思うよー！」

とか会話しながら戦う。

タイミングを見計らって、ここで転んだ振りをする。

…よし、きたっ！大ぶりの攻撃！止めを刺しに来る攻撃！

「くそっ！ここまでか…」

「これで僕の勝ちだよ、有馬！」

「なんつって！畏に決まっただらうが！」

「えっ!?!」

大きく木刀を振りかぶった明久の召喚獣にカウンターを入れる。

そして、木刀を持つてる腕を斬り落とし、そのまま短剣を喉に突きつける！

『宮村・木下ペアの勝利だあー！』

俺たちの勝利が宣言された！

「いやーはっは！俺たちの勝ちだけ、明久。愛の力は強いだろ？」

「くっそー…僕たちだっただって頑張ったのに…」

「まあな、確かにお前らは強かったよ。負けるかと思った。」

「そうね。まさかアタシが吉井君に負けるなんて…」

「気にするな、優子！最終的に俺らは勝っただろ？」

「…そうね、有馬。」

というわけで閉会式。

優勝した俺らと準優勝した明久と雄二で並んでる。

ちなみに、前には学園長パパテがいて、賞品をくれるみたいだ。

『それでは、準優勝、坂本・吉井ペア！』

「はい！」

よばれて明久と雄二が前に出る。

『2年F組・坂本雄二、同じく2年F組・吉井明久ペア。今大会で

』

ババアが賞状を読み上げて、賞品とともにを渡す。

賞品は『白金の腕輪』と

「な、なんで、如月ハイランドのペアチケットが!？」

というわけで、如月ハイランドのペアチケットを手に入れていた。

一組だけだったってことは、多分、元々二組だったのをばらしたんだらう。

まあ、雄二ドンマイ。

『続いて、優勝、宮村・木下ペア!』

「「はい!」」

『2年F組・宮村有馬、および2年A組、木下優子。今大会で

』

同じようなことをババアが言う。

んで、同じように賞状と賞品をくれた。

賞品は、『黒金の腕輪』と『如月ハイランドのペアチケット一組』

ちなみに、ババアが小声で「よくやってくれたね」とか言ったのは別の話。

というわけで、召喚大会は終わったぜ!

これで心おきなく学校祭を楽し

「3人とも、早く来てほしいのじゃ！お主らのおかげで喫茶店が大繁盛してて」

む余裕もないことはよくわかった。

いやー、人気者は辛いね。

とりあえず、頑張ろー。

26話目。決勝戦。有馬&優子VS明久&雄二（後書き）

はい、というわけでヴァルヴァルー、桜餅です
ちよっと長かったような気もする

あと、半分以上ふざけてたような気もする

次回、後夜祭なのですが、有馬と優子の腕輪は活躍しないのでこっご期待を？

27話目。後始末と後夜祭。

『ただいまの時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください。』

「お、終わった…」

「はあー、マジで疲れたよ。」

「そうじゃな、さすがに疲れたわい。」

放送を聴いた瞬間に体の力が抜けていくのが感じる。

いくら宣伝しまくったからって、来過ぎだろ…。

まあ、そのおかげもあって、お金は68万円もゲット！

これで設備も向上するし、あと教室の改善も約束されてるしな。

ていうかすごいね？68万って。

姫路の転校はなくなるだろう…？

「「そういえば、姫路さんの父親（お父さん）はどうしたんだ（ろう）

？」

くそ、明久と被った…

「後夜祭のあとで話をしにいくとっておったからのう。結論はそのあとじゃ。」

大丈夫、だよな？

俺たち、そのために結構頑張ってたんだが…

「おいお前ら。学園長のところへ行くぞ。」

雄二は疲れてないのか普通にそんなことをいう。

体力には自信があつたのに、こいつには負けたか…

「あー、俺パス。そつちだけで何とかしといて。」

「なんだ？何か用事でもあるのか？」

「今から優子と逢い引きなんだよ。」

「ふっ、そうか。わかった、じゃあ俺たちだけでいくとしよう。」

「ならばその間にワシも着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「あー、まあ、そういうことだから、じゃな？」

長引きそうだったので早々に退散。

結局秀吉はチャイナ服のまま、ついでにムツツリーニも一緒に行ったそうだ。

「ワリい優子。待ったか？」

「う、ううん？今来たところよ？」

待ち合わせ場所で定番の会話。

なんか、やっちゃうよね、こついつの。

「稲沢と鈴木はどうした？」

「あ、あの2人はあそこで、ほら。」

指差された方向を見ると

『はい、みーくん、あーん。』

『あーん。うん、美味しいね。』

2人でバカップルってた。

負けてられねー。

「ほい、優子、あーん。」

「へ、や、え！？ちよ、ちよっと有馬？」

「あーん。」

「いや、だから有馬、恥ずかしい。」

「あーん。」

「あ、あーん…。」

よし、あーん成功！これで1勝1敗だ！

まあ、というわけであの2人と合流しよう。

「いよーう！いなざわーる。元気してたか？一応実際には昨日ぶりだが、超久しぶりって感じだぞ？」

「あ、有馬くん？えっと、優勝おめでとう！」

「うむ、ありがとう。お前らが頑張ってたからついついこっちも頑張ったぜ。」

ちなみにあっちでは

『麻耶ちゃん、こんにちわ。んゝ、時間的にはこんばんわ、かな？』

『優子ちゃん！こんばんわ。優勝おめでとう。』

『ありがとう。そっちのクラスは大変だった？』

『あー…うん、まあ、精神的にーかな。代表さんがあれ以来女装に目覚めちゃって…』

『そういえば、あの姿でうちのクラスにも来てたわね。というか、あれの喫茶店って大丈夫なの？』

『うーん、なんか、変な人は来てたかなー、いっぱい。』

というガールズトーク(?)をした。

ていうか、根本の女装喫茶ってただww

よくクラスはOKしたな。
とか盗み聞きしてたら俺の携帯がなり始めた。

「あ、ワリ、電話だ。少々お待ちを…」
「うん、わかった。」

稲沢の許可を取って電話に出る。

「おう、雄二か？どしたー？」

『不味いことになった！学園長との会話が盗聴されて、録音されてたかもしれない！』

「は？えっと、つまり、『白金の腕輪』と教室の改修の交換条件のことを誰かに盗聴されて、更に録音してた可能性もあり、それを公開される可能性もあると、そういうことか？」

『その通りだ！どっかのバカと違って話が早くて助かる！相手は常夏コンビ！放送室とか校舎の2階までにはいなかった！まだ見つからないから応援頼む！』

「クソ！マジかよ…俺たちの努力が水の泡になるじゃねえか！わかった、今から優子と一緒に探す！見つかったら連絡入れる！」

『ああ、頼んだ！』

電話が切れた。

かなり緊迫した状況だな、おい！

「悪い、稲沢。急用が出来た！また今度な！」

「待って！僕も行くよ。今の話を聞く限り、かなりやばいことですよ？」

あ、そっか、電話ということで油断してた…

じゃあ、事情もしちゃったみたいだし、協力してもらおうか

「優子、鈴木！緊急事態だ！事情はおつて話すからついてきてくれ！」

「へ、あ、うん、わかった。」

「別にいいけど、どうしたの？」

「あとで話すから！稲沢が。」

「僕が！？まあ、いいけどさ。とりあえず、ついて来て。」

というわけで、校舎へ走っていく。

間に合えよ！

「うーむ、闇雲に探しても見つからないな…少し考えてみようか。」

「そうね、ちよつと、疲れたわ。」

まあ、優子は女の子だから、少し体力も少ないほうだろう。

「今日中にやるんだつたら、放送するだろう。しかし、放送室にはいなかったみたいだ。」

「放送室以外で放送できるところ、ってこと？うーん、そうね…」

「放送…学校…清涼祭…。あ！屋上はどう？屋上だつたらきつと誰もいないから放送の機材だつて準備できるだろうし！」

「…ナイスだ稲沢！屋上に行くぞ！」

稲沢の推理で屋上へと駆け出す。

合っついてくれよ…

「ビンゴ！さすがだな、稲沢！」

「稲葉だけどね！」

屋上に着くと常夏コンビが放送の準備をした。

まだ少しだけ時間に余裕はあるみたいだが。

「優子、雄二に連絡しておいてくれ。常夏コンビは屋上にいたぞ、
つて。」

「わかったけど、有馬はどうするの?」

「悪役を倒す正義の味方ごっこ。」

そういつて俺は常夏コンビに近づく。

「いよう、先輩方。こんなところでゴソゴソと何やってるんだい?」

「なっ、宮村!てめえ、どうしてここに!」

「さてねー?とりあえず、あんたらの邪魔しに、つて所?」

とりあえず、挑発しておこつ。

多分、普通にやったら間に合わないから。

「で、どうしてあんたらは教頭メカネに協力するんだ?理由を聞かせてほ
しい。」

一瞬、驚いた様子。

「…そうかい、事情は理解してるみてえだな。」

「理解してなかったら、こんなところに来ませんよ。それぐらいも
わかりませんか、先輩。」

「進学だよ。上手くやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そ
うすりゃ、受験勉強ともおさらばだ」

「そう…ですか。常村先輩も同じ理由?」

「まあな。」

はあー…なんかもう、ねー?

そんなことのために俺たちには向かったこと、後悔させてやる！

「あ、もう、あんたらさー、生まれてきたことを後悔する方法を選ばせてやる！俺から物理的に教育されるのと、あんたらの嫌いなうちのクラスのバカ　ただし、最高のがつくがな。その2人にやられるのと、どっちがいい？」

「は？何いってやがる？俺たちはあとこのスイッチを押せば勝ちなんだぜ？お前はともかく、あいつらが何が出来　」

「常村！伏せる！」

「は？いきなりどうし

おおおっ！？」

ドオン！ぱらぱらぱら

「いやー、あいつらもようやるわなー…」

そう、明久と雄二の仕業だ。

多分だけど、白金の腕輪を使って明久の召喚獣を出し、打ち上げ花火に点火して投げたーとか、そんなところだろう。放送機材には当たってなかったみたいだが。

「あ、優子と稲沢、鈴木は逃げとけー。流れ弾でも当たったら危ないから。」

「え、ちよつと有馬！何があつたのよ！？」

「いいから逃げろー！危ないぞー！」

ドオン！

ほら、またきた。

お、でも今度はしっかり放送機材に当たったみたいだな。

ドオン！ドオン！

おおう、放送機材は全部破壊されましたな。
じゃあ、もう終

ドオン！

らなかった。何故か校舎に当たってる。

あ、でも、あそこは教頭室じゃないか？あー、うん、まあ、不幸中の幸いだろつ。

ババアが調査しやすくなるだろうし？

とりあえず、手を振っておこう。

『誰かたすけてえ〜！変態教師に犯されそうです！』

どこからかそんな声が聞こえる。

うーむ、とりあえず、明久が鉄人に見つかったと考えていいんだろ
うか？

「じゃあ、常夏コンビよ！お前らは、この俺が潰す！」

「ちよ、ちよっと待て！」

「そうだ！建設的に話し合おうじゃないか！」

なんていうのかな？命乞い？

「うん、それは無理 だって俺いましたよ？俺たちに手を出すな、
つて」

「いや、でもだな」

「もう一度いどうぞ？生まれてきたことを後悔させてやる！」

というわけで、この2人はマジにガチで葬り去ってやりました。
コレに懲りてくれることを俺は望んでるんだけどな。
出来ることなら俺は、人のことを好きであり続けたいからね。
とりあえず、我が校の危機は去ったのでした〜！ちゃんちゃん

27話目。後始末と後夜祭。（後書き）

あい、というわけでヴァルヴァル、桜餅です
いやー、うん、稲沢・鈴木カップルまた登場。

どうでもいいけど、鈴木ちゃんは結構気に入ってたりする…
今度、この二人の短編でも書こうかなー？

あ、次回で原作2巻が終わりです、多分

それでは最後に、頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【?】と【?】に当てはまる語を答えて下さい。

『マザー(母)から【?】を取ったら【?】(他人)です』

姫路瑞希の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【other】です』

教師のコメント

その通りです。Motherから『M』がなくなるとother(他人)という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー(母)から【M】を取ったら【S】(他人)です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー(母)から【お金】を取ったら【親子の縁は切られるの】(他人)です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

宮村有馬の答え

『マザー（母）から【Love&app·peaceの精神】をと
つたら【other】（他人）です』

教師のコメント

あなたとお母さんの間に何があっただんですか？

28話目。清涼祭の閉幕と歓喜。ちなみに原作だと2巻の終わり。

「喫茶店の成功と、この俺、宮村有馬の召喚大会優勝を祝して、カンパニー！」

『カンパニー！』

というわけで打ち上げパーティーじゃい！

明久と雄二はまだ来ないから、勝手に始めちゃったのだ！

「いやー、にしても雄二たち遅いな。」

「しょうがないじゃろ？あれだけのことをしたんじゃから。」

そりゃそうだ。学校を壊したんだからな。

つつても、教頭室だったから逆に感謝してもらってもいいだろうに、ババアに。

「お、噂をすればなんとやらってな。」

「む。やっと来たようじゃな。遅かったの。」

「……………先に始めておいた。」

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ。」

あ、ちなみに場所は近くの公園で、メンバーはFクラスの級友たち。ちなみに、あとから優子と霧島と工藤が来る予定ということは雄二には内緒の話だ。

「お主ら、もはや学園で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう。」

「……………（コクコク）」

「……………コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……」

いやいや、どっちもどっちだろ……

なんていうんだろ、ドングリの背比べ？五十歩百歩？

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならな
いんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？　ウチだって気になるし。」

実はそうなのだよ。

校舎を破壊したにもかかわらず退学はおるか停学にすらならなかつた。

まあ、事情を知ってる俺らからすれば当然の話だが。

「そういえば、店の売上ってどうなったの？」

明久が島田からもらったオレンジジュース(?)を飲みながら聞いてくる。

「ああ、大した額だよ。これなら全員にイスと机をやっても余るぐらいだ。」

ちなみにAMANOなら、セットで一万円くらいだぜ？

そういつて、収支ノートを見せた……のだが

「あー、いやスマン。校舎の修繕費を俺らからとると鉄人がいつていてな……。まあ、畳と卓袱台代ぐらいは残してくれるそうなんだが

……」

「ハア!?!」

ちよつと待てい！
俺たちの売り上げが持つてかれる？
校舎の修繕費で？

「皆のもの、奴らを討てい！」

『サーイエツサー！』

「ま、待て！話を聞け！」

「そんなもの知るか！俺たちの努力を無駄にして！ついでに女装って結構恥ずかしいんだぞ！」

あんな恥ずかしい思いをして、それで卓袱台だと！？
くそつたれー！

「アンタたちは何やってるのよ……」

「……雄二をいじめるのは許さない。いじめていいのは、私だけ。」
「あはは、面白そうだね。」

おおう？優子と霧島、工藤が現れた。
ついでに、野郎どもの動きも止まった。

「だって！雄二が！女装までしたのに！」

「いいじゃない、卓袱台でも。それに置いてなんか日本って感じがしていいじゃない？」

『…な、なるほど…』

畳にも、日本の風情がありますなー。
うむつむ、優子もいいこと言うなー。

「お前ら、それでいいのか？俺は全然かまわないが……」

雄二が何か言ってるが気にしない。
なぜなら、俺にとって優子がすべてだからさ。
優子が白と言えば黒でも白！それが宮村クオリティー！

「すみません。遅くなりました。」

姫路が現れた。

「というか、いなかったんだということに気付かなかったぜ…」

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！お父さんもわかってくれました！美波ちゃんの協力のおかげです！」

「そっか、転校はまぬがれたんだな。
よかったよかった。」

「姫路さん、お疲れ様。」

「あ、吉井くん…」

「ん？明久の顔を見て一瞬微妙な表情にならなかったか？
すぐ戻ったし、気のせい？」

「あ、有馬。あのさ、ちょっとこっちでお話ししない？」

「ん？別にいいけど、どうした？」

優子は何やら照れながらお誘いしてきた。

「というわけで、少し離れた場所で逢引ですわい。」

「もちろん、オレンジジュース（？）を持参して。」

「なんで（？）かって？なんかさ、苦いんだよね。アルコールでも入ってるかのようには？」

…いやいや、まっさかあねえ？

「ねえ有馬。さっき姫路さんに聞いたんだけど姫路さんたちが連れてかれたとき、島田さんが吹き飛ばされたことに怒って吉井くんと一緒にチンピラを殴り倒したって本当？」

「あー、うん、ホント。やりまくったね。」

「そっかー…ちょっと嫉妬しちゃうかも。」

オオー？シット？違う、嫉妬？

何でかなー？とわからないほど鈍感ではありませぬが…

「でも、やらなかったら、姫路さんと島田さんが傷ついてたかもしれないってのに嫉妬なんて…アタシって最低だよね…」

「ん、いや、まあ、しょうがないんじゃないか？自分の彼氏が自分以外の女を助けてたら嫉妬しちゃうもんだろ。それにさー、人間、頭で理解しても感情を制御できるわけでもないだろ？不思議だよな。人間は頭と心、二つで物事を考えちゃうんだぜ？頭で理解しても、心では許容できないこと、いっぱいあるだろ？」

優子が泣き始めたので、超高速に慰める俺。

でも、慣れてないからうまくいくかどうか？

「そう、だけどさ。でも、やっぱり、最低じゃないかな？一瞬でも助けてあげてほしくなかったって考えちゃったんだもん。助けなかったらどうなってたかわからないのに…」

「あのな…お前のマイナス思考になるの、悪い癖！プラスに考える！この俺と付き合っているからにはお前が襲われる心配もない。そして、超強く超優しいということに惚れ直してくれたっていいんだぜ？」

「…バカ」

あるえー（・3・）

励ましたはずなのに、貶されちったよー
まあでも、笑ってくれたからいつかなー？

「ありがと、有馬。姫路さんたちを助けてくれて、アタシを励ましてくれて。」

「気にすんなって、いつものことだ。昔からお前は危なっかしくて心配だったしなー」

だから、強くなろうと思ったんだけどね。

強くなって、こいつを守ろうと、そう思ったのは昔の話。
それがな、今では

「ねえ、そういえば有馬。アンタが秀吉にチャイナ服を着せたって聞いたんだけどなー」

すごくいい笑顔で、俺を恐怖させるぐらいに強くなっちゃって…

「いやー、あの優子？元気になったのはよかったけど、しんみりとした態度からどうしてこう、そうなるのかなー、なんて。」

「知らないわよ。ただ、なんかからだがあっつくて、自分を抑えきれないみたいなのよ。」

んー？よく見ると目がトロンとしてる。頬も赤い。

…あー、そっか、やっぱりこれ、酒だったんだ？

んで、泣いたり怒ったり、めちゃくちゃになっちゃったって感じ？

あ、だから飲むなっての、このお酒を！

「ねえ、ありま、ちゅーってして？」

「は？いや、は？」

待て、落ち着け！今、優子はなんていった？

ちゅーってして？それは俗に言うキッスキッスのことでしょうか？

「いやな、優子。そういうのはさ、もっとムードがあるところがい
いなーって。こんな酔った勢いとかじゃなくってさ？」

「有馬は、私とちゅーするの、いや？」

上目づかい＋赤みがかつた頬＋お酒＋優子は反則です…

覚悟を決めるべきか？いやしかし…

「ありまゝはやく〜」

とって、肩によりかかってきた。

うん、無理だね。

こんな可愛いのに、無視なんてできないし

勇気を振り絞っていつてみよー？

「よし、優子！」

「……………」

「…優子？」

「……………（スースー）」

ありゃ、寝てらあ…

ていうか、肩によりかかってた時点で気づくべきだったか？

こういうのをなんていうんだろう…！一人相撲？

あー、あっちでも明久が姫路に襲われてるけどまあいいや

俺も、酔いが回ってきたみたいだし…

ちよっと無理かもな、もう。おやすみなさい。

幸せに包まれて寝るのも悪くない。

「おつす優子、おはようさん。」

「あ、有馬！？おおおおおお、お、おはよ」

え、何この動揺っぷり…
ちよっとシヨック。

「えっと、どうしたんだ、その挨拶は。」

「いや、え？あの、もしかして昨日のこと覚えてないの？」

「昨日のこと、と言って該当する名目は優子にキスを迫られたことぐらいなのだが…」

「へ、あ、え！？アタシ、そんなことしたの！？って、そうじゃなくで、それだけ？」

「ああー、まあ、それくらいだな。何かあったのか？」

「う、ううん、何もなかったわよ？ええ、本当に、何も。」

…怪しいどころじゃねーよ。

はて、思いだそう。

あのあとは…：そういえば、いつの間に家に帰ったのだろうか？

…：あー、なんか、霧島に襲われそうになってた雄二が助けを求めて起こしてきたんだっけか？

いや、そのあともやっぱり眠くて寝たのに今度は秀吉に、ムツツリーニが工藤と話をしたせいで死にそうなのじゃーとか、そんなこと言われて起きて、病院連れて行ってきたんだっけな。

あ、そんなとき、寝ぼけ眼の優子も連れて行ったら看護婦さんに「姉妹井？やるわね…」とかからかわれてた気もする。

それで、そのあとは優子と秀吉と一緒に玄関に入った気がする。

うむ、俺の記憶ではおかしいところは…：一緒に玄関に入る？

「えっと、俺もしかして昨日、優子の家に行った？」

「え、や、あの、ううん？そんなことなかったと思うな？」

「ダウト！3人でお前の家の玄関に入った記憶がある。」

「うっ！…あ、そういえばそんなこともあったかもしれないわねー
？」

こいつ、嘘つくときは疑問形になるのだろうか？

いや、でも、前まではそんなことなかった気がするんだけど。

…動揺してるから？

まあいいや。こんな面白い優子はあまり見れないので適当にセクハラでもするか…

「あー、まあいいや。それよりも、今度風呂で背中でも流してくれよ。」

「は、はひっ！？嫌よ！も、もうあんな恥ずかしい思いは嫌！」

…え？

いやいや、え？

もう、って何？

「もしかして、昨日、一緒に風呂入ったりとかした？」

「え、や、そ、そんなことなかったとおもっわよ？」

「ダウト！今日のお前は嘘が下手すぎる。」

あー、そかそか、一緒に風呂かー

「昨日の俺を殴って今の俺と代わりたい！」

もう、本当にね。

だって風呂だぜ、風呂。

昨日の俺はどうやって一緒に入れたのか聞きたいものだ。

「そそそ、それじゃね有馬。アタシ、急いでるから。」

「あ、ちよ、待て優子！」

逃げられた。

やー、ちよっと気まづくになるかもだな。

とりあえず、俺は昨日のメモリーを呼び起こそうと必死になっていた。

28話目。清涼祭の閉幕と歓喜。ちなみに原作だと2巻の終わり。(後書き)

あ、ども桜餅でやんす

更新遅かったなーとか言わないで、学力テストがあったのだ
受験生つて大変…

まあ、他にも精神的に不安定になってたりとか理由はありましたがな
それとついでといっちゃーなんです、10万アクセス&1万2千
ユニークとか達成しちゃってるので、なんかこういう話を作って欲
しい！とかつてあつたらいてくれるとやりますぜ？

まあ、要望がなかったらなかったでいいのですが
あ、次回は如月ハイランドデートの予定です

宮村夫妻の？恋愛テクニク講座

「…なあ、優子。これはどういうことなのか説明してくれないか？」

「あ、有馬。見ての通りアタシ達夫婦がどうやったらラブラブになれるかを指南する場よ？」

「（あれ？結婚してないよね？）なるほどな。大体わかった。だが、その相手とやらはここにいないようだが？」

「大丈夫よ？ちゃんと手紙、来てるから。」

「（どっからきたんだよ…）なるほど。では俺たちでその子の悩みを解決させてやるか。」

「うん。じゃあ紹介するわね。突然ですが、仲の良いお2人に相談です。』」

「おお、俺たちに相談するとはわかってるな。なにしろ学校公認（ただし、異端審問会などを除く）のバカップルだからな。」

「私には将来を誓い合った彼氏がいます。でも、彼は素っ気無く、デートに誘っても断ってきたり昼食を一緒に食べようとしても運が悪いか避けられてるのか、相手が見つかりません。』」

「ん…言っちゃ悪いがそれって騙されてるんじゃないか？本当に将来を誓い合ってるのか？」

「『それに、私という彼女がいながら何にも手は出さないのに、彼に部屋に勝手につくった合鍵で入ってみてみたら机にはエッチな本が入っていました。彼が私以外の女性を見ないように、私だけに興味を示すように調教する方法を教えてください。』」

「…待て。それは本当に彼氏か？あなたは本当はストーカーとか、ヤンデレとかそういうた部類の人ではないのか？」

「有馬、失礼なこといっただらダメよ？ほら、よく言うじゃない。『恋は盲目』だって。」

「盲目で済ませていいのか！？不法侵入だろ！犯罪だぞ！」

「まあとりあえず、対処法を説明します。」

「流すなよ！…まあいい、一応言ってみてくれ。」

「いくつかあるんだけど、まずはこれ！」

ダダダダダダ、ダン！（どこからかともなく聞こえた効果音）

「催眠術！自分以外の女性を見ると底知れぬ恐怖が出るようにしましよう！」

「待て！何だその、某ドSな生徒会書記見たいな考え方は！」

「続いてはー」

ダダダダダダ、ダン！（どこからかともなく聞こえた効果音）

「シンプルに監禁しましょう！そこで、あなたなしでは生きていけない体にするのです！」

「待て！ホントに待て！お前はいつからそんなに黒くなったんだ！

もつと純情な　　あー、BL本か…BL本が原因なのか…」

「そして最後に　　」

ダダダダダダ、ダン！（どこからかともなく聞こえた効果音）

「それでも自分のものにならない場合は夜道で斬りましょう！愛で斬るから痛くないはずですよ！」

「これは俺が原因か！？俺がまじこいをやってたのがマズイのか！？」

「以上、『雄二、大好き（16歳）さん』からのお手紙でした。」

「霧島か？霧島だよな！今言ったことを本当にはするなよ！雄二がかわいそうだから！」

「ちなみに、さっきのは冗談だよな？こつ、場を盛り上げる為の。」
「え？あ、うん、もちろんそうに決まってるじゃない？いやねー？」
「…後でお前のその考え方を直してやる。」
「へう…」

29 話目。真剣で私に恋しなさい？いや、恋してるからじつじつでデートしてるぢ

「有馬！起きて！」

ん？カーテンから漏れる光に朝だということに気がついた。
そして目の前には我がいとしい恋人である木下優子がいた。

「おはよう、優子。」

「おはよう、有馬。」

朝のあいさつは大事だよな。

…じゃなくて

「えっと、なんでここにいるの？ここ、俺の部屋のはずなんだけど…。」

「何でって、合鍵で開けたからに決まってるじゃない。」

や、確かに合鍵は渡したよ？渡したさ。

でも、なんでまた今日はこんな早くから来るのかなーと、そついいたいわけなんだよ？

「えっと、今日、約束とかしてたか？」

「約束って言うか…これ、行きましよう？」

そついつて優子がポケットから紙切れを出した。
どこかで見覚えがあるような、ないような…

「えっと、如月ハイランドのプレオープンチケット？」

「うん！そつよ？行きましよう？」

優子はまぶしい笑顔でいつてくる。

あー、超可愛いなー、困ったなー、行きたいなー…

「でもそれ、いったら俺と結婚させられちまうかもだって前説明したよな？それでもいいのか？」

「うーん、確かに勝手に結婚まで持っていかれるのは困るわね…」

そっかー…

俺は優子となら結婚してもいい…むしろ結婚したいと思ってたんだけどな…

「だって、そういうのは自分たちで決めたいじゃない？」

「っ!？」

…あかん、不覚にも喜んでもうた。

顔が赤くなるのがわかる。熱いもん。

「うし、じゃあ行くか！あちらさんの考えなんて俺らで吹き飛ばしてやるっぜ?」

「うん！2人でならきつとできるわよ！」

根拠なんてどこにもないけど。

なんとなく、俺たちはきつと死ぬまで一緒かなーとか思った。

なんせ、バカップルですから。

「じゃあ、着替えるから。」

「うん！」

「…えつと、着替えるから。」

「うん！」

あるえー

どうして着替えるっていつても出て行く気配がないのでしょうか？

「あの、出てっただけじゃないでしょうか？」 何故か敬語

「あ、気にしないでいいわよ？」 手には何故かカメラ

「気にするわ！てか、なんでカメラ！？どうしたいんだ、お前は！」
三段で突っ込んでみた

「大丈夫よ。見るのはアタシだけ。」 何故か安心しなさいという
目つき

「出てけー！」 ついにはキレた

「うん、それ無理」 青い髪の眉毛なインターフェイスみたいな
言い方

…俺、どうしたらいいの？

「人はこんなにも、無力だったんだな…」

電車とバスで2時間近くかけ、今は如月ハイランドのすぐ近く。
ちなみにあの後どうなったかはご想像に任せる。
でも、想像はして欲しくないなー、なんて。

「まだ言ってるの？別にいいじゃない、着替えくらい。」

それが女子のセリフですか…

しかも、自分がやられたら絶対にキレル人ですよ？

以前、一緒にお風呂はいつたらしいのだが（お酒の影響で俺は記憶
が一切なし）、そのあとの優子は酷かったし

あ、でも、それ以降かも。こんな感じに積極的セクハラやオレオレになってきたのは。

「あ、有馬！着いたわよ！」

おお、そういわれて前を見ると大きなアミューズメントパークが！
いや、実はさつきから見えてましたけどね？
大きいから。

「ん、じゃあ入るか。」

そういつて優子の手をつかむと、腕を組まれた。

…あれ？

「えっと、優子さん？」

「ん？どうしたのよ。」ときよとん顔。

「…いや、やっぱなんでもない。」

それにしても胸が小さくて微かにしか当たらないな…

「ねえ、有馬。なにかものすごく失礼なこと考えてなかった？」

「いえ、そんなことはないですよ？」

「嘘。胸が小さくて微かにしか当たらないな…って思ってたでしょ？」

あ、そういえば俺、優子と「」なしで話せるんだった！ 22話参照
ん、でも、俺はわからないから一方通行？

「うーん…多分有馬も出来ると思うわよ？こっつ、アイコンタクト的な感じで。」

「アイコンタクト？」

「うん。じゃあ、私の目を見て私が何を考えてるのか当ててみて？」

おおっ、いきなりか…

難しいことを簡単に言ってくれるな。

とりあえず、言われたとおり優子の目を見てみることにした。

「……………」

んー？えっと、うん？

「『お化け屋敷に行きたいな。でも、絶叫マシンが最初かな。』つてところか？」

「正解。ほら、普通にできるでしょ？」

いや、普通は出来ない気が…

あれ、じゃあ俺って普通じゃないわけ？

まあいいや。そんなことは些細な問題である。ついでに今更だし？とりあえず入ろっか。

「いらっしやいませ！如月ハイランドへようこそ！」

入り口の男は外国人なのか少々なまってるな。

顔はアジア系だけど、判断つかない。

「本日はプレオープンですが、チケットはお持ちですか？」

「あ、えっと、これを。」

優子がポケットからチケットを出し、係員の男に渡す。

「拝見しマース。」

男がチケットを見ると笑顔のまま固まった。

何故だろう、嫌な予感がヒシヒシと！

「えっと、このチケット、使えなかったりとかします？」

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、少々お待ちください。」

そういつて男は俺たちに背を向けどこかに電話する。

「私だ。もう一組来た。ただちに別ルートでのウェディングシフトの準備だ！」

「待てい！なんだそのウェディングシフトとやらは！」

こいつ、目の色が変わったぞ？確実に例のジnkスのやつだな。

まあ、別にいいけどさ。

あと、日本語普通にしゃべってたよね、今。

「気にしないでください。コッチの話デース。」

「あーっと、もしもあのここに来たカップルは結婚できるとか言うジnkスのためだったら、必要以上のことはしないでくれていいぞ？」

「何のコトですか？さっぱりデース。」

「あの、アタシたち、どうせ結婚するつもりなので、大丈夫です。」

と優子が言うと男は一瞬驚き、考え込んだ。

まあ、それもそうなのかな？結婚考えてるとは普通、思わないだろうし。

「わかりました。では、記念写真だけ撮らせてもらってもよろしいですか？」

「まあ、それぐらいだったら。」

「はい、全然大丈夫です。」

まあ、記念写真くらいは別にいいだろ。

係員の男はカメラを出した。

俺たちも腕を組んでポーズを取る。

「デハ、写真を撮りマス。はい、チーズ。」

カシャッなんて音とともに光、その後にピピピなんていう電子音が聞こえてきた。

「スグに印刷してキマス。少々お待ちください。」

「んー、あそこでソフトクリーム食べてもいいか？」

「構いませーん。それではいってきマス！」

シユタッ！なんて効果音がつきそうな感じに男は颯爽と駆け出していく。

「じゃ、行くか。」

「うんー！」

ソフトを注文し、食べようとするとき、さっきの男が現われた。

…早いな。クロックアップでも使ってるのかもしれない。

「ハイ、どうぞ。」

「おう、サンキュ。」

「どれどれ？どんな感じかしら。」

2人で覗いてみると

「……………」

ちよつと無言。

や、ホントこれ、いい写真だな。

周りの『私たち、結婚します』とかの加工は微妙だが、写真自体はとてもいい。

なんか、我ながらホントに幸せそうって感じがするもん。

「コレをパークの写真館に飾ってもいいデスカ？」

「あ、ああ。全然構わない。な？優子。」

「え、ええ、大丈夫です。」

「ありがとうございます。では、引き続きお楽しみください。」

そういつて男はどこかへ行ってしまった。

「じゃ、そろそろ適当に回るとするか。」

「うん！じゃあまずはジェットコースターね！」

「有馬！次は何に乗ろうかしら」

「……………返事がない。ただの屍のようだ。」

「むう…有馬、真面目に返事してよ。」

「いやいや！無理だから！どうしてこんなに絶叫系ばかりなんだよ！」

まあ、お約束ではあるが、絶叫マシンに乗りまくったと、そんな感じでダウンする俺。

一応ここさ、プレオープンで、でかい所だからさ？ジェットコースターも世界で3番目に速いとか、世界で5番目に長いとか、世界1高いとか、そういうのがいくつもあったわけです。それに全部乗ったらさ、さすがにきついじゃん？

「うーん…じゃあ、次はお化け屋敷に行きましょう。」
「んー…オーケイ、わかった。行ってやるっじゃん？」

というわけでお化け屋敷へと向かっていったんだが…

『止める翔子！誤解だ！！』

お化け屋敷の中から声が聞こえてきた。

どこかで聞いたことがあるような気がする声。

「なあ優子。俺の聞き間違い出なければ今、まるで雄二のような声が聞こえなかったか？」

ちなみに「まるで」のようだ」というのは比喻表現である。
この場合は直喩だな。

「あら、奇遇ね。アタシも今、代表の『…ダメ。許さない。』って
いう声が聞こえたような気がしたわ。」

「そか…どうする？中に入るか？」

「うーん…一応、入ってみましょうか。」

まあ、優子が言うならそうするか。

とりあえず、入ってみることにした。

…続く

29話目。真剣で私に恋しなさい？いや、恋してるからじつじつしてデートしてる

ども、桜餅です

お久しぶりですね、多分

ちよつと長くなりそうなので2つに分けようと思います

なんか、最後が微妙だったけど気にしない

なぜなら、こんなわけ方をしたのは初めてだからだ。

あ、次回は雄二たちと一時的に合流してーあとは、うん企業秘密です
すが

でわ、次回をお楽しみにして下さいなノシ

30話目。Wデート？いえ、実はそんなことはしませんよ（如月ハイランドデー

これまでのバカとテストと常識人？は！

「お前が破壊者か？」

「いえ、人違いです。」

「黙れ！お前を倒しこの世界を守る！変身！」

「ちっ、俺の話は無視かよ…」

「なぜお前は戦う？」

「守りたいもののために戦う。ただそれだけだ。」

「有馬…私のことは、気にしないでいいから、強く、生きてね…」

「優子？優子……！！」

「俺は破壊者だ！俺にかかわってくる奴すべてを破壊してやる！」

「うむ。これで完璧！」

「ねえ、有馬。アタシ、死んだことになってる気がするんだけど、
どういうこと？」

「へ？あ、ゆ、優子！？あ、っと…気のせいだぜ」 誤魔化して
るつもり

「そう。気のせい、ね。」 超いい笑顔

「う、うん、気のせいです。」 引きつった笑み

「…」 静かな怒り！笑顔ver.

「…(ダッ)」 逃げだそうとした音

「(ガシッ)」 腕をつかんだ音

「あ、あの、優子さん……」 涙目

「ん？なあに？」 笑顔の恐怖

「実は俺、ポニーテール萌えなん左腕の関節が折れ曲がるように痛い……！」

「ごめんなさい、やりたかったです。」

30話目。Wデート？いえ、実はそんなことはしませんよ（如月ハイランドデー

前回のあらすじ

ブレオーブンチケットを使って如月ハイランドにデートに来た俺たち。

しかし、如月ハイランドではこのチケットを使った人を強制的に結婚させて、「訪れたカップルは幸せになれる」というジंकクスを作ろうとしていたのだ！

通称『ウエディングシフト』

そんなことされちゃたまったもんじゃねえと思った俺たちはとりあえず

「あ、俺たち結婚するんで、大丈夫ですよ？」的に答えておいた。

そしたら意外とほとんど何もしないとよ。

や、ホントにするつもりだから、いんだけど。

そして、二人で色々と絶叫マシンを回っていたが、（主に俺の）気分転換にお化け屋敷に行こうという話になった。

だが、中からは断末魔の叫びのような声が聞こえてきた！

一体、何が起こってるんだ！？

…ふう、疲れたぜ。

なんか、それっぽくしてみたけど俺はいたい誰に説明してるのだから？

まあ、よくあることではあるが。

「じゃあ優子、入るぞ。」

「ええ。代表は何をやってるのかしらね。」

そう言って、中に入ると

「やめる翔子！あれは秀吉の声真似で　　って有馬！？なんでここに！？いや、ちょうどいい。翔子を止めてくれ！頼む！」

…何故か雄二が釘バットを持った霧島に追いかけていた。
うーむ、確かに怖いな。さすがお化け屋敷。
いやいや、そうじゃないだろ。

「霧島、ストップだ。何があつたかは知らんが、とりあえずモチつけ。」

「…………そのモチは雄二。」

「おお？雄二はモチだったのか？じゃあしょうがねえ。好きにするといひさ。」

「待てよ！おかしいだろ！突っ込みどころがたくさんで突っ込みきれないぞ！」

雄二が何か言ってるが気にしない。
なぜなら、止める気なんてないのだから。

「まあ気にするな雄二。ほんの冗談だ。な、霧島。」

「…………うん。冗談。本気にしないでほしい。」

「殺気が明らかにマジだったんだが…」

まあ、なんだかんたんで霧島も落ち着いた。

ナイス俺！さすが俺！

優子がなんか変な目で見てても俺は気にしない。

「とりあえず、説明してもらおうか？」

「ああ。実はな、かくかくしかじかだな。」

「ふむ、なるほど。かくかくしかじかという事情があつたのか。」

「…有馬、今の説明でわかるの？」

いや、正直全然。

てか、かくかくしかじかでわかるわけねーだろ。

四角いムーブ？

「冗談はさておき、どういうことだ？」

俺がそう聞くと雄二は少し困ったような顔をして答えた。

「お前も聞いただろう？プレミアムチケットを使ったら結婚させられるって。」

「ああ、聞いたな。俺たちは回避したが。」

「な、どうや…なるほど、結婚するつもりだって言ってたからな。まあ、それについて、思わぬ伏兵がいたんだ。」

「と…という？」

「明久やムッツリーニ、姫路が俺たちを無理やりくつつけようとしてるんだよ、それを利用して。」

「…あー、なる。よくそんなことできたな。学園長がらみか？」

「おそろくな。確認はしてないが、さっきのテープから察するに多分秀吉もいると思う。」

「へえ、秀吉、そんなことしてたんだ。ウチの愚兄が悪いわね。」

「いや、気にするな。一人や二人増えたって変わらんさ。」

うーむ…もしかして、俺たちもあそこで断ってなかったら同じ目に遭ってた？

おお、くわばらくわばら。

…でも待てよ？

「（キラーン！）」

「（ピキーン！）」

優子とのアイコンタクト終了。
さすが優子、話がわかるな。

ちなみに今の一瞬でのやり取りをわかりやすく説明しよう。

「（俺らも、雄二を素直にさせてくつつける方に参加しないか？）
」（奇遇ね。アタシもそう考えていたところよ。）

という感じになる。

はて、俺は誰に説明してるのだろうか。

「（ピキンピキン、クルー）
」（キュシャン、キャリン）」

2人で今後の予定を確認。

上手く利用する方法を考えたぜ。

「よし、じゃあ、一緒に回るとしようぜ？」

「ええ、そのほうが楽しくなると思うの。」

「…お前ら、なに企んでやがる？それにこっちはウェディングシフトとかってやつの方があるから」

「その心配はありません。お化け屋敷に1時間はかけるつもりだったので大丈夫ですよ？」

「ということだ。一緒に行こうぜ？」

「待て！いつからいたんだ似非外国人！？」

あー、いちいち面倒だなー…

「霧島、頼んだ。」

「……………わかった。」

「ちよ、待て！何をやる気、だ。」

「そいつは着いてからの、お楽しみだ。着いたら起こしてやるからな？」

…雄二が重かった。

ちなみに、何故か霧島が持っていたスタンガンで眠らせただけだぜ？

「で、これからどうしよつか？」

「あー、そうだな。雄二重いしな…とりあえず、霧島と一緒に観覧車においてきていい？襲つても良いから。」

「……………わかった。有馬はいい人。ありがとう。」

「それは色々と不味いでしょ！？」

優子に突っ込まれた。

いや、まあそうだけどさ。

「んー、じゃあ、さっきの似非外国人に手配させるか？多分、完全防備の部屋の一つくらい貸してくれるだろうさ。」

「そつという問題じゃないでしょ！？」

なんだかやけに突っ込まれる。

今朝は優子の方からこういうネタを使ってきたのに…

あれは着替えだからちよつと違うか？

「まあ、とりあえず霧島。雄二は任せた。俺たちはもう行かなくてはいけない。」

「……………どこに行くの？」

「野暮用だよ。大丈夫、悪いようにはしないさ。」

嘘だけどさ、雄二にとっては。
霧島にとっては多分本当なはず？

「じゃ、行くぞ優子。」

「うん。それじゃね、代表。またあとで。」

「……………うん。また後で。」

「というわけだ明久。面白いことやってるじゃん？」

「あ、有馬！？どうしてここに？それに木下さんまで。」

察してる人もいるだろうがここはスタッフの控え室。

予想通り明久たちがいた。なぜか着ぐるみ（頭はなし）を着ていたが多分、お手伝いだったんだろ。

「いやなー、俺たちも遊びに来たんだがなんか面白そうなことになってたからさ？」

「なるほどのう…姉上と来ていたんじゃない。しかし、そうすればお主たちも結婚」

「するから問題ないわよ、秀吉。」

「そういうことだ。何なら今からお義兄さんと呼んでくれてもかまわん。」

「それは少し…抵抗があるのう。」

まあ、冗談だから良いけど。

「とりあえず、俺たちも混ぜろ。俺は霧島を応援するって試召戦争の時に決めたからな。」

「アタシも、代表にはお世話になってるから手伝いたいの。」

ふざけているけど割りときな理由ですよ、俺。

だって、あそこまで一途で健気なのって、応援したくなるじゃん。

「うん、わかった。じゃあこれからの予定を話すね。」

明久の説明によるとこれからクイズをやらせるらしい。

正解すると『如月ハイランドウェディング体験』というのを出来るとか。

それを受けさせる為にどうしようと言う話だ。

「ふむ、じゃあ、こうしたらどうだ？俺らとあっちで勝負して、勝ったほうが受けられるようにする。それで、俺たちはまあ、しょうがないけど負けてやる。」

「うーん、そうすると少し問題を変えないといけなくなるね。」

「そうなのか？ちなみに、どんな問題？」

明久が問題が書いてある紙を見せてきた。

「結婚記念日、結婚式場、2人の出会い。」

とりあえず、問題と呼んでみた。

おかしい、最初の問題の意味がわからない。

ちなみに順に「When Where When」となっている。

「そうか。じゃあちよつと今の作戦は無理だな。裏方に徹するよ。」

「うん、そうしてもらえたほうがこっちもやりやすいよ。じゃあ、問題を読んでもらえる？」

「あー、ok。わかった。俺に任せる！」

今回の俺は絶対にボケに回ろうと思った。

「有馬はいつもポケじゃない。」

「あの、俺が許可してない時に心読むのやめてもらえます?」

最大限の譲歩である。ていうか、俺も読みたいかも。

ちよっと読んでみる?

はい

いいえ

ドゴツ!

「アタシの心を読もうとしたら、ゲーで殴るわよ?」

殴った後だった。

とていうか自分のことは棚に上げるやつだなー

そして、俺はいつから超能力者のようになったのだろう?

多分、本編には関係ないと信じたい。未定です

「メタな発言禁止!」

「気のせいだ。」

とりあえず、周りからの目が痛い。

「…え?なにこの人たち、大丈夫?」みたいな目で見ている。

「…あれ?そついえば島田は?」

「美波ちゃんですか?美波ちゃんは今日、葉月ちゃんたちと出かけるということではないんですよ。」

なるほど。

ハブられてるのかと思っていたが安心した。

「あ、もう時間になるから、有馬早く着替えて準備して!」

「了解！俺に任せろい。」

どんな回答でも正解にしてみせる！

何故だか優子が「凄く心配になってきた」というような目で見えてきたが気にしない。

「はい、皆様本日は如月ハイランドのプレオープンイベントに付き合っていたいただきありがとうございます。」

会場の人が俺のほうを向く。

うーむ、心地良いね。

どこかで「有馬！？なにやってるんだあいつ！」とか聞こえたがスルー。

「なんと、本日は結婚を考えられているという高校生カップルがいらっしゃいます！」

俺は紙に書かれたとおりのセリフを口にする。

「そこで、我々としてはこの2人に幸せになってもらいたいと思いましたが、こんな企画をご用意しました。題して【ウェディング体験プレゼントクイズ】です！」

ちなみに今、明久やスタッフの人に入入り口を封鎖してもらった。逃げ出されちゃ困るのでな。最悪を考える、それが俺の仕事である。多分。

「本企画の内容はいたってシンプル！ただ、ここでクイズに答えてもらうだけです！5問正解していただけると我が社の誇る超高級のウェディングプランを堪能できます！もちろん、そのまま入籍して

「いただいても問題ないですよ?」

雄二が「大問題だバカヤロウ」という顔で睨んでくる。

『それでは坂本雄二さん、翔子さん! ステージの方へお願いします!』

少し経ってから雄二が霧島に耳を引っ張られながら出てきた。

まるでポ モンのニ シテイのジムリーダーだったはずの細目の男みたいだ。

「有馬てめえ、後で覚えているよ?」

「おいおい、俺にか? どうせなら明久に映画かなんかのペアチケットを渡した方が面白そうになると思うのだが。」

「確かにそれも面白そうだが…お前への恨みも忘れねえ!」

「ふーむ…じゃあ、今朝お前が霧島に焼かれた秘蔵の本を今度くれてやろう。それでどうだ?」

「よし、月曜あたりに明久に姫路たちの前で映画のペアチケットをくれてやろう。」

即断だった。

これだから男ってやつは…

いつかうちのクラスか学年かで覗き騒動が起きないことを願うよ。

『それでは如月ハイランド【ウェディング体験プレゼントクイズ】を始めます!』

ちなみに、ボタンを押して答えるやつ。

本当にシンプルだね。別に走って答えたりとかそういうことはない。

『それでは、第一問！』

デデン！ 例の効果音

『お2人の結婚記念日はいつでしょうか？』

雄二が「問題の意味がわからない」という顔をしている。
奇遇だな、俺もだ。と目で合図しておいた。

ピンポーン！ 霧島がボタンを押した音

『はいっ！答えをどうぞ！』

『……………毎日が記念日。』

「やめてくれ翔子！恥ずかしくて死んでしまいそうだ！」

雄二が叫んでいる。

ちなみに、答えは書かれていないからなんともいえないので

『正解！お見事ですな！』

正解にしておくのだ。

間違っても無理やり正解にするけど。

『第二問！お2人の結婚する予定の場所は？』

ピンポーン！ 雄二がボタンを押した音

『はいっ！答えをどうぞ！』

『鯖の味噌煮！』

『正解です！』

「なにい!？」

あ、ごめん。適当に言った。

どうごまかそうか…

よし!

『お2人の挙式は当園にある如月グラウンドホテルにある『鳳凰の間』
別名：『鯖の味噌煮』にて行われます!』

うん、我ながらナイスアイデア!

別名という考えを良く思いついたな。

『それでは、第三問!お2人の出会いはどこでしょうか?』

プスッ ボタンを押そうとしていた雄二の目を霧島がさす音

「ふおおおおおお」 もたえる雄二の声

ピンポーン! 霧島がボタンを押す音

『はい、回答をどうぞ!』

『……………小学校。』

『正解です!お2人は小学校からの長い付き合いで結婚までいたる
ということだそうです。まるで何かのギャルゲみたいですね。』

言ってから自分もそうだとということに気がついた。

ううーむ…まあいっか。

『それでは第四問!お2人が付き合うこと』

ピンポーン! 雄二がボタンを押した音

なにこいつ、バカ？バカだよな。

『お客様であろうとなんだろうと、このようなことをされては警察に通報、もしくは営業妨害で訴えなければなりません。我々としてもこの場から警察にお世話になる人を出すというのは些か遠慮願いたいのでどうか黙って座ってもらえないでしょうか？』

ちよつと口調がおかしくなった気がするけど気にしない。

「ああ！？マスコミにここの態度ばらすぞゴラア！」

「黙れ。てめえ、そんなことしてただで済むと思ってるのか？むしろお前が訴えられて金を払うことになるのが終わりだ。それをわかって言ってるのか？まあ、頭悪いから理解も出来ないだろうけどな。裁判したら確実に勝つのはコツチなんだぜ？てめえみたいに見えるから学歴低そうなやつにはわからないだろうけど、黙って座ってるよ、クズが。」

チャラ男は混乱している。

別にメ パニをかけたつもりもコンフ を使ったつもりもあやしい かりを選択した記憶もないんだがな。

「てめえ！よくわからねえけどバカにしてんな？オキヤクサマに向かつてなんて態度だゴラア！とりあえず俺たちもクイズに参加させるよ！」

『はあ、しょうがないですね。では、一つ問題を言ってもらえますか？それに私たちが正解できなかつたらあなたの要求をのみましましょう。ただし、一般的な問題じゃないとダメですよ？』

「上等だ！じゃあいくぞ！」

そついつてチャラ男はマイクを手に持った。

『ヨーロッパの首都はどこだ？答える！』

……会場がブリザード！

ヤバイな…俺はメラー マモファ ガモか んほうしゃもヨ ファ
イヤも使えないのだが…

『えーそれでは、坂本雄二さん、翔子さん。こちらで【ウェディング体験】の準備を行いますので来て下さい。』

会場は凍ったままだった。

ついでに、バカップルと呼ぶのも失礼である（バカップルの人たちにクソどもはギャーギャーわめいてたが無視。

世界に平和が訪れますよーに。

「あ、有馬…おかえりなさい…」

「ただいま、優子。」

とりあえず、準備の間は控え室に戻った。

俺と優子だけしかおらず、明久たちは次の準備をしている。

……ん？

「おい、優子どうした？なんか様子がおかしいけど。」

「な、なんでもないわ。気にしないでいいわよ。」

「なんでもないって…んなわけあるか。明らかに具合悪そうじゃねーか。」

そういつてデコに触ったが

「あっつ！お前、熱あるだろ！なんで言わなかった!？」

「ご、ごめんなさい。今日のこと、ホントに楽しみにしてたから…
薬飲んだし、大丈夫かなって。」

「バカ！病院行くぞ。」

とりあえず、携帯でタクシーを呼んで、あと、明久たちにも連絡。
雄二には「まあいつか。最後まで見ていたかったが優子がこうなっ
てちゃしょうがない。」

「はあ、今度からはちゃんと具合悪かったら言えよ？マジで心配す
るから。」

「あ、あの、怒ってないの？」

「怒ってる。でもそれ以上に心配。ちゃんと言ってもらわなきゃ俺
もわから　　もしかして、だから心を読むな」とかいつてたわけ
？」

「……うん。バレたくなかったの。」

うーむ…

楽しみにしてたんだろうな…
でも、

「別に、言ってくればいつだってデートにいつてやれるんだぜ？
どうしようもない時以外は。だから、今度からは無理するな。わか
った？」

「うん。ごめんね、有馬。」

「気にすんなつての。あ、タクシー着たな。じゃあ、病院行くぞ。」

こうして俺たちのデートは終わったわけだが、雄二たちはあの後い
ろいろあったそうだ。

あの、クソカップルたちがなんかいつて霧島を泣かせたらしい。

雄二は何もしなかったといったが俺の勘ではあの男をぶちのめした

だろうと予想。

ちなみに、優子はただの疲労による免疫力の低下だそうだが、たいしたことはなく、安静にしていればすぐに治るとのこと。

30話目。Wデート？いえ、実はそんなことはしませんよ（如月ハイランドデー

あ、ども桜餅です

なんか最近、病んでます

まあ、それはいんだけど、別にこの終わり方は面倒になったとか、そういうことじゃないぜ？

ただ、PCがフリーズして消えちゃって「…ああー」みたいになつたからこんなにしただけで

あと、超能力とか、そういう設定にするつもりは今のところないけど、ただこれを見ていた友が「これって優子が超能力の使いすぎで倒れたんじゃないの？笑」とかいつてきたので、「おお、それも面白いかも。」とか思ってたので気が向いたときに使えればなーと思います。

むしろ、IFシナリオを作っそうするか？

でもなんか、バカテストじゃなくなるからやめようかなー…
結構迷ってる作者でした

次回はオリジナルなストーリーの予定

テスト勉強で忙しいからいつ更新になるかは不明ですが
では、さらば

あー、俺って文才ねーなー…

わふーな話。多分ギャグ。本編とは関係ありません。(前書き)

「そういえばさ、なんで有馬の腕輪の能力の名前【インパクト】にしたの？隕石だったら【メテオ】とかそういうほうにしたほうが良かったんだと思うんだけど。」

「ああ、その話が…それはだな。」

「うんうん。」

「実はあの腕輪、隕石を出すの以外にももつと凄い能力があるんだ。」

「そうなの！？どんな能力？教えてよ。」

「うーん…まあいつか。これはな、優子の腕輪と合わせてしか使えないんだが、俺の召喚獣の腕輪と優子の召喚獣の腕輪。一見何の関係もない様に見えるんだが、一緒に使うと凄い能力になるんだ。」

「へえ…それって結局何なの？」

「うむ、実はな」

「うん。」

「2人で一緒に腕輪の効果を発動すると、人類から心の壁をなくし、個ではなく集団として一つになるんだよ。」

「…え？」

「こう、なんか白い巨人が現われてな、人が誰しも持つてる心の壁を取り払うんだ。そうすることで人類は一つになるんだよ。」

「も、もしかして、【インパクト】の理由って」

「そう、【サードインパクト】を起こすから【インパクト】だ。まあ、この世界ではセカンドインパクトになるのだからうけどな。」

「えっと、嘘、だよな？」

「ホントだぞ？何なら見せてやろうか？優子！雄二！」

「来たわ！」「来たぞ！」

「2人とも、いつの間に！？」

「よし【起動】」
アクティクン

「「そして【試獣召喚】」」

「どうしようこの展開、ついていけない……」

「よし、行くぞ優子！【インパクト】！」

そのとき、巨大な白い巨人が現われ、僕の意識はなくなった

「って言う夢を見たんだけど。」

「んなことあるわけねえだろ。」

これがやりたくてインパクトにした作者

ちなみに、今回の話は本編と全然関係はなく、キャラ崩壊もしてるのでそういうのが嫌いな方は戻ることをオススメします

わふーな話。多分ギャグ。本編とは関係ありません。

「なあ、優子。」

「うん？どこかしたの？」

「さつきさ、俺、お菓子とか色々買ってきたじゃん。」

「うん、そうね。」

周りにはお菓子の入った袋がたくさんある。

一番多いものはうい棒だった。

「それで、2158円だったから3000円で払ったんだよね、面倒だったから。」

「うん。」

「そしたらさ、お釣りは842円じゃん？なんか全部1円玉と10円玉だけで返ってきたんだけど。」

「いじめられてるんじゃない？というか、よく財布に入ったわね。」

ちなみに、1円玉と10円玉の比率は約4：6だった。

入らなかった分は全部募金してきた。

もしかしたらそれが目的だったのかもしれない。

「試食コーナーのやつを全部食べてきたのが悪かったのかな。」

「多分それが原因だと思うわ。」

「バカ。美味そうだったんだよ。」

「バカは確実にあんたでしょ？全く……」

ちなみに、わかっていると思うが、今回の話はほとんどがギャグで出来ている。

本編とはさっぱり全く全然リンクしてないので安心してもらいたい。

「とりあえず、暇だから街に出かけてくるよ。」
「そう、いつてらっしゃい。」

恋人は素っ気無かった。

ホントは「アタシもついて行くわ」と言っつのを期待していた有馬は少しシヨックだった。

軽く泣きながら走り去っていった。

「ああ、暇だ。」

暇だからと街に出たのに、結局暇なようだ。

「というか、なんで誰ともエンカウトしないんだよ、おかしいだろ。」

彼にとって友人はモンスターと一緒にらしい。

「なんか誰でもいいーからこねーかなー。」

「あ、有馬。どうしたの？こんなところに一人で。」

モンスターが現われた。

有馬は後をつかれた。

「明久、お前かよ…はあ、つまらん。」

「開口一言目がそれって酷くない!？」

誰でもいい訳ではなかったらしい。

ちなみに、彼の脳内ではス イム系しかでないところでメタルン グを待っていたら、ス イムベ マズンが来たような心境だった。

「まあいい、どうした明久、なんのようだ？」

「僕は全然良くないけどね。ちょっと今、雄二たちと遊んでてその 買出し。」

「：お前、そんな金あるのか？」

「大丈夫。雄二の財布から抜き取っておいたから。」

盗んだのかよ、とは突っ込まなかった。

「それでさ、ちょっと量が多くなりそうだから手伝ってほしいんだ けど。」

「んー、まあ、それくらいなら良いだろう。何買った？」

「とりあえず、DVDプレーヤーとTV。あとは、まあ、保健体育 の実習ビデオかな？」

「お前、TVも持ってなかったのかよ。そして、お前はそれを俺に もたせるつもりなのか？というか、俺にも見せる。」

突っ込みつつボケる。簡単なことではない。

彼ならきつと芸人として生きていけるだろうと明久は悟った。

「とりあえず、ヤ ダ電機に行こう。」

彼は自分のポイントにするつもりだった。

「あー、重いな、おい。」

右手にテレビ（最新型の60インチ）、左手にDVDプレーヤー（ブルーレイも見れます）を持って有馬が呟いた。歩いていると通行人は道を明けてくれるという状況である。明久は、保健体育の実習ビデオを選んでいるため、有馬は一人だった。

「…明久の家ってどこだっけ？」

迷子になっていた。

以前行ったことあるはずなので覚えてはいた。だが、女子高生を見つけると、そっちについてしまったため、道がわからなくなってしまったのだ。

「うーん、携帯を使おう。」

そういつて携帯を取り出した。現代っ子だった。

「なん…だと…？」

しかし、電池は切れていた。なんつーベタな…と有馬は思っていたが、諦めて素直に道を探すことにした。

「てかよー、ここら辺はたぶん見覚えがあると思うんだ、なんかいるだろ？」

一応、自分の生まれ育った街であるから見覚えはあった。ただ、詳しく覚えていっているわけではなかった。

「うーむ…誰かに道を聞くか？」

多少人見知りの入っている彼としてはあまり使いたくなかったが、致し方ないのでやろうと思った。

いくら力があるといってもさすがにTVとDVDプレイヤーはきつかったのだろう。

「あの、すみません。」

とりあえず、美少女っぽいのに声をかけてみた。

「ちょっと道にまよ　いえ、今暇でしたら一緒にお茶でもどうですか？」

はっ、違った！

心の中でしまったと有馬は思ったが、とりあえず、断られるだろうと予想していた。

「うーん…はい、かまいませんよ？」

予想していたが、OKをもらってしまった。

ヤベ、これからどうしよ…

有馬は考えた結果、まあラッキーと思い、ファミレスにいこうと開き直った。

その後に般若がいるとも知らずに。

「ありま〜〜〜？どうしてアタシという彼女がいながらナンパしてるのかなー？」

「ゆ、優子！？なんでここに！？と言うか誤解だ！違うんだ！」

「誤解？どこが？確実にアンタは今その子をナンパしてたでしょ！」

「だからそれが違うんだよ！」

有馬は必死になって言い訳を考えていた。

正直、生命の危機を感じていた。

あれ？なんで昼間なのに星が見えるのかな？てかあれ、北斗七星？でも、一つ多いような…

どうやら死兆星が見えているようだ。

「あの、あれだよ！実はこの子、UMAなんだよ！で、秘密諜報捜査員である俺としてはそのサンプルを捕まえないといけないと言う使命が」

「ちよっ、待って！逆！俺の間接そっちに曲がらない！あああー……………！！！！！！！」

「あ、有馬、遅かったね　　ってどうしたの！？そんなに死にそ

うな感じになって！」

「あ、ああ、ちよっとな。」

マジで死ぬかと思った。

走馬灯まで見えたし、サンズリヴァーでじじいと格闘もしてきた。ちなみに、明久の家には雄二とムツッリーニがいた。

「とりあえず、ほら、持ってきたぜ？」

と違ってTVとDVDプレイヤーを渡す。
正直、彼はこれのために生まれてきたと言っても過言ではないと自負している。

そのために今日一日色々頑張ってきたのである。

「よし、明久。例のやつを見るぞ。」

「うん！じゃ、ちょっと待っててね。」

そういつて明久はさまざまに準備に取り掛かる。

それも、ありえない速さで。

ムツツリーニが写真を撮るときの速さと変わらなかった。

「よし！これで準備完了！早速見よう！」

「……おう！（……おう）」

ピッ！と言う音でDVDを入れた。

だが

「てめえ明久！なんで本当に保健体育のDVD何だよ！」

こんなオチかよ……

今日一日頑張ったことが無意味に思えてきた。

完

わふーな話。多分ギャグ。本編とは関係ありません。（後書き）

あ、ども、桜餅です

一応言っておくと、今回のお話は本編とは関係ありません。

有馬はそんなにエロくないですし、優子一筋です。

ただ、今回は私の気分的にやりたかっただけです。

あと、本当はさくらちゃんの話書こうと思ったけど、行き詰ってやめました。

見たい人います？いるんだったら頑張れる気がする

それでは、次回は桐野龍君が登場します（予定）

さくらちゃん誕生の話を見たいぞー！っていう感想がなければそう
なっちゃいますぜ

てか、全然構成考えてないorz

まあ、頑張ります

でわノシ

31話目。転校生！？あー、なんか憂鬱…（前書き）

「今回登場する桐野龍はMonkeyEagleさんのオリジナルキャラクターだ。ある日、感想があつたので見てみたらオリジナルキャラクターの設定が！ちなみに、最初作者はわりとマジでびびっていてクラスメートに「え、ちょ、これどうしよう？」とキョドっていた。まあ、作者に技量が無いからな。不安だったのだろう。（ほっとけ！）」

ちなみに、今回で設定を全部説明できるかはわからないのですが、頑張ってみます。

原作キャラと自分の作ったキャラ以外を使うのは初体験。

上手く出来なかつたらごめんなさい><

31話目。転校生！？あー、なんか憂鬱…

「あー、今日ここに転校生…いや、編入生がくることになった。」

あの如月ハイランドでのデートから数日たったある日、学校のHRにて鉄人が言った言葉。

てか、転校生？いや、編入生といい直してることとは、元々俺らと一緒にだったやつ？

む…：わからん。

「桐野、入って来い。」

「はい！」

そういつて一人の男が入ってきた。

ふむ、顔は結構格好いい部類に入るが、顔に切り傷があってちょっと怖い。

やくざですかーって感じ。ちなみに左目のところだけど見えてるっぽいな。

短髪っすね。

「イギリスのロンドンから来ました。桐野龍です。これからよろしくお願いします。」

ん？帰国子女？

なんかキツチリしてるっぽいけど。

んー、でもこれ本性じゃないな、多分。

や、というよりはこつであるうとしている感じ？

「来たな、龍。」

「久しぶりだね、龍。」

「ああ、約束したからな、雄二。明久も、久しぶりじゃねーか。」

おりよ？訳あり？

とりあえず、昼休みになった。

桐野とか言う転校生について雄二に聞いても「まあ、後でな。」の一点張り。

それで、今は屋上にいつものメンバー＋桐野で飯にしている。

「で、雄二、結局そいつとはどんな関係なんだ？」

聞いてみた。

だって気になるし。

「ああ、龍はな、中学時代の俺の　いや、俺たちの友人だ。な、

明久。」

「うん、そうなんだ。僕と同じ中学出身だったんだよ。」

明久と同じ中学のやつねー、ふーん。

「じゃあ、雄二との接点は？」

「あー、まあ、あの時の俺はちょっと荒れててな。喧嘩しまくってたら龍とあつて、気があつて友達になったみたいな関係だな。」

…おお！あれか？こう、拳で語る友情的な。

格好ええのお…

うーむ、最近自分のキャラが一定としてない気がするのは何故だろう？

いつものことだけござ。

「俺は宮村有馬。よろしく頼むよ。」

と俺を皮切りに、みんながあいさつしていく。
というか、昼休みまであいさつしてないってのはどうなのだろうな、
と少し思った。

「改めて、俺は桐野龍だ。中学卒業までは日本にいたが、その後鉄人の世話でイギリスに留学していた。とはいっても、あいつら俺を日本人だからってバカにしてくるからちよつと俺のほうが頭いいって証明してやったら喧嘩ふっかけてきて、それが原因で強制送還された、というわけ。」

…おおう、なんといいこうつたい。

もしかして、左目の傷はそれが原因？

きゃー怖いわねー、なんて思ってもないことを言ってみたり。

喧嘩なんて、俺もよくしたし。

ん？でも、ってことは

「なんでFクラスに？お前、頭いんだろ？」

イギリスに留学して、あつちのやつよりも頭いいってことは、Fクラスみたいなバカの集まりに入るわけがないし。

「それはだな」

「いや、それは俺が説明しよう。」

雄二がしゃしゃり出てきた。

んー、まさかとは思っけどなー…

「Fクラスの新戦力の為だ。」

やっぱり！笑

そんなこつたるうと思つたぜ。

「龍は喧嘩の方では名が知られているが、勉強ではそこまで知られてないんでな。だから、試召戦争での新戦力になるんだ。」

「ああー、なる。」

まあ、わざとFクラスに入ってきたわけかー…

あ、それが約束つてやつ？

とりあえず、そんな感じで桐野から色々な話を聞いた。

一人で300人と喧嘩しても無傷で勝利とか、「土佐の狂竜」とかつていう二つ名がついてたりとか

あ、あと、重要なことで、こいつ、あつちでの喧嘩が原因で『観察処分者』になつちまつたらしい。

本人はあまりその意味を知らなかったみたいなので、さつき教えてやった。

「そつえばさ、龍つて結構女の子から人気があつたけど、彼女とか作つたの？」

急な明久の質問。

ていうかこいつ、モテてたんだ…

「あー、人気がある？初耳じゃけんの。」

「あれ？そつなの？僕、龍を好きだつていう人結構知つてたけど。」

ほほお？明久がねー…

意外だな。こいつ、そういうのには疎いと思つてたのに。

あ、ちなみにこいつ、高知出身で、偶に土佐弁が出るんだってよ。

「はっ、女と付き合うだなんて、脆弱な男のすることじゃき。おりやそんなやつらとは違つけえの。」

…あ！？脆弱だ！？

「てめ、もういっぺん言つてみる！」

「なんじゃ急に…なんぺんでもいったる。女と付き合うだなんて脆弱な男のすることじゃ。」

ブツコロ

「誰が脆弱だ、てめ！ぶつ飛ばすぞこらー！」

「…あー、アンタ、彼女もちけ？はっ、どうせ女の尻にしかれてんじゃろ？」

ぶちぶち

こいつ、喧嘩売つてらー…

「はっ、てめーなんてただ単に彼女いたことねーからひがんでるだけだろ？いやだねー、こつという男は。」

「なんじゃと！」

ダメだよこいつ。全然ダメだ。恋の楽しさをしらねーで適当言つてやがる。

恋愛がどれだけいいものかも知らずにバカにしてやがる。

この、恋愛至上主義者宮村有馬が、こいつを許すことは出来ねえ。

「面かせよ。ぶっ殺してやる。」
「上等ぜよ。返り討ちにしちやるけえ。」

明久やら雄二やらが止めに入るが気にせず、皆から少し離れたところにいく。

「てめーが負けたら、さっきの発言を訂正しろ。恋愛ほど楽しいものなんてそうそうねーんだ。」

「じゃあ、てめえは土下座でもしてもらおうか？地べたに面を押し付けてやらー！」

そう言つて桐野は殴りかかってくる。
てか、はやっ！

「っ！あぶねーだろ！いきなり殴りかかってくるなつての！」
もっところ、準備とか、そういうのがあるんだよ、こっちは。
気をためたり、チャクラをためたりとか！

「…まさか、俺の拳を交わせるとは思つてなかつたぜよ。」
なんか驚いてるっぽい。
てかなんだよてめーは！自信過剰ですか？
あんなもん、誰でもかわせるだろーが！多分！

「じゃあ、次はこっちから！」
右ストレート！はフェイントで本命は足。
転ばしてマウントポジション取ったら俺の勝ちだし。

「きかないぜよ！」

そういつてあいつはストリートを受け流しつつ、足も守る。うーむ、こいつ、強いかも。

困ったなー…少林寺つてさ、あくまで護身術であって、そんな自分から襲うような技があるわけでもないんだよね。

俺は襲うけど、それは少林寺を元にした我流だし。

「とりあえず、久しぶりに普通の喧嘩してやるか。」

俺は、溜めた気を、全部対外に放出した。

「はあ、はあ…てめーもなかなかやるじゃねーか…」

「お前、もな…」

結果、ドローだった。

てかこいつ強いな、おい。

あの時の右ストレートが入っていたら、俺は確実にやられていただろう。

「てめーとは、仲良くなれる気はしねーが、一応よろしくな。」

「こつちこそ、仲良くなる気はねーが、一応よろしく。」

あー、俺らつて、全然違うけど、似てるかもな。

とりあえず、新しい仲間が増えた。

この後、鉄人にこつてり絞られたのは別の話。補習はもういや！

31 話目。 転校生！？あー、なんか憂鬱…（後書き）

うまく使えてなかったらごめんなさい
ちよっと難しかったです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7991m/>

バカとテストと常識人？

2010年11月25日11時28分発行